
佐和山物語
さわやま
桜色の時はめぐり
Aya Kutsuki
九月 文

佐和山物語

桜色の時はめぐり

九月　文

BEANS BUNKO
16487
角川ビーンズ文庫

佐和山物語

桜色の時はめぐり

九月　文

16487

角川ビーンズ文庫

目次

序章 光のどけき・一 7

あやかし屋敷のひなまつり 13

間章 光のどけき・二 52

時を揺らす春風 57

間章 光のどけき・三 121

触らぬ姫に祟りなし 125

間章 光のどけき・四 161

空蝉の君 165

終章 光のどけき・結 254

あとがき 271

断章 白き猫の招きにて 276

イラスト／久織ちまき

佐和山物語（さわやまものがたり）

桜色の時はめぐり

ものがたり

◆時は戦国あけてすぐ。あこは嫁入りの旅の途中で三ヶ月の時間を遡り、「時迷い人」となってしまう。そこで出会った許婚の直継は、はじめはあこに冷たい態度をとるが、様々な困難を経ていつしか二人は両想いに。

◆しかし、本来の時間に戻ることを決めたあこ。そこで出会う許婚は彼女が恋した直継ではないかもしれないという不安を抱えて時を超えたあこを待っていたのは、唯一無二の愛しい人だった――。

登場人物紹介

鈴木主馬（すずきしゅめ）

采女の兄。ひょうひょうとしているが実は切れ者。着道楽。

小一郎（こいちろう）

あこの幼なじみで、もと許婚。今でもあこを密かに想っている。



木俣守勝（きまたもりかつ）

直継の守り役その2。陽気で生命力に溢れ、モノノケも近づけない。



たま

謎めいた童女。実は、井伊家の守り神の水神様。

井伊采女（いいうねめ）

直継の守り役。穏やかで人当たりがいいが、仕事中毒気味。


井伊直継（いい なおつぐ）
あこの許婚。人とは思えぬ美貌の持ち主。強い「祓い」の力を持つ。
あ こ
明るく気丈な、大名家のお姫様。特技は武術。まっすぐすぎる性格。
鳥居成次（とりい なりつぐ）
あこの叔父。大名というより狩人のような風貌。動物に好かれる。
井伊直孝（いい なおたか）
不器用で口下手な、直継の異母弟。現在は秀忠に仕える。



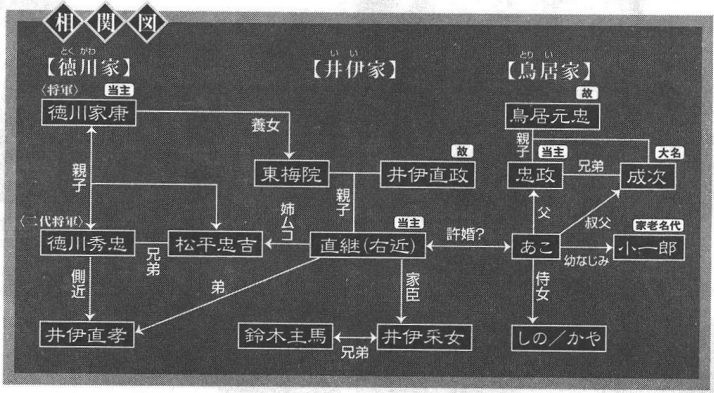
佐和山の、異界の住人たち

石田三成（いしだ みつなり）
元佐和山城主。関ヶ原の戦いで散ったが、徳川の世を憂い甦る。

嶋左近（しま さこん）
三成に過ぎたるもの、と言われた名将。勇敢な戦闘の達人。

大谷吉継（おおたに よしつぐ）
三成の盟友。三成の求めにより、軍師的存在として復活。

相関図



序章　光のどけき・一

――早起きすると幾両か得をするというけれど。

どれだけ早起きしたって、すべきことをしていたら余る時間などたかだか知れている。

しかもそのあと、これからはじまる一日のことを思えばそちらに意識が向くのも当然で、すぐ近く、手の届く距離にいても心は遠い。

「では、行ってくる」

上座を立った直継にあこはほっと我に返り、「いってらっしゃいませ」と手をついて見送った。

（今日もあまりお話しできなかったな……毎日のことだけど）

ふたりきりでいられたのは半時――いや、おそらく四半時ほどだ。

しかも政務のために衣を整えた後だと、直継の意識はきっちり仕事に切り替わっているらしく、夜みたく抱き寄せてはくれない。あこも衣が皺になることを考えると近づけない。

いつもはやわらかく香る白檀も朝はぴりっとして、甘い考えを吹き飛ばしてくれる。

触れ合えないなら意識しないでおこうと努めてみるものの、ふとした弾みで昨夜のこと――向けられた視線や触れられた感触が思い出されたりして、懸命に恥ずかしさを抑えこんでいる

と冷静なままの直継とますます距離を感じてしまって、無難な会話だけで時間が尽きる。

（しかも今日は、江戸からご使者が来るっていうし……）

夜は使者の歓待の宴だ。酒が入ると、会いに来てくれるかどうかも微妙なところだ。

もっと一緒にいたいなー、というのは贅沢な悩みだとわかっているけれど、すこしでも気にかけていてくれるのかなー、と考えるのは世の中一般的な悩みだと思う。

表での仕事に対し、奥向きの仕事はひとりでいる時間が長い。その分、物思う時間も長い。毎日会っている自分ですらこうなのだ。多くの側室がいる家ならなおさらだろう。

一人占めできているだけでも贅沢だと思うべきだ。けれど。

（夜中ずっと一緒にいられたらまた違うのかな……ずっと一緒にいたい、な）

――だんだん贅沢になっている気がする。

あこはぱしっと両頬を手で覆うと、邪念を追い払った。

自分には自分の仕事がある。切り替えが肝要だ。

さて、と仕事に取りかかろうとしたところで、はっと思い出した。

「――右近殿、待って！」

あわてて廊下に駆け出すと、うららかな光の中、直継は艶やかな髪を揺らしてふり返った。

「どうした」

訊ねる声音は、感情を伴わずに落ち着いたもの。人の上に立つ者として、感情的になること

を律しつづけた賜物だ。
肌理細やかな肌に繊細な目鼻立ち、伏せがちな切れ長の瞳があこを見下ろす。
その瞳は黒。だが陽光を受けると、まるで渡来の玻璃のように碧の光が浮かび上がる。
あこがその姿に見とれていると、直継の瞳に宿る光がわずかに剣呑さを増した。
「あ、ごめんなさい。あのね、丈を測らせてほしいの」
見送った後で呼び止めるなど、はしたないことこの上ない。だがふたりきりで過ごす時間は人払いをしていて、侍女の目はない。今ばかりは許してもらおうと、あこは竹尺を手にそそくさと駆け寄った。
直継は言われるままに腕を広げ、されるがままになっている。
竹尺には去年の丈が印してある。どうやら、身丈も裄丈も一寸以上出す必要がありそうだ。
五月に再会したときも思ったが、直継は背丈がずいぶん伸びた。
毎日見ていると気付かないが、昨年の竹尺を見るとその違いはあきらかだ。
「もう衣替えの時季か」
「ううん、まだ日はあるんだけれど、じっくりやりたいから」
「そなたがするのか？」
直継は驚いたように、前に回ったあこを見下ろした。
井伊家では、季節ごとに御用達の商人がちゃんと身の丈を測り、小袖も羽織も新調している。

去年残した衣類の裾出し、袵出しはすべて侍女任せだ。

言外に、繕いものなど下の者にまかせればいいと言っている。けれど。

「あの、ちゃんとかやに教えてもらって毎日練習しているの！　まだそんな上手じゃないけど、絶対！　みっともないものにはしないから！」

あこは竹尺を手に力説する。

針は女のたしなみだ。さすがに色柄の難しい小袖は無理だとしても、せめて白小袖くらいは自分の縫ったものを着てもらいたい。

直継はそんな自分を不思議そうに見下ろしていたが、ふっと表情を緩めると、広げていた袖で、そのままあこを抱きすくめた。

（え!?）

白檀の香りに包まれてあわてふためくところに、額に落とされる口づけ。

あこが呆然と立ち尽くしていると、香りはふっと離れ、

「期待している」

そんな言葉を残して、直継は表へと足を向けた。

胸の中いっぱいに吸いこんだ白檀の香りが、身体中に染み渡ってゆく。

直継がいなくなった後もあこはその場で立ち尽くしていたが、眼前にはらはらと舞い散る花びらに我に返った。

（あああああ……っ!!）

その場にくずれ落ちて、廊下に手をつく。

朝の万端仕事前の雰囲気に呑まれて、油断していた。

（――――ずるい）

身の丈も、行動も、なにもかも。

いつも手のひらの上で転がされている気がして、くやしい。

あたり前のように額に落とされた口づけは、自分の額がちょうどそこにあったからだ。

――もうどれほど身長に差がついてしまったのだろう。

育ち盛りと言ってしまえば一言だが、身の丈だけでなく、顔立ちはもちろん、しぐさや表情、心の内まで勝手に成長して、自分ひとり取り残されている気がする。

直継を取り巻く状況、それが成長せざるを得ない要因なのかもしれないが――――

深い淵に沈みそうになって、あこはひとつ首を振って暗い影を追い払った。

（さて、今日も針の練習がんばらなきゃ！）

あこはすっくと立ち上がると天を仰いだ。今日もいい天気だ。

廊下を進んで、すぐ近くのしのとかやの部屋に向かう。だがその足はすぐに止まった。

廊下の真ん中に、桜の花びらと共に舞い下りてきたかのようにその物体は転がっていた。

朝は、やれ手水鉢だ、やれ朝餉の膳だと、幾人もの侍女が行き来する。そんな場所で、落と

し物を見落とすはずがないのだが。

（なにかしら……）

仔猫ほどの大きさの赤いそれに近づいてみる。

だがそれを覗きこむなり、あこの背筋に冷たいものが這い上がってきた。

「これってまさか――」

――廊下に転がっていたのは、見覚えのある姫人形だった。


あやかし屋敷の
ひなまつり

——ここから、出して。

ここは暗くて、狭(せま)くて、息苦しい。
ここはわたしのいるべき場所ではないのでしょう？
もういらないというなら出てゆくから。
ここから出して。

はやく会わせて——あの人に。

「今朝もずいぶんごゆっくりでしたねぇ。道中はいっつも早起きでしたのに……あのー、姫さま？」

「え？」

あこは呼びかけられて我に返った。

あたりを見回すと愛宕屋敷の自室だ。開けひろげられた障子の向こうにはみずみずしい緑の庭がひろがり、芍薬の蕾がふくらみはじめている。

どうやら朝餉の最中に箸を持ったまま意識が飛んでいたらしい。

「あ、ごめんなさい。ありがとう」

差し出された漆塗りの椀を受け取ると、かやが心配そうに見つめていた。

「姫さま、どうしちゃったんですかぁ？　寝坊のうえにぼーっとしちゃって」

今はまだ午前だが、普段朝焼けの時分から起きているあこには十分寝坊だ。

「こちらの寝所はよほど寝心地がいいとか？」

「んー、寝心地がいいっていうか、どちらかといえば夢見が悪かったような……」

「夢見、ですか？」

先ほどもそれを思い出そうとして、思惟の中に沈んでいた。

夢のかけらを摑もうにもそれはやわらかな陽光に溶けて消えてしまい、あとはただ、もやもやとした気分だけが澱のように残っている。

「きっと長旅の疲れが出たんですよ。江戸から半月もかかったんですから」
「でも道中の宿所でもこんなことはなかったでしょう？」
「このお屋敷に慣れて、気が抜けたんじゃないですかね？　春眠暁を覚えずって、朝寝が気持ちいい時季ですし」
（そういえば春なのよね）
あこが嫁ぎ先にゆくために江戸屋敷を発ったのが四月で、佐和山に着いたのは五月。
なのに愛宕屋敷に入ってみたらなぜか二月で、数日経ったいまは三月だ。
どうやら佐和山に入る直前になにかに化かされ、時迷い人になってしまったらしい。化かされたことを真っ先に知ったあこですらいまだに混乱するのに、先日事情を聞いたかやは、
『まぁお山にはタヌキもキツネもいますから、しかたないですよ』
という一言で納得した。ある意味、強者だ。
「それにほら、昨日も一昨日も夜は殿さまとご一緒で、お休みが遅かったですから」
思いがけない方向に話が飛び、あこはむせかえった。
「ごっ、ご一緒って、右近殿とはなにも……っ！」
激しく動揺してしまったが、まだ子どものかやに他意があるはずもない。
あこは落ちついて落ちついてと自分を宥め、ことさら大人ぶって「右近殿とはなんでもないから」と言ってきかせた。

一昨日、佐和山の怨霊に囚われたところを直継に救われ、昨日は先代直政の月忌法要のあとに一緒にすごす時間を取ることができた。

しかし直継も疲れているはずとあまりゆっくり話すことなく自室に引き上げたので、ご一緒だったからといってなにかがあったわけではない。

実際、愛宕に来て数日が経ち、やっと会話が成り立つようになった、その程度の関係だ。

（本当はもっとゆっくりお話ししたかったんだけど、なかなかお時間をいただけないのよね。えっと、愛宕にきて、ひいふうみいよ……今日で五日め？）

「あ、明日って三月三日？」

「ひなまつりですねー。二度もくるなんて思いませんでしたけど」

（そりゃそうよね）

普通、ひなまつりは年に一度だ。

「もう一回したほうがいいのかしら」

ひなまつりは穢れ祓いの儀式でもある。

人の形をした紙に触れ、穢れをうつして流す。

あこはすでに江戸で済ませてきたが、化かされて時の迷い人になってしまった立場上、穢れ祓いは何度でもしておいたほうがよさそうだ。

「いいですね！　おひなさまを飾って、ひし餅を食べて」

「でもわたしのおひなさまは、他のお道具と一緒で持ってきてないし……できるのは桃のお花を飾るくらいかしら」

「なんなら作ってみます？　ひな人形」

「えっ、作るの!?　自分で!?」

恥ずかしながら、裁縫は不得手だ。

「ご心配なく。姫さまは朝餉を召しあがっていてくださいな」

そう言ってかやは部屋をあとにすると、ほどなく裁縫箱を手にもどってきた。

裁縫箱の上には、紅、藍、緑色と、色とりどりの端切れが積みかさなっている。

「御家の侍女の方にもらってきました。まずは男雛ですよね。どんなお衣装にしましょう？」

かやは紺や藍など青の布をならべて、色合いを見る。古布なので多少くたびれているものもあるが、見るからに手の込んだ染め物の端切れも混じっている。

（まさか右近殿の衣の端切れとか？）

愛宕屋敷にあった布なのだから、そうだとしてもおかしくない。直継にも幼いころがあったはずだし、幼少時に着ていた衣から糸を抜いたものもあるだろう。

かやは色を決めると、型もとらずに鋏で裂いてゆく。なにも考えずにただ切り裂いているようにしか見えないが、布をうねうねと折りながら針をはしらせる。そして折り返すと、立派に人型になっていた。

「ほら、できました！」

こまやかな飾りつけをして綿をつめ、「はい」と渡される。それは手のひらに収まるほどの大きさの、紺色の衣の立ち男雛だった。

目鼻は黒糸で刺しゅうされている。眉は細く、目は玉結びを応用しただけの単純なもの、口は引き結んで澄ました顔をしているものの、どことなく愛嬌がある。

もともと器用だと思っていたが、思わぬ特技があったものだ。

「あら？　この男雛……」

作っている最中は衣冠姿だと思っていた。だが頭の後ろに垂れている黒い布は、冠の後ろにある垂纓を模したものではなく――

「これ、もしかして髪じゃない？」

するとかやは、さもあたり前のようにうなずいた。

「ええ。だってそれ、殿さまですから」

「えええええ!?」

あこは思わず人形を落としそうになって、あわてて抱きとめる。

人形をまじまじと見つめると、逆に見つめかえされてしまった。

（たしかに右近殿は長い髪を結いあげているけれど……本人の方がよっぽど人形っぽくない？）

直継は肌が白く、整った顔立ちをしていて、あまり表情を出さない。本人自身が職人の手で

作った端整な人形のようだ。

しかし似せて作っただけあって、周囲に興味なげに澄ましているくせにどことなくかわいいあたり、本人のようにも思えてくる。

「ちゃんと姫さま似のおひなさまも作ってさしあげますから。ほら、ちゃんと打掛用の生地ももらってきたんですよー」

かやは端切れを振ってみせる。松梅と鶴の刺しゅうの入った紅地。どこからもらってきたものか、あこがいま着ている打掛によく似ている。

「そ、それはいいから！」

「えーどうしてですかぁ？」

（飾れるわけないじゃない！）

直継と自分の姿を模した人形。それが仲良くならんでいるところを本人に見られでもしたら。人形自体はとてもかわいいのだが、想像すると恥ずかしすぎる。

「これは預かっておくわ」

あこはつとめて冷静にそう言って、直継似の人形を打掛の袂に入れた。

「とか言って、殿さま雛をひとり占めにしたいんじゃないですかぁ？」

「ちが……っ」

挑発に乗り、あこはわざとらしく咳ばらいをして仕切りなおす。

「このお屋敷にだっておひなさまはあるでしょ。それを飾ってあげないとね」
「お屋敷に姫さま以外の姫はいないみたいですけれど？」
（そういえば、右近殿からご兄弟の話ってお聞きしていないような……）
直継は父と幼くして死に別れ、母も心の病で仏堂に籠りきりで、家族というものをあまり知らない人だ。家を継ぐべき男子は直継だけだったと聞いているから、兄弟はいないのだろう。せめて姉妹がいればよかったのだが、屋敷内でそれらしき人を見かけたことがない。
先日、直継は思わぬ形で父の面影と接することになり、それと同時に腹心の家臣を喪いかけた。その腹心――采女は深手を負い、まだ目覚めていない。
采女は先代直政の養子、直継にとっては兄にもあたる存在だ。この一件が心痛となっているだろう今、浮かれた気分で家族のことを訊くのは気が引けた。
（家族……？）
なぜかその言葉がひっかかった。
（なんだったかしら？）
昨日の夢の欠片だろうか。
あこは浮き上がってきたそれを摑まえようとしたが、「姫さま？」とかやに呼び戻された。
「あ、ごめんなさい。まずは侍女に聞いてみましょうか」
いまは夢よりもひな人形が先決だ。

あこは廊下に出ると、運びものをしている侍女を呼び止めた。
「あの、このお屋敷におひなさまはないのかしら？」
すると侍女は思いだしたように「ああ、もうそんな時季でしたわね」とうなずいた。やはり屋敷に姫がいないと忘れがちになるものらしい。
「たしか姫さまの御品が蔵にあるはずですけれど……」
（あ、やっぱり姫がいるのね）
殿のお許しがなければ立ち入るわけには、と侍女は表情を曇らせる。
「それもそうね。ありがとう」
あこがあっさりと引きさがると、侍女は一礼して立ち去った。
「殿さまにお許しをもらいにゆくんですか？」
かやの問いに、あこは首を横にふる。
蔵に入るには、ひな人形のことを話す必要がある。侍女が『姫さま』と言った相手が直継の姉妹か母かはわからないが、いやおうなく家族のことを思い出させる。
今はそっとしておいたほうがいい気がする。
「こんなことでお手をわずらわせるわけにはいかないもの。今回のところはあきらめましょう」
「じゃあやっぱり、姫さま似のおひなさまを……」
「それはダメ！」

「じゃあ姉さま似にしますから」
「もっとダメ！」
ええー、とかやは唇をとがらせる。どうあっても女雛を作りたいらしい。
「いやぁ、にぎやかでよろしゅうございますなぁ」
背後からした低い声音にふりかえると、中庭にいたのは木俣守勝だった。
ぴんぴんと撥ねた長い髭と恰幅の良さから熊のように見えるが、この壮年の偉丈夫は井伊家の次席家老だ。
「姫、もうお加減はよろしいので？」
あこは先日の月忌法要を欠席したのを、体調が悪かったことにしてある。
「ありがとう。もう大丈夫よ」
「これからどこかに行かれるのですかな？」
あこが部屋から出ていたことを不思議に思ったらしい。
「なんならこちらにお呼びしましょうか」
と言葉がつづき、直継の許に行こうとしているものと勘違いしているようだった。
「いえ、右近殿ではなくて、上巳の節句にどうしておひなさまが飾られていないのかしらと思ってさがしていたの」
「ああ、ひな人形ですか。当家の姫は江戸においでですからなぁ。たしか蔵に入れてあったは

ずなのですが……」

そう言って背中をむけた守勝に、ふたりは庭に下りてついてゆく。

守勝が向かった先は、屋敷の端にあるしっくい壁の土蔵だった。守勝は腰に下げていた鍵のひとつで錠を外し、中に入る。

蔵の中は薄暗いが丸や三角の窓のために視界が利いた。戦のときに銃口を入れて狙い撃つための銃眼だ。しかしそれらは明かり窓というにはあまりに小さく、蔵の中は夜の冷気をとどめていた。打掛を羽織ってきて正解だったようだ。

備えつけの棚にはところ狭しと木箱がならび、中の品の説明書きが貼られている。

守勝は「ええと、このあたりだったような……」と奥から持ってきたはしごを立てかけて上っていった。

守勝の身体の重みに、木製の細いはしごがぎしぎしと鳴く。折れやしないかと心配しながら見上げていると、かたんと音がして、頭上になにかが落ちてきた。

あこがとっさに身を縮めて頭をかばうと、それは手に当たって床に転がった。

「姫さま、大丈夫ですか!?」

「え……ええ」

痛みはまったくなかった。とてもやわらかいなにかだ。

それを拾い上げてみると、それは布で作られた姫人形だった。

良質の布で作られているらしく、手触りがとてもいい。目鼻は簡単に刺しゅうされているだけだが、表情豊かで、にこやかに笑っている。

「おやまぁ、なつかしいものが出てきましたなぁ」

守勝は木箱を抱えて、はしごを器用に片手で下りてくる。

「木俣殿、これを知っているの？」

「それは某が作ったものですから」

「ええ!?」

思わず守勝の手と人形を見くらべる。人形はあごが手を広げたくらいの大きさだ。首など守勝の指ほどの太さもない。

「木俣殿が繕いものなんてするの？」

（そのクマみたいな手で!?）

「なにをおっしゃいます。陣中では繕いものも洗いものも賄いも、すべて男がするのですぞ」

（まぁ、たしかにそうよね……）

戦で斬られて衣が裂けても、戦場には繕う女がいない。長期戦になると土地の女が日銭稼ぎにくるとも聞くが、基本的に戦場は男の世界、男手ですべてこなさなければならない。

「とはいえ、小田原陣のときは女人が大勢いましたがなぁ」

「小田原陣？」

「右近殿がお生まれになった年、小田原の北条攻めがありましてな」

その名に聞きおぼえがあった。

豊臣秀吉の命に背いて私戦を起こしたとして、北条家の小田原城は二十万とも三十万とも言われる大軍に囲まれた。徳川家も豊臣勢として城攻めに加わり、小田原城開城後、北条領であった関東は徳川家に与えられた。

徳川家は江戸に本城を置き、江戸が大都市として拓けはじめたのはこのときからだ。

「小田原陣は相手の降伏を待つばかりの気の長い包囲戦でしてなぁ。本陣のあたりは毎日が宴のようなものだったので、合間をみて右近殿にと思いまして」

「え、これって右近殿のものなの!?」

「ええ。右近殿はお小さいころから線が細くていらっしゃって、母君の東梅院さまが華奢でいらっしゃるのでまぁ当然といえば当然なのですが、繊細で、色白で、お笑いになると花がほころぶようで、これが姫君でいらっしゃったら将来いかばかりかと――」

「あ、あの木俣殿……？」

話が逸れてきている。

「もとい。お小さいころから病がちであられたので、まわりもいろいろ気をもみましてな。やれ守刀だ、やれ護符だと重臣がいろいろ持ち寄ったのですが、幼い右近殿は某の人形を手に取ってくださいましてなぁ。ああ某の心をよくわかっていてくださると心熱くなったものです」

「――あの、それって右近殿がおいくつのときの話ですか？」
「戦が終わった直後ですから、お生まれになって半年くらいでしたかなぁ」
（それって、この人形が一番握りやすかっただけなんじゃ……）
半年といえばやっと座るようになるころだ。目の前にならんでいるのが重い刀やぺらぺらの護符なら、生後半年の幼子ならばだれでも人形を手に取る気がする。
しかしそのようなことすら良い思い出なのだろう。直継は生まれながらの跡継ぎだ。どれだけ周囲に成長を待ち望まれていたかがわかろうというものだ。
「そういえば姫がお生まれになったのはそのころでしたか。もうあれから十年余りとは月日の流れは早いものですなぁ」などと、守勝はうんうんとうなずきながら思い出にひたっている。
「けれどどうして姫人形なの？」
子どもはものに憑かれやすいため、枕元に人形を置き、身代わりとなってもらう。だが直継の身代わりならば、人形も男の子であるはずだ。
「赤子とはいえ、添い寝してもらうならやはり女子のほうがよいでしょう」
「添い寝!?」
思わず顔が熱くなったが、幼いかやはなにに気付いたそぶりもなく、あこの手の中の人形を覗きこんだ。
「あ、この子、姫さまに似てますよ」

「えっ、本当!?」
「ほら、打掛の柄も、横髪を結わってる紐の色までおなじですし。大きさもちょうどさっきのお人形とおなじくらいじゃないですか？」
かやに言われるままに、打掛の袂から取りだしてならべてみる。するとおなじときに作ったかのように、ふたつはまったくおなじ大きさだった。
「ほら、ぴったりですよ！」
とかやははしゃぐが、偶然でここまで似ていると気味悪くもある。
「ほうほう、それは右近殿ですかな」
（やっぱりそんなに似てる!?）
守勝に一目で言い当てられ、あこはあわてて「そ、そんなことないです！」と男雛を袖にかくす。そして赤い打掛姿の姫人形を守勝の前に突きだした。
「こちらは元の所に戻しておいてもらえますか？」
「えー、連れていかないんですかー？　ちょうどいいじゃないですか、お似合いですし」
「だって右近殿の思い出の品を勝手に持ち出すわけにはいかないでしょ」
「某はかまわないと思いますが？」
あこは横槍を入れる守勝に向きなおると、懇々と説明した。
「木俣殿にはついこの間のことかもしれませんが、幼いころのものを見せられたり覚えていな

いようなことを話されたら恥ずかしいんです、とっても」
そういうものですかなぁと守勝は顎髭をなでていたが、
「まぁ、いろいろ難しいお年頃ですしな」
と納得し、姫人形を棚の上の箱にもどした。
そしてひな人形の箱を手にして、三人は蔵を後にする。

ふたたび薄闇に包まれた蔵の中で、かたん――と小さく音がした。

「ただいま戻りましてございます」
しのがあこの前で手をついて、帰参の挨拶をする。
「ご苦労さま。ずいぶん遅かったわね」
あこと共に来た鳥居家の家人は采女の邸に滞在しているため、手伝いに行かせていたのだ。
しかしもうすっかり陽も落ちて、あたりは真っ暗だ。あこも湯浴みをすませて、あとは寝るばかりという恰好だ。
その間、ずっとかやが世話をしてくれたのだが、姉さまが帰ってこないと延々と愚痴を聞か

される羽目になった。しのは大人なんだから大丈夫と言い聞かせても、「姉さまはお綺麗ですから！」と謎な理由を返されるばかりだった。

「采女殿のお邸は山の向こう側でしょう。夜道で足元とか危なくなかった？」

「采女さまの御家の方が送ってくださいましたので」

「でも向こうの方もお忙しいでしょう。遅くなるようなら、次からはお邸に泊めていただいてもいいんじゃない？」

「はい。ですが今日は、送ってくださった方も右近様にご報告がございましたので——つい先ほど、采女さまの意識が戻られました」

「えっ、本当!?」

「ええ。私は直接お会いしたわけではないのですが、にわかに邸があわただしくなって、帰る機を失してしまいまして」

「そうだったの……」

采女が石田三成に憑依され、直継の手によって斬られてから二日。

憑依した三成を追い出すために仕方なかったとはいえ、井伊家の守り神がいなければ、その場で命を落としかねない深手だった。

井伊家の〈力〉に関わることなので、しのとかやには采女が怪我を負った事情までは話していない。勤めの最中に刀傷を負ったことにしてある。

「それでご様子は？」
「まずは山を越えて、あとは養生していただけばよろしいそうですわ」
それを聞いてあこは胸をなでおろした。直継も今ごろ報告を受けて安堵していることだろう。
（ゆっくり養生していただかないとね）
湖のほとりの新しい城の普請にくわえて、あと数日もすれば二代将軍拝命のために徳川秀忠の一行が佐和山にやってくる。側役の采女も忙しい時期だが、いまは身体を治すことが先決だ。仕事熱心な采女のこと、放っておけば怪我をおしてでも出仕しかねない。
（そのようなことがないよう、しのに見張っていてもらおうかしら）
「――あら、ひな人形ですか？」
しのが、床の間に飾ってある人形に気付いて問うた。
「姫さまのお人形は江戸のはずでは？」
「ええ。だから木俣殿に頼んで、こちらの御家のものを出してもらったの」
井伊家は藤原家の流れを汲む家だけあって、ひな人形も京風で、向かって右が男雛だ。
「かやもひな人形を作ったんですけど、姫さまがひとり占めに――」
口を挟んだかやに、あこはしーっと口止めする。
「ああそういえば、先ほど廊下にこのようなものが」
そう言いながら、しのが懐から取りだす。

それを目にするなり、あこの息が止まった。
「……これってまさか……」
「姫さま……」
あこは背筋に寒いものを感じながら、かやと顔を見合わせる。
しのの手にあったもの——それは、蔵に置いてきたはずの姫人形だった。
「あ、あの、それ、どこにあったの？」
「え？　ですから、すぐそこの廊下に落ちておりました」
こちらのお屋敷にお小さい姫君がいるとは聞いていないのですが……としのは不思議そうに姫人形を見つめる。
（木俣殿が気をきかせて持ってきたとか……？）
しかしそれならば、あこが不在にしていても、廊下ではなく部屋に置いてゆくだろう。
「あら、このお人形、どことなくあこさまに似ているような……？」
「や〜め〜て〜〜〜〜!!」
あこは大声で叫んで耳をふさぐ。
「どうなさいましたの!?」
しのはあわててあこに駆け寄る。それと同時に手にした姫人形も近寄ってくる。
あこがとっさに人形を奪って投げ捨てると、人形は仄暗い縁側にてんと転がった。

「まぁ姫さま！　なんてことを！　物は大切にしないと祟りが出ると……」
「もう十分祟られてるから！」
え？　と、事情を知らないしのが首をかしげる。
そのとき廊下から声が聞こえた。
「なんでこんなものが転がってるのよ」
人形がしゃべった!?　とあこは身体をこわばらせたが、障子の陰から人形を拾いあげる者がいた。十歳ばかりの女童だ。
あこは思わず駆け寄ると、女童の手を取ってすがるように見上げた。
「たま～～～～！」
「な、なによいきなり！　勝手になつかないでよ。気持ち悪いわね！」
女童はあこの行動に不意をつかれたようだが、あわててその手を払いのけた。しかしそんな素っ気ない態度の小姑でも、いまばかりは後光射す観音さまのように見える。
女童は髪を胸元で切りそろえ、横髪を色紐で結わっている。肌は白く、黒目がちな瞳と紅をはいたような口元が印象的で、数年後にはどれほどの美女になるかと期待させる。
だが見た目は十歳でも、たまはすでに齢千年を超えている。本性は井伊家の守り神、井伊谷の天白磐座に祀る水神だ。
あこは女童の正体を知らない侍女ふたりを部屋に帰し、たまを室内に招き入れた。なんであ

なたの相手なんてしなきゃいけないのよ、とたまはご機嫌ななめだ。
「で、私になんの用なわけ」
「その人形なんだけど……」
「これ？　なんか見覚えがあるわね。なんだったかしら」
たまは人形を凝視する。
いつもなら、『すぐに思い出せないなんて年のせいかしらね』くらいの応酬をしているところだが、いまはたまの力が頼りだ。
「たしかこれは主さまの幼いころのものよ。なんであなたが持ってるの」
「蔵に入れておいたはずが、なぜか廊下に落ちてたの」
「人形が？　勝手に？　そんなわけないじゃない。自分で歩いて来たとでもいうの？」
「だから怖いんじゃない！」
直継人形と似てこの姫人形も見た目はかわいい。だがもはやそういう目では見られない。呪いの人形だ。
「あの、もしかして、これになにか憑いてない？」
「はあ!?」
「だって蔵にあったときも、なんか不自然に落ちてきたし……」
「主さまの持ち物に憑いているわけないでしょ！　失礼ね！」

「でも実際にこれはここにあるじゃない！」
あこの怯えように本気だと悟ったのか、たまは「しかたないわね」とため息をついて人形を凝視した。
燭台の灯りに照らされて、黒目がちな瞳の奥に緑色の光が走る。
その不思議な色合いは、本性の水神の姿が表に出ているのだろう、直継の目にも時折おなじ色が見える。
ゆっくり息を五回ばかりくり返したころ、たまは人形から目を離した。
「やっぱり悪いものは憑いてないわよ」
「え……そう、なの？」
その答えにあこは拍子抜けした。
たまは采女の治癒のために力が衰えているとはいえ、見まちがえることはないだろう。
「どちらかといえば、迷い人のあなたのほうがよっぽど憑いてそうよ」
「えっ、本当!?」
「あなたの場合、なにが起きるかわからないから勝手に山から出たりするんじゃないわよ。あと、人形はちゃんと蔵に返しておきなさいな」
「夜に蔵に行くなんてイヤ！」
「べつにだれも今日中に行けなんて言ってないじゃない！」

「こんな憑きものとおなじ部屋で寝ろっていうの!?」
「悪いものは憑いてないって言ってるでしょう!? 失礼な子ね！ 憑きもの同士、一晩仲良くしてなさいな！」
たまは憤慨して部屋を出てゆく。
あこは人形とふたり取り残され、あわてて侍女の部屋に駆けこむ。かやは昼に集めた端切れをならべ、姉に見せているところだった。
「しの！ かや！ あの人形、一晩あずかって！」
「え？ べつにかまいませんが」
「ねぇ姫さま、あのお人形に新しい衣を作ってあげましょうか？」
しのもかやも人形に怯えた様子はない。
あこは、部屋に転がったままの人形を侍女姉妹にあずけて休むことにした。

――ねぇ、どこにいるの？
息苦しい場所を抜けだして、せっかく出会えたのに。
また離ればなれになってしまうの？ どうして？

……ああ、そうね。会えないなら自分から会いにいけばいいのね。
だってわたしたちは――になるのだから――

あこが目覚めると、まだあたりは夜闇に覆われていた。
障子の向こうにも朝の気配は感じられない。
（早起きにしても早すぎない……？）
二日連続の寝坊がよほど気にかかっていたのだろうか。しかしこのような時間に起きてもしかたがない。もう一度寝なおしたほうがよさそうだ。
（その前にお手水に……）
厚い夜着から抜けだすと、夜の冷気が肌をなでた。春とはいうものの江州は山国、江戸より数段寒い。
あこは燭台の灯りを頼りに、衣桁にかかる打掛に手を伸ばす。すると絹のなめらかな感触に、いつもとちがう厚みがあった。
（袂になにか入れたままだったかしら）
あこは袂の位置を探り、袖口を開いて覗いてみる。
すると薄灯りにぼんやりと照らしだされたのは。

にこやかに笑う姫人形――だった。

「い……やぁぁ～～～～～～～～!!」

「姫さま！　どうなされました!?」

屋敷中に響きわたる叫び声を聞きつけ、しのとかやが障子を開け放って駆けこんでくる。

「あ、あれ……！」

あこはその場にへたりこんだまま、ふるえる指で打掛を示す。

しのは畳に落ちた打掛に向かって懐剣を抜きはらう。しかし夜風に灯りが揺れ、照らしだされたそれに気づくと、「あら?」と威勢をゆるめた。

「これって、先ほどの……?」

姉の後ろにいたかやは「おかしいですねぇ。あちらのお部屋に置いといたはずですのに」と近寄ろうとし、あこはその腰に抱きついて引きとめた。

「ダメよかや！　あぶないわ!」

「えー?　でも普通のお人形さんですよ?」

「普通の人形はひとりでここまで来ないでしょ!?」

「そういえばそうですねぇ」

涙目のあことは対照的に、その答えはどこまでも呑気だ。

（なんでこうなの!?　モノノケ屋敷だから!?）

つい先日から鎧武者や巨大蜘蛛に襲われどおしだ。しかし幽霊だの怨霊だの、この世にありえないもの相手のほうが落ち着いて対処できた。邪気のないものが相手だとかえって怖い。

（笑ってる……笑ってるってあの人形！）

にこやかな表情のまま畳に転がっている人形は、いまにも動き出しそうだ。

（笑顔のまま襲いかかってきたらどうすればいいの!?）

夜風が吹きこみ、灯りの揺れが大きくなる。伸びる影にまでびくっと身体をこわばらせていると、あわただしく廊下を蹴る音が聞こえた。

「なにがあった!?」

「右近殿……」

直継はすでに床に入っていたのか、白小袖姿で長い髪も下ろしたままだった。左手は刀の鞘を握りしめている。枕元のそれをつかんで駆けつけてきたらしい。

あこの怯えきった表情に、直継は神妙な面持ちで「――どうした」と問うた。

当主の姿に侍女ふたりは一礼して下がり、あこはふるえる手で打掛を指し示す。

「衣？　――いや、人形か？」

「別室に置いておいたはずなのに、あれがひとりでに袂の中に……」

直継は鞘を手にしたまま片膝をついて、右手で打掛をつまみあげた。
「……まだなにか入っているが」
「え!?」
直継が袂から取りだしたのは、またもや人形だった。
「あ、それは……！」
かやの作った男雛だ。男雛は勝手に入ったのではない。蔵から帰るときに袂に入れて、そのまま忘れていた。
直継は無言で男雛を凝視する。
（気づかれた!?）
まさか自分に似ているなどとは気づかないと思うが、なぜ冠をかぶっていないのかと聞かれたらなんと返答したものか。
しかし直継はなんら表情を変えることなく、刀を置いた手で姫人形を拾いあげる。そしてまた凝視すると、しばらくして面を上げた。
「双方、おとなしいものだが」
「え、そう、なの……？」
あこはおそるおそる近寄って覗きこんでみるが、人形が動く気配はない。二体お似合いのかわいらしい人形だ。

「じゃあどうやって袂に……？」
それはわからないが、と直継はあこに二体の人形を差し出す。
あこが恐る恐る姫人形をつまみあげると姫人形は指からすべり抜け、男雛の上に落ちた。
「い、いまの！　わたしが落としたんじゃないわよ!?」
指がふるえていたのはたしかだが、軽い人形を落とすほどではない。
直継は姫人形をつまみあげ、重さをたしかめるように上下させる。そうして何度かくり返すうちに姫人形は直継の手を抜けだし、男雛の上に落ちた。
「ほら、やっぱり！」
「多少引きあってはいるようだが大した力ではないな。問題ないだろう」
「ええ!?」
（どうしてそういう結論になるわけ!?）
「だって勝手に動くのよ!?」
力の大小にかかわらず、勝手に動く人形は変だろう。あきらかに問題がある。だが、
「動くだけなら害はない。幽霊などの類もただ見えるだけで襲ってこないだろう。それとおなじだ。放っておけ」
「そ、そういうもの……？」
たしかに人形があこに襲いかかってきたわけではないし、実害があったわけでもない。

幽霊が見えるだけでも十分に嫌だが、直継があまりにあたり前のように淡々と告げるので、そういうものかという気もしてくる。

（ここのお屋敷はそれが普通なの!?）

郷に入りては郷に従え。嫁入りするからは婚家の流儀に従うべきだ——が、そもそも根本的になにかが間違っている気がする。

「この人形も一緒にいたかっただけだろう。いたいだけいさせてやればいい」

「えっ!?」

「——どうした」

直継に不審そうに見つめられ、あこは「え、いえ」と言葉を濁した。

（なんか今、すごくかわいらしい言葉を聞いたような……）

あこも幼いころは人形も人とおなじように心があると思っていた。一緒に遊んだ人形にはいまだに思い入れもあるし、ちょっとした表情のちがいで感情を推し量ったりもする。

（右近殿だって、人形で無邪気に遊んでいた時期とか、あったはず……よね？）

そういえばこの姫人形は直継の幼いころのものだった。

女の子のような人形遊びではなかったにしろ、物心つくまえの大事なおもちゃだったはずだ。

あこはちらりと視線を上げ、直継の様子を探る。

整った目鼻立ちは微塵も揺らがず、今ですら笑顔が想像できない。幼いころの顔立ちや行動

など想像力の限界を超えている。
だが、直継も幼いころはそれなりに年相応の子どもだったのかもしれない。
（――年相応の右近殿って！）
自分の思いつきに驚き、あこは目を丸くした。
そんなあこに不審なものを感じたか、直継はかすかに眉を寄せた。
「言いたいことがあるならはっきり言え」
「え、えっと……」
言い逃れしようかとも思ったが、向けられた真摯な瞳がそれを許さない。
「だって……人形よ？」
「人形がどうした」
「そんな、一緒にいたいとかなんとか、思ったりする？」
すると直継はむっとして答えた。
「人形にも感情はある」
（どういう教育したの木俣殿!?）
たしかにあこも幼い頃に人形を叩いたりすると「痛がっているでしょう？」などと窘められたものだが、それがしつけのための方便だとさすがにもうわかっている。だが直継はまだ信じているのだろうか？

守勝の教育にはいろいろ思うところがあるが、

（純真すぎじゃないそれ!?）

だが直継は、「それは人形にかぎらず物すべてに言えることだが」と言葉を継いだ。

「形が似ている、それだけで生じる縁がある。特に人形は人の形代になるくらいだ。人の穢れをうつすだけでなく、想いや念もうつりやすい。形にかぎらず文字や音、色や動きを似せるだけでも〈力〉を持つこともある。文字ならば護符や写経、音ならば念仏の類だな」

（あ、そういう意味……）

あの言葉は姫人形への思い入れではなく、まっとうな理由に由来するものだったらしい。

「じゃあ、姫人形はこの人形に会いに来たってこと？」

「らしいな。今ふたつここにある状況ではほかの意思を感じない。とはいえ今宵というのが解せないな。結界に問題はないはずだが……この男の人形は、今までどこにあった？」

「どこって、今日かやが作ったのよ。明日ひなまつりだから」

男雛か——そうつぶやくと直継は床の間に飾ってあるひな人形に目をむけた。

「とりあえず一緒に飾っておけば問題ないだろう」

（え!?　い、一緒に飾るの!?）

一瞬心臓が跳ねたが、右近殿の命令だから！　と言い訳しながら、言われるままにひな壇の下にならべてみる。

姫人形の表情はずっとにこやかだが、収まるところに収まって、先ほどまでよりも嬉しそうな顔をしている――ように見えなくもない。

（本当に、一緒にいたくてここに来たわけ？　しかも人の打掛に勝手に入りこんだりして）

この二体はあこが蔵に行ったときに顔を合わせただけだ。その一瞬で惹かれるものがあったのだろうか。

（ずいぶん惚れっぽい人形ね！）

しかし事情がわかると単純な話だった。ふと気が抜け、小袖を介して夜の外気がしみてくる。

あこが小さくくしゃみをすると、直継が打掛を拾ってあこの肩に羽織らせた。

――とそのときあこは、自身が白小袖姿のままであることに初めて気がついた。

（わ、わたし、こんな恰好のままずっと……!?　いやぁ!!）

あこは思わずその場にうずくまる。

白小袖一枚でも肌が見えることはないが、下着姿も同然だ。気づいていたならモノノケ人形入りの打掛でも真っ先に羽織っただろうに。

しかし羽織らせた直継は、あこが寒くてうずくまったとでも思ったのだろう。廊下に向かって「火鉢を」と声をかけた。

（寒いわけじゃないから！）

逆に顔が火照りはじめて暑いくらいだ。

先日、おなじような状況になったとき、采女はなにも言わずにすぐさま打掛を羽織らせてくれた。あの気遣い上手な采女とおなじことを直継に期待するのは間違っている気もするが。

（でももうちょっと恥じらいとか察してくれても！）

ほどなく火鉢が差し入れられ、直継は床の間の前でうずくまったままのあこに声をかけた。

「そんなところにいては寒いだろう」

そう告げる直継も白小袖姿だ。近づくどころか目を合わせるのも気恥ずかしかったが、部屋の端にいるのも不自然だ。

あこは打掛に袖をとおしておずおずと近づき、距離をおいて腰をおろす。そして次の言葉を待っていたが、火鉢で熱せられた空気が室内に漂うばかりだった。

「右近殿？」

あこが視線を上げると、直継は火鉢の中でくすぶる炎をじっと見つめていた。

「――やはり、怖いか」

ぽつりとこぼれ落ちた言葉。

あこは意味を取りそこね、「え？」と問いかえした。

「佐和山では、ものが憑いたり霊が出たりなどといったことは日常茶飯事だ。私自身、似たようなものだしな」

あこは思わず息を飲んだ。

似たようなもの――この世ならざるもの、普通ではない〈力〉を持つもの。
周囲に受け入れられず、直継が普通の人との距離をおいた理由。
「今宵は悪しきものではなかったが、結界が緩めばそなたを襲うものも現れよう。ここにいればそなたは――」
「こ、怖くないから！」
不意に言葉をさえぎったあこに、直継が無言で視線をむけた。
端整な面立ちの中にある双眸に囚われそうになって、あこは息を飲む。
しかしその瞳は、自分の容姿がどう思われているかなどまったく意識していない。そこにあるのはただ、自身に宿る神の力、人ならぬ存在に向けられる奇異の目を、あるがままに受け止めようとする心だけだ。
ここで誤れば、開きかけていた直継の心が閉ざされる。二度と言葉が届かなくなる。
（右近殿が、遠くにいってしまう――）
「た、たしかにちょっと、いえ、だいぶん……かなり？　びっくりしたけど、これくらい大丈夫！　怖くないから！　だから……」
離れないで。自ら距離を置こうとしないで。
近づいた相手に拒絶されるのはつらい。幼い時分から侍女たちに、そして実の母に怯えられ、遠巻きにされたことは心の傷になっているはずだ。それはあことて知らぬ感情ではない。

幼くして継いだ当主の座。その立場がますます人を遠ざけるなら、せめて正室となる自分は側にいよう、話をしよう、そう思った。

（だって、わたしは）

――家族になるために、ここにきたのだから。

あこは直継の手に自分のそれを重ねる。

直継の白い手は、雪のように冷えきっていた。しかしきっとこれが心の温度だ。

すべてを真白の闇で閉ざせば、だれも立ち入らず、だれにも汚されない。春を待つのではなく、ただひとりの閉ざされた世界。

直継はあこをじっと見ていたが、やがて考えこむように視線を落とした。

手をふり払われることはなかった。それは言葉が届いたと思っていいのだろうか？

「あ、あの姫人形！　実は木俣殿のお手製って知ってた？」

あこが唐突に継いだ言葉に、直継がゆっくりと面を上げる。

「そう、なのか？」

「小田原陣のときに作ったっておっしゃってたわ。わたしが生まれたのがその戦の終わりごろだから、右近殿のほうが生まれが早いのね」

「春先……二月生まれだと聞いている」

「じゃあ、ついこの間が生まれ月だったのね。あの、今日は右近殿の話を聞かせてくれる？」

直継の目がかすかに見開かれる。
それは昨日、直継が自分にくれた言葉だと気がついただろうか。
ふたりに流れた月日は一晩で話しきれるものではない。けれど、こうして毎晩、足りないものをすこしずつ補ってゆけば、きっと隔たれた時は埋められる。
（わたしももっと右近殿のことを知りたいから）
あこが直継をじっと見つめる。すると直継は表情を隠すようにわずかにうつむいて、ぽつりぽつりと言の葉を紡ぎはじめた。

「やっぱりお似合いだったじゃないですかー」
しのとかやは主の部屋から距離をおいて廊下に控えていたが、いましばらくは用事もなさそうだと自室に引きあげてきた。
「照れずに最初から一緒に飾ればよかったんですよ。姫さまが殿さまをお好きなのは、もうお屋敷中にばればれなんですから――って、肝心の殿さまにはまだばれてないみたいですけど」
「かや、おふたりのことに口を挟んではいけませんよ」
姉にたしなめられ、かやは渋々ながら「はーい」と返す。
「にしてもあの人形、姿だけじゃなくてやらかすことも姫さまに似てましたよね。惚れっぽい

ところとか、突っ走り気味なところとか、人騒がせなところとか」

ほかにもあれこれ指折り数えていると、これ、と姉の叱責が飛んできた。

「だって本当によく似ていたんですよ。お人形を見て一目でわかりましたもん。……あれ？お人形のほうが姫さまより先に生まれてるんですから、姫さまがお人形に似ていることになるんですかね？」

「どちらにせよ、ただの偶然ですよ」

「でも殿さまもおっしゃってたじゃないですか。似ているものには縁があるって。あのお人形はずっとこのお屋敷にあったはずなのに、どうして今日になって動き出したんですかねー」

「かや、早く寝なさいな。あなたには明日も姫さまのお相手をしてもらわないといけないのですから」

「姉さまこそ明日も采女さまのお邸に行くんでしょう？　姫さまなら大丈夫ですよ。殿さまとご一緒なら、きっと明日もお寝坊ですもん。今朝だってなんか夢見がよくないとかおっしゃって……って、あ、もしかして、姫さまがお人形に憑かれたんじゃなくて、姫さまの夢がお人形に憑いてしまったとか……？」

「……かや」

姉の低い声音にかやは「はぁい」と返答して、ぬくもりの残った夜着にもぐりこむ。すると睡魔はすぐにやってきた。

眠りに落ちる直前、
（でも今晩、姫さまがさびしくなくなったなら、明日は早起きかも？）
そう思ったが、姉に伝える前に夢の世界に連れこまれた。

翌朝、かやが起きだすと、主は中庭で剣の早朝稽古をしていた。訊ねると、江戸からの道中とおなじく朝焼けのころに起きたらしい。
「え？　夢見？　昨日は悪くなかったわよ、べつに」
稽古で一汗流した主は、手巾で顔をふきながら、昨夜の騒動などすっかり忘れたかのように晴れやかに告げる。
「ひさびさの稽古でお腹すいちゃった」
「じゃあ朝餉の仕度をしますねー」
かやはそう言って厨へと向かいかけて、ふりかえって室内の人形を見やる。
ひな壇の下に仲良くならべられたそれは、昨夜とおなじ位置で晴れやかに笑っていた。

――あなたに会いたかったの。ずっと。

間章　光のどけき・二

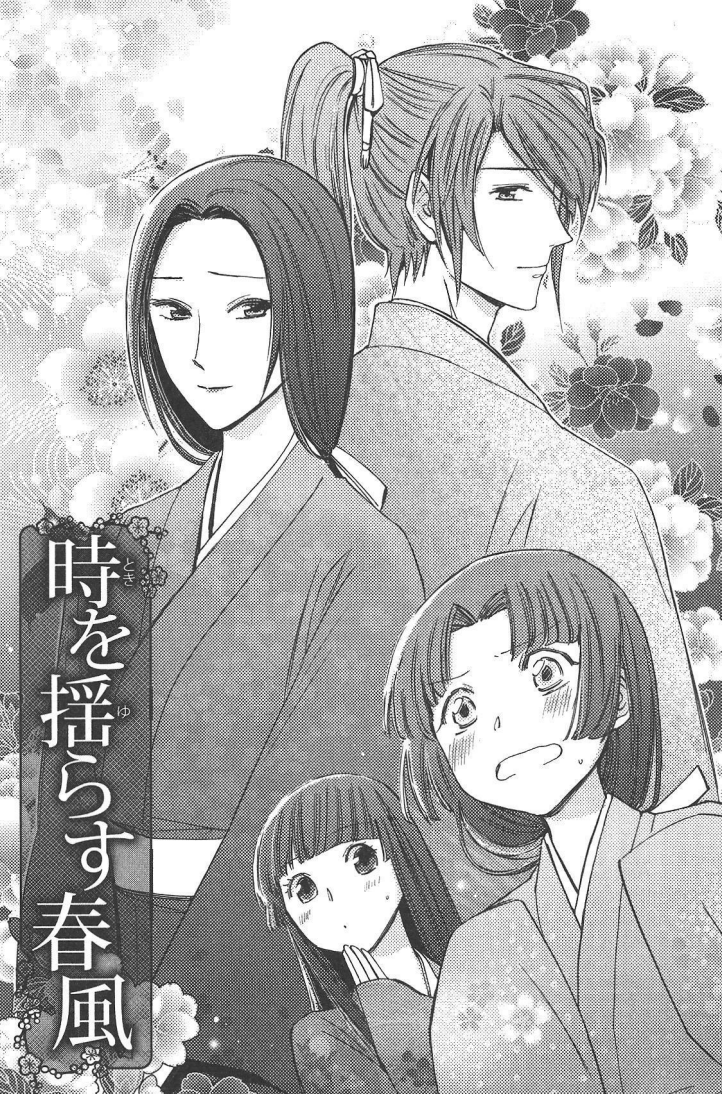
「しの！　かや！　ちょっときて！」
あこはあわてて侍女ふたりの私室に駆け込む。だが、部屋にいたのはかやひとりだった。
ちょうど針仕事をはじめようとしていたらしい。部屋には衣が山積みになっている。
「姫さま、どうされたんですかぁ？」
「また出たの！　あれが！」
「あい、ですか？」
かやは小首を傾げるが、思い至ったようにぽんと手を打った。
「このお屋敷で見るのはお初ですねー。でもそれにしては時季が早くないですか？」
そう問うかやに、あこは勘違いをしていることに気がついた。
かやが言っているのは「ご」のつくあれだ。
「あれも嫌だけどそうじゃなくて！」
「じゃあ足の多いのですか、それともない方ですか？」
「百足も蛇も嫌だけど、あれ見て……!!」
涙目で廊下を指さすあこに、「しかたないですねぇ」とかやは立ち上がって廊下に出る。

「あー、姫人形ですね」
なんでもないようにかやは言い、あこは驚いて視線を向けた。
「動いてる……！　さっきと位置が違うもの!!」
先ほどは廊下の角の手前にいたはずが、このわずかな間に角を曲がりきっている。
凝視しているときには動いている気配はないのに、しかしたしかにこちらに向かっている。
「あと半時も待っていれば、自力でたどり着きますかねぇ。観察してみましょうか」
（そういう問題!?）
「けれど、せっかくのお衣装が汚れちゃったら困りますよね」
そう言ってかやはなんの躊躇いもなくそれを拾い、そして「はい」と手渡してきた。
あこは害のないにこやかな顔と見合ってしまい、くらっと意識が遠くなる。
その弾みで人形があこの手からこぼれ落ちる。それは自力で抜け出したかのようでもあった。
「やっぱり動いてるって！　どうして!?」
この姫人形は男雛と一緒に片づけたはずだ。一緒に置いておけばおとなしかったのに、なぜまた屋敷を徘徊しているのだろう。
するとかやは、「あれを連れてきちゃったからじゃないですか？」と室内を指さした。
「あっ、あれ！」
山積みの衣にまぎれて裁縫箱に凭れかかっていたのは、直継似の男雛だった。

かやは畳に転がった姫人形を拾い上げると、男雛の横に並べてやる。
息をつめてしばらく待ってみるが、姫人形が動く気配はない。
あこは動悸が収まらないながらも、はーっと息をついた。
「なんで持ってきちゃったりしたのー……」
「古着をいただけたんで、せっかくなので替えのお衣装でも作ってみようかと。ほら、これでお人形に羽織とか作ったらよくないですか？」
かやが取り上げてみせたのは、見覚えのある薄青の羽織だった。
「ダメだってば！」
あこはあわてて羽織を奪い取る。
これで人形の羽織を作った日には、さらに直継に似てしまう。前回はなんとか本人に気付かれなかったが、自身の古着で羽織まで作られては言い逃れできない。
しかし、握りしめたその布地の感触を知っている気がした。まちがいなく直継のものだ。
しっかり洗ってあるのに香りが残っているような気がして、思わず抱きしめたくなったが、かやの手前、必死にこらえる。
「まだ着られそうなのに、もったいないわね……」
まだどこも破けてもほつれてもいない。布もしっかりしているのに糸を抜いてしまうのか。
「大大名家の殿さまですもの。一季節着られただけで十分ですよ」

「うん、それでも……」
「欲しいなら姫さまがもらっておかれたらどうですか？」
「えっ!?」
「お屋敷の中に置いておくならかまわないそうですから」
「そ、そう？」
使っていたものには縁が生まれる。じかに触れたもの——衣装や箸などはなおさらだ。縁を用いた呪詛を懸念して、直継の使っていたものは一切屋敷の外に出さない。しかし屋敷の内でもらっておくのはかまわないだろう。
かやの言葉に甘えて、あこはそそくさと羽織を自分の背後に置いた。
「じゃあこの子のお衣装はどれにしましょうかねー」
その言に釣られて古着の山を見渡すと、裁縫箱に立てかけていた姫人形がいなくなっていた。
「え!?　どこにいったの!?」
「あー、いますよ。ここ」
かやが、自分の膝元に転がっていた姫人形をつまみあげる。どうやら、かやが衣装合わせに男雛を取り上げたので、また付いていこうとしたらしい。
あいかわらずねぇ、とあこはため息を漏らした。
「なんでそんなにその男雛が好きなのかしら」

「だってこの子は姫さま人形なんですからしかたありませんよ」
「わたしはそんな右近殿ばっかり追いかけたりは……！」
「じゃあそれはなんなんですか？」
後ろに隠した羽織に視線を向けられて、あこは返す言葉をなくした。
「……そっ、それにしても勝手に動き回るのは困るわよね！」
「ほんと、どうやって移動しているんでしょうねぇ。ころころ転がっているんでしょうかね？」
人形が動いている最中の姿を見たことがない。なのでどうやって動いているかわからない。
知らないうちに近づいている——それがかえって不気味だ。
「なんなら、姫さま人形の見張りに姉さま人形を作りましょうか。勝手に付いて行こうとするのを叱ってくれるかもしれませんよ」
「そうね。じゃあ右近殿人形の見張りに采女殿人形でも作ってみれば？　右近殿を守ってくれるかも」
すると、かやが見るからに不機嫌そうに、渋い顔をした。
「采女さまですかぁ……？」
「そ、そんな嫌がらなくても、ね？」
（まだ采女殿への誤解が解けていないのかしら……）
あこは、時迷いの最中にあったひなまつり事件、その直後の一件に思いを馳せた。


時を揺らす春風

しのが繕いものの手を止めて一息つくと、陽が傾きはじめていた。
傍らには鳥居家家人の繕いものが山積みになっているが、今日はこのあたりで区切りにするのがよさそうだ。
手回りを片付けて邸主の私室へ向かい、真正面から一歩引いた障子の陰で手をつく。
「しのにございます」
「どうぞ」
その返答は思ったより近い。
不審に思いながら、「失礼仕ります」と歩みを進め、視線を上げることなく廊下に手をついて言上する。
「本日はこれにて愛宕屋敷に戻りますので、お暇のご挨拶を」
「ああ、御苦労さまでした」
その返答は、やはり近い。
邸主の臥所は部屋の最奥、床にいる邸主の声がこれほど近くから聞こえるはずがない。
不躾を承知で面を上げる。すると邸主――井伊采女直重は、白小袖の上に羽織をかけ、廊下のほど近くで文机に向かっていた。

「どうして起きていらっしゃるのです!?」
思わず声を上げる。
采女が刀傷を負って生死の淵をさまよい、意識が戻ったのはつい一昨日のことだ。まだ到底起きられるような身体ではない。筆を執るなどもっての外だ。
「失礼いたします！」
しのは采女の返答を待たずに私室に踏み入ると、文や硯が置かれた文机ごと取り上げた。
「あ……」
采女が文机を目で追ったのを、
「片づけさせていただきます」
と睨めつけ、部屋の隅に寄せる。
「それもお預かりいたしますわ」
しのは目尻ばかり作りものの微笑を浮かべて告げる。すると采女は困ったように、しかしどこか観念したように苦笑を浮かべて、手にしていた筆を差し出した。
そのときわずかに触れ合った指先――思いのほか冷たかった。やはり無理をしている。
「ほら、今すぐ横になってくださいまして」
「いえ、そういうわけには」
采女の視線が一瞬逸れたのも見逃さず、視線の先にあった文箱もすかさず取り上げる。これ

は仕事に関わるものを持ちこまぬよう、邸の家人にきつく言っておく必要がありそうだ。
しかしその前にしておくべきことがある。
しのは采女と真正面から向きあって居ずまいを正すと、口を開いた。
「養生もせず、無理を押すのはご主君に対する背信行為ですわ」
不意に飛び出した穏やかならぬ言葉。
采女も聞き違えたかとでもいうように「はい？」と問い返す。
「私はただ、このお邸にお手伝いに来ているのではございませんのよ。貴方様のご容態を見てくるよう右近様より仰せつかっております。
いまお休みをいただけているのはなんのためですか。休んでいいというのは好き勝手していいということではないのですよ。養生し、怪我を治し、一日でも早くお役目に戻ることが貴方様がなすべきこと、貴方様の一番の務めです。おわかりですか、あ――」
そこで、しのははっと言いかけた言葉を飲み込んだ。
（私ったら……！）
ついいつもの癖で叱責してしまった。飲み込んだ言葉は「あこさま？」だ。
恐る恐る采女の面を見やると笑顔が消えている。
しのはすぐさま「出過ぎたことを」と手をついて謝罪した。
しかし采女は突如腰を上げると、しのの手を取った。力強くそのまま引き寄せられる。

（え……!?）

平衡をくずし、采女の胸の中へ転がり込む。

だが采女は触れるが早いか、すぐさましのと身体の位置を入れ替えた。

采女は片腕を広げてしのを庇いながら、視線は険しく廊下のほうへと向けていた。

（いったいなにが……）

ふり返ると、先ほど自分がいた辺りに黒い靄のようなものが漂っている。

采女は懐に忍ばせていた水入れを取り出して廊下に撒き、二指を立てて呪言を唱える。

すると、板間の廊下が焼き石になったかのように水は一瞬のうちに蒸発し、白銀の光が立ち上った。

（いまのは……）

采女はいつになく鋭い表情で探っていたが、気配が消えたのを見届けてひとつ息をついた。

だが、その息の最後を咳が襲った。

咳は二、三度で治まったが、采女の白い手からこぼれ落ちたのは、赤い――血だ。

「采女さま!?」

しのは駆け寄って采女を支える。

自分を庇って急に動いたことで、傷口が開いたのだ。白小袖の胸元にも血がにじんでいる。

しかし采女は慣れた様子で袖口で拭うと、微塵も取り乱すことなく問いかけた。

「しの殿にお怪我はございませんか」
「怪我をしているのは貴方のほうでしょう!?」
場にそぐわない穏やかな声音に、反射的に叱りつける。
胸に巻いた包帯を越え、白小袖に血がにじみ出るほどだ。痛みがないはずがない。
現に顔に翳りが見えるのは、落日の光のせいではないはずだ。
(なのにこの方は……!)
今は人の心配をしている場合ではなかろうに。
「はやく床にお戻りくださいましな!」
すると、「いえ……」と采女はやんわりと断った。
「いまはちょっと動ける状況ではないので、また折を見て戻ります」
「……は?」
失血のせいか、言っていることがなにやらおかしい。
「しの殿はどうぞ、明るいうちに愛宕屋敷にお戻りを」
「なっ、なにをおっしゃっているのです! 動ける状況じゃないときに起きていらっしゃったのはどこのどなたですか!」
「申し訳ありません。戻る余力は残しておいたはずなのですが……」
「そんな限界に挑戦しないでくださいませ!!」

（男というものはどうしてこう……!!）

どうしてこう無駄の多い生き物なのだろう。無駄に限界を見ようとしたり、無駄に信念を貫いたり、無駄に想いを秘めようとしたり、無駄無駄無駄、とにかく無駄が多すぎる。

采女は人に優しく、己に厳しい。だがそれで倒れていては世話がない。無駄な意地だ。想いのまま己の道をまっすぐ生きるのはいい。だがそのままっすぐ突っ切って、三途の川を渡り切ってしまうのは論外だ。

「痛いなら痛いとはっきりおっしゃってくださいましな」

「痛くはないので大丈夫です。ただ目眩がするだけで」

その一言に、しのは唖然とした。

采女の眼を見ると、たしかに視線はこちらに向いているが像を捉えていない。

それはもう、痛いどころではなく意識が朦朧としているからだ。

「すぐに治まりますから」

そう言って采女がふわりと微笑んだ瞬間、しのの中でなにかが弾けた。

（この人――――ダメな人だわ……!!）

腹心としてはたしかに有能かもしれない。だが生き物としてなにかが間違っている。根本的

な駄目人間だ。

このまま放置すれば、明日には冷たくなって発見されかねない。

しのは「失礼」と言って采女の腕を取ると、腕の下から肩を入れた。

「さぁ、お連れしますから床にお戻りくださいませ」

「ですが、しの殿の衣に血が……」

「そんなことを気にしている場合ですか!?」

「しかし血濡れた姿で愛宕にお帰しするわけには……」

「お黙りなさいッ!!」

しのの一喝に采女はひとつ息をつくと、申し訳ありません、と素直に肩を借りた。

――そんなふたりの様子を、庭木に隠れて探る影があった。

夕暮れ時の愛宕屋敷。私室を出てすぐの廊下で、あこは行く手を立ち阻まれていた。

廊下で仁王立ちになっているのは、十歳ばかりの女童だ。

「そこを退いてってば！」

「主さまにモノノケを近づけるわけにはいかないって言ってるでしょ！」
「どっちがモノノケよ化け猫！」
「イノシシ娘に言われたかないわよっ！」
女童――たまは、胸の前で腕を組んだままあこを見据え、一歩も引かない。
（この陰険ネコ～～～～～!!）
たまの身の丈はあこの胸元ほど、あこは体格差を武器にたまの脇を通り抜ける。
だが、たまの後方で見えないなにかに阻まれて、それ以上進むことができなかった。
「なによこれ!?」
行く手を阻むなにかを拳で叩くと、それは風呂の水面を叩いたときの感触に似ていた。まるで水壁が聳え立っているかのようだ。
「できるものなら突破してみなさいな。お得意の突進でもなんでもしてみればいいわよ」
たまは哄笑を残して、溶けるように姿を消した。正体を知らなければ完全に妖しの所業だ。
残されたあこは見えない壁を何度もばしばしっと叩いてみるが、びくともしない。
「あ～～も～～～～!!」
苛立ちを声に変えて吐き出して、その場にへたりこむ。
どうせ辺り一帯結界に覆われてこの声が直継に届くことはないのだ。遠慮することはない。
（どうして会わせてくれないの!?）

せっかくおなじ屋根の下にいても顔も見られない、言葉も交わせないというなら、別居しているのもおなじだ。

せめて侍女から様子なりとも聞ければいいのだが、さすが屋敷勤めの者たち、主のことは一切漏らさない。

（元気にしているの……？）

つい先日、ひな人形の騒ぎで会ったときは、さほど調子の悪い様子はなかった。

けれど、また祓いのために出歩いているなら……？

昼の政務に加えて、夜は山に出没するものを祓っている。過労で倒れても無理はない。

腹心の采女が動けないいま、せめてたまは連れているだろう。あの化け猫がついていれば大丈夫——そう思いたかったが、湧きあがる不安はぬぐえない。

（わたしはせめて、お邪魔にならないようにしないと……）

時迷い人はこの世界の安定を乱す。安定を乱せばものが生じる。ものが跋扈すれば、直継が祓いにゆかねばならない。つまりは直継に迷惑がかかるということだ。

目の前にある水壁——〈結界〉に自分を閉じ込めているのもそういう理由だろう。

（でも、しのだって〈時迷い人〉よね？　采女殿のお邸にやってよかったのかしら？）

屋敷の外を出歩いたりしたら、山にものを呼んでしまうことになるのでは——

そのとき、庭先からすすり泣くような声がして、あこはとっさに目を走らせた。

（だれっ!?）

黄昏時にすすり泣く女童の物の怪――昔見たそんな絵物語が脳裏をよぎり、背筋が固まる。

しかしその答えはすぐに見つかった。

庭端の軒の影でうなだれ、すすり泣いていたのは、侍女のかやだった。

「ど、どうしたの、かや!?」

あわてて廊下を走り寄るが、かやが泣きやむ様子はない。

「なにがあったの？　まさか誰かにいじめられたとか？」

あこたち鳥居家一行は井伊家にとって招かれざる客だ。

客分として置いてもらっているのでさほど肩身は狭くないが、女の世界はなにかと恐ろしい。

押し掛け女房と見られて、幼いかやが嫌がらせを受けているのかもしれない。

「ねぇ、困ったことがあるならなんでも言って？」

するとかやは、涙目のまま、きっと視線をあこに向けた。

「姫さま！　どうして姉さまを行かせたりしたんですか!?」

あこは、食ってかからんばかりのかやの勢いにたじろいだ。

「え……え？　いったいなんのこと？」

「二の丸屋敷です！」

「二の丸って、采女殿のお邸？　采女殿のところも御普請で人が出払っているっていうから、

人手が足りないだろうと思って……」

愛宕屋敷もそうだが、今の佐和山は天下普請の築城におおわらわで猫の手も借りたい状況だ。

（いくら猫でも、あの化け猫はさらさら手伝うつもりはなさそうだけどね……）

「そんなときに鳥居家の者を預かってもらっているのだもの。せめてご迷惑にならないように手伝いをやるのが当然でしょう？」

「姉さまが襲われでもしたらどうするんですか！」

「襲われって……たしかに采女殿のお邸は山の向こうだけど、禁制の御山に土地の人は入れないし、危ない獣もいないらしいし」

城門前には門衛がいるし、祟られているとの噂の山に潜りこむ物好きもいないだろう。

仮に潜りこんだ者がいても、しのほど腕が立つ人がそうそういるとも思えない。

「他になにか襲うようなものってある？」

「邸の主がいるじゃないですか！」

「主？　采女殿がどうかしたの？」

「あの方、絶対姉さまに気があるんですよ！」

「……は？」

あこがその言葉の意味を理解するまで、優に二拍以上の間が必要だった。

（誰が誰に気があるって？　采女殿が？　しのに？）

「まさか、それはないでしょ」

たしかにしのは美女だし、采女と一緒にいる姿は絵になる。

しかし采女は怪我人だし、あのお役目大事の人が脇目を振るとは思えない。

「だってあの人、姉さまに妙に親切なんですよ!?　姉さまは鳥居家のみんなの衣を繕っているんですけど、お好きな柄があれば誂えてくださいとか言って出された反物がすっごい高そうなんですよ！　それに女物が必要なら反物屋を呼びますからご遠慮なくとか言って、姉さまに反物を贈って口説こうとしているんですよ!?　小一郎兄さまなんて薪割りとか瓦葺きなのに!!」

（それは役割分担がそうなってるからなんじゃ……）

江州への旅路を仕切っていたのは、家老名代を預かる小一郎こと高須源十郎だ。

十八歳の彼を筆頭に、あこの江州行きに付き従ってきた家人はみな二十歳前後の若者だ。体力が有り余っている彼らは、邸に閉じ籠められているより体を動かしているほうが気分転換になる。きっと小一郎から手伝いを申し出たにちがいない。

（瓦葺きねー……たしかに小一郎はなにかと器用だものね）

器用な上に体格にも恵まれているので、大抵のことならこなす。いまも屋根に登るための木梯子を肩からかける小一郎の姿を想像してみると、よく似合う気がした。

反物の件はたしかに気があるように見えなくもない。結納の際にも反物を贈るのが通例だ。

だが鳥居家一行は旅人の身、三月に五月の衣では薄手だし、綿入りの小袖を仕立てるには新たな反物が必要だ。贈り物というより、必要な物の提供を申し出ただけという気がする。

しかしいずれにせよ、かやがそこまで詳しく知っているということは――

（姉のあとを付けて、采女殿のお邸まで行っていたのね……）

かやは愛宕屋敷を抜け出すことができたらしい。ということは、あの水壁は迷い人を屋敷から出さないためではなく、直継に近づかせないためのもののようだ。

「采女殿はたしかに親切だけど、誰に対してもあんな感じなのよねぇ」

あの人当たりの良さはしのだけに向けたものではないだろう――

そう話を向けたが、かやは聞く耳を持たない。絶対姉さまを狙ってます！　の一点張りだ。

「ねぇ、侍女たちには聞いていないの？　采女殿の噂とか」

「ちゃんと聞きましたよ！　でも、良い方だって答えしか返ってこないんです！」

それは普通に良い人だからなんじゃ……と思ったが言うのはやめた。どうせ聞いていない。

「みんな口止めされてるんですきっと！　あんな生活力のない人が義兄さまだなんて認めません！　絶対に！」

「生活力のない人って……采女殿は御一門で、千石取りのご当主よ？」

鳥居家中で千石を超える家など、小一郎の家――筆頭家老を務める高須家くらいのものだ。

磐城に国替えになって領地は増えたが、しのとかやの生家でもまだ千石には届かない。

「お邸だって立派なものだったでしょ？」
「黒いぼやぼやが漂っているようなお邸ですよ!?」
（黒いぼやぼやって……埃玉かしら）
采女の几帳面な性格からして、塵ひとつない邸を想像していた。
だが家の中では意外とそうでもないのだろうか。それとも邸主が寝込んでいるのをいいことに家人が掃除の手を抜いているのか、掃除に回す人手が足りていないのか――
考えを巡らせるあこをよそに、かやは采女に対する怒りを吐きつづけている。
（めずらしいわね）
江戸にいたときからしのの縁談は山のようにあったし、その数以上に好意を寄せる男たちがいた。けれどもかやがこれほど目の仇にするのは初めてだ。
かやは勘が鋭い。こと、姉に関してはその精度は半端ではない。
（じゃあ采女殿じゃなくて、しのの方に気があるってこと？）
しのも鳥居家重臣の娘。一門の采女の正室に納まるには多少身分が足りないかもしれないが、越えられないほどの差ではない。
自分の嫁ぎ先に骨を埋める覚悟で来てくれたしのには良縁を見つけてあげたいし、しのが興味を持つ相手がどんな人なのかは気になる。
「じゃあ一度調べてみましょうか」

あこがそう提案すると、かやは「はい！」と強くうなずき返した。

「では、采女さまのお邸に行ってまいります」
「よろしくお願いね」
翌朝、しのはいつものようにあこに挨拶をして、愛宕屋敷を後にした。
何食わぬ顔で見送ったあこだったが、「姉さま、お屋敷を出ました！」の報告を受けるなり打掛を脱ぎ捨てた。
色柄の目立たない小袖に着替えて、かやとふたりで後を追う。
愛宕屋敷を出て、佐和山を越える。中山道側に下りかけてすぐ、二の丸近辺の武家屋敷のひとつが采女の邸だ。
「姉さまのお部屋はこちらです」
愛宕屋敷同様に門衛のいない入り口から入り、かやは勝手知ったる様子で庭を抜けてゆく。
しのは南向きの日当たりのよい部屋で、山と積まれた衣を見て嘆息していた。鳥居家家人は二十名ちかく、その洗いものや繕いものを一手に引き受けるのは骨が折れそうだ。
「で、あの方の寝所はこちらです」

奥から渡りを越えてほど近く、中奥のあたりだった。
しのの部屋と近くはない。気があるならいつでも呼べる距離の部屋を与えるだろうに。
（それに埃なんて落ちてないじゃない）
邸主の人柄そのままに庭木の剪定は行き届き、池にも葉っぱ一枚落ちていない。
花の季節だというのに庭は緑一色で、築山から下る小川とあいまってとても涼やかだ。唯一花を付けそうな芍薬もまだ開いていない。
邸をくまなく見渡しても、かやのいう黒いぽやぽやなど目につかなかった。
（かやはすごく目が良くて、わずかな埃も見逃さないとか？　姑でもないでしょうに……ってやってることは十分小姑だけど……）
「采女殿は真面目にお仕事なさっているわね」
庭木の後ろ、白塀沿いに身を潜め、声になるかならないか程度のささやき声を落とす。
采女は寝衣の白小袖姿、肩から羽織をかけて、臥所近くに寄せた文机に向かっている。
白小袖の胸元には、下に巻いた包帯が覗く。身を起こしているだけでも辛いだろうに、すっと背筋を伸ばし、それが自然体になっているあたりが実に采女らしい。
「せっかくお休みなんだもの。もっとゆっくり休めばいいのに」
「懇意な女人に文を書いているのかもしれませんよ？」
「まさか。仮にもご一門よ？」

千石取りの重臣で井伊家の一門。身分的にも誘いを断る女人はそうそういないだろうし、気を遣うまでもなく、家柄人柄外見もろもろに惹かれて寄ってくる虫も多いだろう。

（そういえばまだ奥方がいらっしゃらないのね。采女殿ってもう十八よね？）

あの落ち着きようは優に二十歳を越えているように見えるが、実のところ、あこと二才しか違わない。だが、身分からして結婚していてもおかしくない年だ。

（決まったご縁談でもあるのかしら。先代さまの喪に服していたから延期している、とか？）

あことおなじ理由で何度も婚礼が延びていることは十分に考えられる。

（となると、しのの入る余地はないってこと……？）

「あっ、姉さまです！」

かやの声にあこは我に返ると、しのが采女の部屋に向かうところだった。

あこはなお一層首を低くして部屋を探る。かやなど瞬きすら忘れたかのような真剣さだ。

疑惑のふたりがどのような言葉を交わすのか、息を詰めて見つめる——が。

「まぁまぁまぁっ、また起きておられたのですか!?」

（……は？）

「お休みくださいとあれほど申し上げましたものを！」

「今日は気分がよかったものですから」

「気分が良くても悪くても起きれば傷は開きます！　さぁさ、臥所にお戻りくださいませ！」

しのは文机に向かう采女を一喝すると挨拶もなしに部屋にずかずかと踏み入り、そして文机を取り上げ、山羊を追いたてるかのように采女を臥所に追いやった。

（……えーっと……）

とても御一門相手の扱いとは思えないし、しっとりとした男女の仲とも無縁に見える。あれをどう見れば良い雰囲気に見えたのか、きわめて謎だ。

（やっぱりかやの疑りすぎなんじゃ……）

食い入るように見ているかやに視線を移すと、しのが「あ」と声を上げた。

つられて見やると、しのは袂から包帯を取りだした。

「お休みになる前に包帯を替えなければなりませんね」

采女はそれを凝視して、言葉を失くしている。

「お手伝いいたしますわ」

「……ひとりでできますから、お気遣いなく」

沈黙ののちに紡がれた采女の声はいつになく硬かった。しかししのが頓着する様子はない。

「ご冗談を。そのお怪我では腕を動かすのも難儀でしょうに」

「難儀するようなら家人を呼びますから」

「内仕事は当家の者が預かっておりますれば、御家の方はみな外に出ておいでですわ」

「しかし、他家の方にお頼みするわけには」

「もはや婿家も同然ではありませんか」
「ならば御家中のどなたかを。女人に刀傷をお見せするわけにはまいりません」
「私とて武家の娘です。刀傷は幾度となく見ております。さ、観念なさいませ」
その言に采女はため息をひとつつくと、腹をくくって、おとなしく肩を脱いだ。
細い首から流れる鍛え抜かれた肩、その鍛錬は上腕上部のしなやかな肉に現れている。
無駄な肉がないため鎖骨が浮き上がり、女人とははっきりとちがう胸の厚み――
あこは思わずうつむいた。
(みっ、見るの初めてってわけでもないでしょ!?)
江戸の町には、堤防やら石垣を築いたりする男たちがたくさんいた。夏場になれば肩を脱いでいるのがあたり前だったし、川の渡しの人足は上半身どころでなく下着一枚だ。
しかし彼らを見てもなにも思わなかったのに、今はなぜ顔が火照ってしまうのだろう。
身体中から熱が涌き上がってきて、なぜか気恥ずかしくて頬を押さえたくなる。
(照れてる場合じゃないでしょう!?)
あこが面をあげると、胸のその半ばから下は包帯で幾重にも巻かれていた。だが左胸に、はっきりと血が滲んでいる。
「やっぱりご無理なさっているではありませんか!」
しのは采女の制止より早く、覆いかぶさるようにして左肩の包帯の結び目に手をかけた。

『あ～～～～～!!』

声を上げかけたかやの口をとっさに塞ぐ。自分で誉めたくなるくらいの絶妙な間合いだった。

『我慢っ！　我慢よかや!!』

『でも姉さまの手が、手が……っ!!』

『しぃぃぃ～～～～～!!』

采女としのは、遠目には寄り添っているように見えなくもない。しかも男は肩を脱いで、女が肩に手をかけている状況だ。いま誰かが通りかかれば誤解をまぬがれない。

手のひらを噛みつかんばかりのかやの勢いに、あこはかやの口だけでなく目もふさいだ。

しのが包帯をほどいてゆくにつれ、隠れていた胸元が露わになってゆく。

（上半身！　上半身だけだから！）

腰帯は結んだまま、肩を脱いだ小袖は帯を境にして畳に広がっている。それ以上見えるはずがないのに、あこ自身も気恥ずかしくて目を逸らし気味だ。

しかししのはなにを気にする様子もなく、澱みなくするすると包帯を取っていたが、途中ではたと手が止まった。

（血……？）

包帯に血がにじんで、肌に張り付いていたのだろう。しのの陰になって傷口までは見えなかったが、しのは息を詰めると、骨董の茶壺を扱うかのようにゆっくりと包帯をはがした。

近くにあった水桶で手拭いを濡らし、采女の身体を拭う。その手拭いは遠目にもはっきりと血に染まっているのが見て取れた。

（あのときの傷……）

――三成に乗っ取られ、佐和山城で直継と相対した時の。

直継の刀が貫く瞬間を、自分はすぐ近くで見ていた。

あこは武家の育ちだが、人が死ぬ瞬間というものを見たことがない。しかし戦に臨む祖父や父の顔――やがて来る死と向き合って生きる人の目は、とても静かな瞳をしていた。

ただ一度しかないその瞬間に向けてどう生きるべきか、生きているうちに何を為すべきか。それを常に考えて、激しさも優しさも穏やかさもすべて呑み込んだ静けさがあって、その人の道はその人自身にしか決められるものではなく、いくら身内といえども踏み込めない領域なのだと知った。そんな祖父や父を、自分はただ見送ることしかできなかった。

直継や采女にも、女人の立ち入ることのできない覚悟があるのだろう。

――そう考えると心がふっと冷めて、あこはかやから手を離した。

「姫さま？」

「……行きましょう、かや」

背を向けたまま、言葉を落とす。

かやはなにか言いたそうだったが、先に歩みを進めたあこにおとなしく付いてきた。

手当てを終えると、采女は安堵したかのように息をついた。
それほど自分の腕は不安だったのかとかちんときたが、追及すべき点はそこではない。
「貴方様の大丈夫がどれほど当てにならないか、よぅくわかりましたわ」
血に染まった包帯や手拭いを片付けながら、しのは恨めしげに言葉を漏らした。
「手伝っていただき申し訳ありません」
「謝罪なさるところはそこですのね」
無理を押して仕事をしていたことは謝る気がないらしい——つまりまたやるということだ。
「なぜゆっくり休んでいられないのです。それほどにお務めがお好きなのですか？」
「さぁ……それはどうでしょうね」
「貴方様のことですもの、無理を押して長引かせるより早く治したほうが効率が良いと、当然おわかりでしょうに」
「今は山を離れていらっしゃる方々よりお預かりした務めがございます。私の不注意から負った怪我でご迷惑をおかけするわけにはまいりません」
「方々が戻ってこられるまで保てばそれでよいと？　治すべきときに治さなければ、さらに悪化することもございましてよ」

すると采女は、耳が痛いですね、とかすかに笑みを漏らした。
はっきりとは言わなかったが、誰のことを言ったかは伝わったらしい。
井伊家は怪我の不養生が原因で先代当主を亡くしている。養生を疎かにして無理を押した当主も問題だが、それを許した側近の問題でもある。
当主は家の旗頭、その当主が健康を害するようなことをすれば手討ち覚悟で諫めるべきだ。
「傷がその後のお仕えの障りになれば、いかがなされるおつもりです」
「ああ、そのときのためにちゃんと後進を育てておかねばなりませんね」
ご忠告ありがとうございます、とつづきそうな言葉をしのは声を上げてさえぎった。
「そういうことは五十を過ぎてからおっしゃってくださいまし!!」
(やっぱりダメな人だわこの人……!!)
「貴方のすべきことは目の前の仕事でも後進を育てることでもなく、いまここで！　すぐに！　臥所で横になって目を瞑ること、ただそれだけです！　ほら簡単なことにございましょう!?　赤子でもちゃんとできましてよ!?」
「私も赤子の頃はちゃんとやっていましたよ」
「そのようなこと自慢しないでくださいまして!!」
やわらかな笑顔で人の忠告を受け流し、わかっているのにやらない——一番厄介な相手だ。
横になるまでここにいますからね、としのがきっ、と睨みつけると、采女はため息をつき、

おとなしく床へと向かった。

——ゆっくりおやすみくださいませ。

彼女が障子を閉ざすと、部屋はあまり見覚えのない薄暗さに包まれた。

陽が高いうちに横になるなど、何年ぶりだろう。

采女が新たな寝衣に着替えて臥所に入ると、文机と、その上に載せられた文箱が見えた。

横になったまま文に目を通すことくらいは可能だ。この明るさなら読めなくはない。

だが采女が臥所から出ることはなかった。

——その後のお仕えの障りになれば、いかがなされるおつもりです。

（その後、か……）

自分はただ与えられるものを毎日こなすだけで、その先を見る余裕などなかった。

（いや……なかったのは余裕ではなく覚悟、か）

瞳を閉ざすと視界が闇に覆われる——その部屋に漂う空気はまったくちがうというのに、それはまるであの夜の続きであるかのような気がした。

長き雪の夜。死の床につく主君、その寝所の外で不寝番をしている自分。

いつ主の命の灯が振れるかと不安を抱える一方で、寝所に感じる穏やかな息遣いがたしかに

生きていると伝えていた。ただそれだけで自分は幾晩でも耐えられた。

実際、何日不寝番についていたか覚えていない。

気がつけば、障子二枚分の距離を隔てたところに、主の嫡子がいた。

まだ元服前で、年よりもさらに幼く見える少年。

自分は主に従って江戸や伏見、大坂で暮らし、一方彼はずっと国許にいたので、さして親しかったわけではない。年に数回、顔を合わせるだけの関係だった。

その彼が——いままで見舞いも許されなかった彼がそこにいた。

そのことで、自分はその時が迫っていることを悟った。

『そなたも井伊の名を名乗れ』

そう告げられたのは、主が関ヶ原の戦で島津軍の銃弾に倒れた夜のこと。

自分は意識を失った主の側についており、そして主は意識を取り戻すなりそう告げた。

『我が一門となり、〈家〉を支えよ』

自分はなんら疑問を抱くことなく受け入れた。家とはすなわち主君、疑う余地もなかった。

思えばあのとき、主もまた明日のことを想っていたのだろう。

明日——すなわち、己が果てた後のこと、そして後を継ぐべき彼のことを。

そしてあの冬の夜、彼のために国津神に捧げられた命。その盟約の光と共に消えたのは主の命の灯、そして自分の明日だった。主の命と共に自分の心の時は止まった。しかし。

なにを思わずとも、夜が明ければ明日は来る。
望むと望まざるとに拘らず、陽は昇る。
（――きっとそれが彼女の癇に障るのでしょうね）
数日前に起きた不自然な地揺れと落雷。
領内の異変を感じて様子見に出たところ、湖岸の松原にいたのは鳥居家の姫の一行だった。
従者の誰何に、姫を庇って前に出たのが彼女――姫付きの侍女のしのだ。
毅然とした態度、すべてを見抜くような鋭い眼。正直なところ苦手な相手だと思った。
自分の偽りの仮面にだまされてくれない。真の姿を見る人だ。
先ほどとて、怪我を押してまで仕事をすること――その引き合いに先代の不養生を持ってきたのは単なる偶然ではない。自分が無理を押すその理由を、彼女は薄々感じ取っているのだ。
彼女の主である姫が直継の心を見抜いたように、きっと自分もあの眼に見抜かれている。
（姫は無事お帰りになっただろうか……）
先ほど姫が庭に潜んでいたことに采女は気づいていた。
そのため、手当ての途中で姫が立ち去ったことに安堵の息をついたのだが、その息は彼女に誤解を与えてしまったようだ。
屋敷を抜け出して家臣の邸に入りこむなど、普通の大名家の姫ならば考えられないこと、しかしかの姫のおかげで、愛宕屋敷でなにかが変わりつつあるのを感じる。

あの雪の夜――先代の死の夜から凍りついていた〈時〉は、長い眠りから覚めるかのように、直継も、愛宕屋敷も、なにかが変わりつつある。

直継の心に灯を点した時迷いの姫――彼女はこの家を変えるかもしれない。

自分が変えられなかったなにかが、動こうとしている。それは期待であり、恐怖でもある。

自分もまた変わるのだろうか――変えられてしまうのだろうか。

自分は変わりたいのか？　変わりたくないのか？　それとも……

その思惟は闇の底から生えた腕に囚われて、采女は深い眠りの淵へと沈んでいった。

夕暮れ時、しのは廊下の途中で立ち往生していた。

進むべきか戻るべきか――進む先にある邸主の部屋、その障子は閉ざされたままだ。

（おとなしく寝ていらっしゃるのかしら……）

文机を隅に寄せはしたものの、あの邸主のことだ、また起きだして仕事をするのではないか。

しかし、しのが時おり様子を探ってみても起きている気配はなかった。

陽が山端にかかりはじめ、そろそろ邸をお暇しなければならない時刻だが、寝ているところを起こすわけにはいかない。

（誰かに言伝を頼むのがいいかしら……でも御様子を拝見しないと右近様へのご報告が……）

そんな調子で、部屋から数歩離れたところで思いあぐねていると、室内から声がかけられた。

「――誰ですか」

「あ……お休みのところ申し訳ございません。しのにございます」

どうぞ、という声を聞いて、しのは膝をついて両手で障子を引く。

室内を見やると、横になっていた采女が脇息を支えに身を起こすところだった。

「どうかそのままっ」

「いえ、一日休んだのでずいぶん楽になりました。貴女のおかげです」

こちらに向けた采女の瞳は穏やかだった。しのは目を奪われたが、はっと我に返るとそそくさと目を逸らした。

「……まっ、毎日こうして休んでおられれば、もっと楽になれましてよ」

そうですね、と采女は頷く。一眠りしただけでやけに素直になったものだ。

いつもは強風も暴風もすべて笑顔で受け流す油断ならない御仁だというのに、今はちがう。

表情はいつもどおり温和なものの、その瞳が湛える光は言葉を拒絶していない。

思わず見入ってしまったのは、その違いに気づいたからだ――きっとそうにちがいないと、しのは逸る自分の心臓に言い聞かせていると、そのとき、ふっと部屋の気配が変わった。

穏やかな夕陽が、急に夕立雲に遮られて翳ったかのようだった。

なにが……とふり返る前に、しのは采女に腕を取られた。平衡をくずした身体を強く抱きしめられる。

（えっ!?）

だが胸に収まっていたのは一瞬。

「伏せて！」

寝衣越しに響く声。その覇気にしのは考えるより早くその命に従っていた。

采女は枕元の刀に手を伸ばし、鞘を抜き払う。それと同時にしのの頭上をなにかがかすめた。

ひとつは采女の抜いた刀。

そしていまひとつは、気配から察するにかなり大きなもの——野犬か猿か、いずれにせよ一足飛びに室内に飛び入ってくるような獣ではない。

采女の刀に阻まれたそれは、跳び退って距離を置く。

しのが身を伏せたまま恐る恐るふり返ると、夕焼けを背に暗雲が部屋に入りこんでいた。

大きさは人間が両手を広げた程度、そこから枝葉のような靄がゆらゆらと漂っている。

その黒い靄は、あきらかになんらかの意思を持って采女と向きあっていた。——妖しだ。

「——下がってください」

采女はそれと対峙したまま、視線を動かすことなくしのに指示をした。

采女は刀を正眼に構えて対峙する。妖しもまた距離を読んでいる。



妖しの周囲の靄はゆるやかに揺れ動きながら、襲いかかる機会を窺っている。
しのの目にはぼんやりとした靄にしか映らないが、その動きはまるで百足の足のようだ。
両者、力を推し量っているのか、戦端は開かれずにいた。——が、時は妖しに味方した。
采女の息の間隔が短くなっている。見やると額に汗が滲んでいた。傷口が開いたのだ。
（このような深手の身で……！）
刀は全身の力を使う。胸に手傷を負った身では、刀身を支えているだけでも辛かろう。
（崩れる！）
思うが早いか、しのは采女の柄に手を伸ばしていた。
「貴女にそれは……！」
采女の気が逸れ、崩れた均衡を見逃さず、靄が飛びかかる。
しのは右手で刀を構えつつ、左手を懐に入れてそれを取り出すと、辺りに撒き散らした。
陶器に入っていた水は蒸気となって立ち昇り、放つ光がしのに靄の正体を明かす。
（やはり百足……!!）
百足ならば、怯える主人に代わって何度も退治したことがある。
（この……っ！）
しのは、かつて主を怯えさせた百足への怒りを丹田に込めて、刀を唐竹割りに斬り下ろす。
銀色の光の水をまとう刀は、百足の身体を真二つに裂いた。

裂かれたそれは畳に倒れ、撒き散らされた水の光に呑み込まれていった。
部屋から百足の気配が消えたことを確認して、ほぅと息を吐く。
「その水、は……」
「たまさまからお預かりしましたの。愛宕屋敷を出るときは欠かさず持ち歩くように、と」
「そうですか……おかげで助かりました」
「お役に立てたならなによりです。が」
しのは刀を鞘に収めて采女に返すと、姿勢を正して真正面から向き合った。
「なんという無茶をなさるのです!?　貴方様はいますぐ臥所にお戻りくださいませ！」
「……申し訳ありませんが、今はこのままでいさせてください」
采女は刀を刀掛けにもどすと、そのまま脇息にもたれかかった。
いつも背筋を伸ばしている彼には珍しい姿だ。
また、目眩がして動けません、とか戯けたことを言いだすのではなかろうかと構えたが、
「傷口を押さえるのに、この体勢が楽なので」
と今回はややまっとうな理由だったので、しのは采女の肩に羽織をかけて返答に代えた。
「さぞ驚かれたことでしょう。私の力が至らぬばかりに、あのようなものの侵入を許してしまいました」
「いえ……」

妖しにも驚いたが、しのがもっと驚いたのはべつのこと――自分に伏せるように言ったあのときの、采女の声だ。

声量と気迫が普段とちがった。いつも紡がれる穏やかな声音、それとおなじ場所から出されたものとはとても思えなかった。――戦場を知っている人の声だ。

命懸けの戦場――怒声や叫声が飛び交う中で、檄を飛ばす。

なにより必要なのは声を届かせる声量、そしてその命令に従わせる気迫だ。

この人は、普段は穏やかな人となりでも、ひとたび戦場に出れば武将なのだと実感した。

「……どうして庇われたりしたのです」

「どうして、と申されますと？」

「貴方はこの邸の主でしょう。御身第一にお考えくださらねば困ります」

「貴女は、右近様より遣わされた客人ですから」

あたり前のように告げられた言葉に、しのは返す言葉を奪われた。

貴方様のご容態を見てくるよう右近様より仰せつかっております――

そう言ったのはたしかに自分だ。自分は主君の使者、そして主第一であるのが彼の性分だ。

「貴女が傷つけられるようなことがあれば、私が傷つけられるのもおなじです」

「ですが！　かような身でご無理なさるなど！　死んで主にお仕えできるとお思いですか!?」

そのとき、采女がはっと目を見開いた。

初めて気がついたような目――だが、深い沼の底のなにかを呼び覚ましたかのように、采女の瞳の奥から仄暗い光が浮かび上がってきた。

「死――ですか」

その声音に、しのの背にぞくりと冷たいものが走った。

不吉な言葉を口にしながらも、采女の表情はいつもどおり穏やかだ。――そう、穏やかであることが、かえって恐ろしかった。

「本来なら、私はここにいるべきではないのです」

「え？」

「実は、追い腹を切りそびれまして」

朝飯を食べ損ねまして、とでもいうような口ぶりの一言に、しのは慄然とした。

追い腹――つまり、切腹による殉死だ。

殉じる相手は、言うまでもなく主君であった先代直政だろう。

「な、ぜ……」

主の死に殉じるのは太古の昔からあったこと。しかし戦場で亡くなった主に殉じることはあっても、平時の病死ならば出家して俗世より身を引くくらいが通例だ。

しかも采女は直政の猶子、親が子より先立つのは自然の摂理だ。子が父の死に殉じるなど聞いたことがない。

それほどに忠義が——絶望が、深かったということか。

「先代様は家康公の意を承けて、殉死を戒めておられました。しかし私は追いたかった」

それを見抜かれていたのでしょうね、と采女はかすかに笑みを浮かべた。

「木俣さまに連日酔い潰されまして、気がつけば四十九日を過ぎていました。引き留めて下さったことには感謝しております。が、この身はもはや無きものと——気遣い無用に願います」

いつもどおりの穏やかな声。しかし初めてこの人の真の声を聞いた気がした。

采女のいつも穏やかな表情、その奥にあったのは喪失感だ。

仕えるべき主君を亡くし、自分の命すらも柵に絡み捕られて、現世に留められて。

追えなかった理由を仕事に求めなければ、その心を埋められなかったのかもしれない。

そういえば、采女の口から〈殿〉という言葉を聞いたことがない。

采女は当主の直継を〈右近様〉と呼ぶ。その呼び方も礼を失するものではないが、彼にとっての〈殿〉は——仕えるべき主君は、いまだ先代の直政なのだろう。

「なぜ私にその話を……？」

「貴女もおなじなのでしょう？」

碧緑を帯びた不思議な色合いの瞳が、しのの姿を映し取る。

しかしその瞳の奥には、なにかに侵食されたような陰りがあった。

「あの妖しはただ人には見えぬはずのもの。ですがあなたにはあの妖しが見えた——あなたは、

なんらかの術を施されていますね」
その指摘に、思わず息を飲んだ。
「〈名〉で気付くべきでしたね。――あなたは姫の形代なのでしょう？」
しのは弾かれたように采女を見やった。
主の真名は、篠姫という。字は〈笹〉ではなく〈篠〉――つまり、しのとおなじ名だ。
名は人が最初に得る加護であり、呪である。名は呪として他者に利用されやすいものであるため、貴人の名は隠し、おいそれと口にはしない。呼んでよいのは親や主君だけ、目下の者が呼びかけるときは官職名もしくは仮名を使う。
その〈名〉でつながったものに生じる縁、それを利用して施された形代の術――
形代は、主に向けられた呪詛を代わりに引き受ける存在だ。
主の名がなんらかの呪いを受けたとき、その災いは形代に向く。
命懸けの任であることはたしかだ。けれど。
「――たしかにこの命は主に捧げたもの。自らの務めに命を尽くす所存です」
ですが、としのは面を上げる。
「私は生の先にあるものを見ながら生きているわけではございません。あの方と共に生きると決めたからお側にいるのです」
負っているものはおなじでも貴方とは違う。そう真正面から突きつける。

自分と采女で決定的にちがうもの――それは明日を主と共に生きようとする心だ。

自分の主は考えよりも行動が先に出るイノシシ娘で、勝手に突っ込んでいっては現実の壁にぶつかって痛い痛いと泣いているようなどうしようもなく手のかかる人だが、明日も共に生きたいと思う。だから壁にぶつからないように、痛がらないようにと、つい説教してしまう。

だが采女の献身ぶりは、一日も早くその務めから解放されたがっているかのようだ。

（いえ、いるかのようではありませんのね）

当たってほしくない憶測が、的中していたことをしのは悟った。

采女がいまの自分の指摘に目を見開いているのがその証拠だ。

彼は、明日を生きることを望んでいない。だから平気で無理を押す。望む明日を――死を招き寄せるかのように。

貴女もおなじと彼は言った。采女も術を施し、直継の災厄をその身に引き受けている。

そうしながら、木俣守勝に引きとめられ許されなかったその日を待っているのだろう――

「……そのような想いで側におられては、ご主君もお辛うございましょう」

それは日々先代と比べられ、あなたの側では生きられない、あなたでは仕えるに値しないと突きつけられているのもおなじことだ。

しかしその指摘に、采女はふっと笑みをこぼした。

「右近様はご存知ですよ」

「え？」
「ご存知なのですよ。なにもかも」
次に息を飲んだのはしのの方だ。
言葉を失くすしのの前で、采女は穏やかな笑みを浮かべた。
なんの翳りもないその穏やかな笑みが、水紋のようにしのの心にさざ波を立てた。



しのが愛宕屋敷に戻ってきたのは、陽が落ちてからのことだった。
帰りを待ち構えていたあことかやは、通用門に人影を認めるなりあわてて部屋に駆け戻った。
「姉さまの胸元が！　帯が緩んでいませんでした……!?」
「し～～～～～っ！」
狼狽するかやを隣室に押し込め、あこは今まで書を読んでいたようなふりをして、何食わぬ顔でしのの帰参の挨拶を受ける。
「おつかれさま。采女殿のご様子はどうだった？」
「重症ですわね」
「えっ、そうなの!?」

昼には身を起こして文机に向かっていた。
それをしのに見つかって見事に叱られていたが、重症という様子ではなかった。
（午後から悪化されたとか……？　それとも傷口が開くようなことでもしたわけ!?）
隣室のかやの殺気を感じながら、あこは知らぬふりで状況を訊ねる。
「やっぱり先日意識が戻られたばかりだもの。まだ容態が安定していないのかしら？」
「そうですわね。そんな状態でもお仕事なさろうとするのですもの。仕事のしすぎで亡くなった方の霊が憑いているんですわ。もはや重症です」
「ああ、そういうこと……」
お役目大事な性格は、三途の川を目前にしても変わらなかったらしい。
「でも本当に大丈夫なのかもしれないわよ？」
〈力〉を宿す采女は、回復力も常人とは違っているはずだ。
「まさか。いくら傷の治りは早くとも、肋間を突かれて痛みがないはずがありません」
「ろ、肋間……？」
「あんな心の臓の近くを斬られて、生きておられる方が不思議です」
傷自体はたまが癒したのだろう。だが傷の深さの問題ではなく、人には斬られて痛烈に痛い箇所とそうでもない箇所があると聞く。肋間は足首とならんで痛みが激しいところだそうだ。
（でも、平然とお仕事されていたわよね……？）

采女はいつも微笑んでいる印象しかない。仕事に没頭して痛覚が飛んでしまったのだろうか。
「まだ傷口もふさがりきっていないのに無理をなさって。ああいう方が命を縮めるんですよ」
しのの愚痴は止む様子がない。逆に心配しすぎなのではないかとも思える。
（それってやっぱり気があるから？）
「ず、ずいぶん親身ね？」
探りを入れようと気負うあまり、声がわざとらしくなってしまった。しかし、
「右近さまの片腕ですもの。当然ですわ。早く良くなって御家に尽くしていただかないと」
と、しのの答えはあくまで事務的だ。
（うーん、やっぱり気はないってことかしら……）
これ以上聞いても無駄なんじゃ――そんな後ろ向きな考えが伝わったのか、隣室から襖越しにかやの怒りの念が飛んできた。
（わかったわよ！　ちゃんと聞けばいいんでしょ!?）
姉のことになると真剣さが違う。かやの執念に押されるまま、あこは膝を詰めた。
「あのね、しの」
「はい、なんにございましょう？」
「右近殿の片腕云々は脇に置くとして。しの自身は采女殿のことをどう思っているの？」
「え？　私ですか？」

思いがけないことを訊かれたように瞬く。

しのと異性の話をするのは初めてではない。江戸にいたころ、しのに言い寄ってきた男性についてあれこれ聞いたものだ。そのたびに、あこさまにはれっきとした許婚がいらっしゃるのですからと窘められたが、時にはこういう雑談も大切だ。

しのは「そうですね……」と前置きして、ややあってから口を開いた。

「――嫌いですわ」

「そうなの!?」

意外だった。

しのが言い寄ってきた男をあしらうことはたびたびあったが、良い御方なのですが……、と言葉を濁すのが常だった。逆に、はっきり嫌いだと言い切るのを聞いたのは初めてだ。

「どうして？　仕事もできるし、優しそうだし、かっこいいし、真面目だし」

いろんな意味で非の打ちようがない人だ。しかし、しのの答えは明確だった。

「生活力のない男は嫌いです」

「……はい？」

（生活力って……）

つい最近、かやからおなじ言葉を聞いたような気がする。たしか――

「それって黒いぼやぼやがあったから……？」

「ぽやぽや？　私が見たのはぽやぽやしてませんでしたけど、まぁ、ゆらゆらしてましたね」
（黒いゆらゆら!?）
黒いワカメでも漂っていたのだろうか。
（って、どういう邸よそれ!?）
黒いゆらゆらが具体的にどんなものなのかを知りたかったが、「あこさまがお嫌いなものですから」と断られてしまった。
（わたしの嫌いなゆらゆらって一体なに……？）
「ゆらゆらはどうでもいいのです。問題は、そのゆらゆらにご自身が立ち向かわれたことです。ご自分のお立場を全然わかっていらっしゃいません」
（ご自身でって、体調が悪いのに采女殿が掃除をしたのが気に食わないってことかしら？）
家人がほったらかしにしていた埃を看過できず、自ら雑巾を取った采女――それをしのに叱られたとか？　……まったく想像できない。
「まぁ、真面目な方だからしかたないわ」
事情がわからないながら救いの手を差し伸べたものの、「ご自身を律せない者が、どうして主家をお守りできるというのです」としのの見立ては厳しかった。
「古人も言うではありませんか。家を治められない者がどうして国を治められようかと」
（それが生活力がないってこと？）

家が疎かになっているようでは、いつか職も失って、今の禄も召し上げになるだろうからと——いや、なにか違う気がする。

「家どころか、ご自身すら守れない方になにが守れます。あの方は自分を粗末にしすぎです」

（あ……）

その言葉に、ひとつの面影が脳裏をよぎった。

——私が継がねば父も浮かばれまい。

自分は父の跡を継ぐ者と——そのための存在としか考えていない人。

その務めを果たすためであれば、命を賭すのも辞さない人——

采女の仕事への打ち込みようがその人と重なった。そして、自分はその理由を知っている。

「あ、あのね、しの。采女殿もおなじかどうかはわからないけど……采女殿は、自分が大切に思われてるってことに気づいていらっしゃらないんじゃないかしら」

「え？　まさかそのようなことは……」

「あるの。この家では」

父のことをよく知らないと、もっと話せばよかったと、言っていた。

よくよく考えれば采女も直継とおなじ、先代の子だ。年だって二つしか変わらない。

養父である先代を亡くした時、采女は十五歳だった。元服していてもまだまだ子どもだ。

養母である東梅院も気の病で、両親から与えられるはずの想いが十五歳で途切れている。

「わたしはしのとかやがいてくれるけど、采女殿は奥方もいらっしゃらないし、右近殿もああいう方であまりおっしゃらないし、周りの誰かが言ってあげないとわからないことだと思うの」

采女と直継が抱えているものがおなじとは限らない。

しかししのは思い当たることがあるのか、「そう……かもしれませんわね」とつぶやいた。

「たしかに、はっきり申し上げたほうがいいのかもしれません。根本的に駄目な方ですから」

「だ、駄目な方……？」

先ほどの生活力のことといい、しのの目に采女はどのように映っているのだろう。

（やっぱり、采女殿とはなんにもないんじゃ……）

そう思いかけたとき、不意に足音が聞こえた。

廊下板を鋭く蹴る音は侍女のものでない。それを察したしのは部屋の隅に身を寄せる。

「右近殿……」

姿を見せたのは、数日ぶりの直継だった。

先触れの侍女は直継に追い抜かれてしまったらしく、恐縮して廊下に控えている。

あこは、気にしないでと目で侍女を下がらせて、「いらせられませ」と手を付いた。

顔を上げると直継の顔色が悪い様子はない。だがどこか気が立っているように見える。

あこは直継に上座を譲ろうとしたが、その前に直継は傍らのしのに視線を落とした。

「采女の様子はどうだ」

（采女殿の安否が先!?）

数日ぶりの再会だというのに、息災か？　の一言もないとはどういうことだ。

（……まぁ、こういう人だけどねー……）

自分がたまに崖から落とされそうになったときも、采女に安否を聞いていたくらいだ。

もはや采女は自分の身体の一部なのだろう。片腕相手に嫉妬しても仕方ない。

しのもさすがに直継に、仕事の虫ぶりが重症です、と伝えるのは憚られたか、

「今日はお食事も進まれたご様子。ご本復の日も近かろうかと」と言葉を換えた。

「そうか。明日も頼む」

心得ましたと一礼して、しのは部屋を下がる。

あこが上座を譲ると、直継はあたり前のように腰を下ろした。

だがそれきり言葉がない。

視線もこちらに向いていない。采女の様子を聞きに部屋に来てしまった以上、そのまま帰るわけにもいかなかったといった風情だ。なにを見るともなしに、部屋や庭を眺めている。

（……そんなに早く知りたかったのかしら）

わざわざ部屋まで出向かずとも、後でしのが報告に伺っただろうに。

けれども、会いにきたのでなくとも来てくれたことは嬉しい。顔を見られただけで安心する。

「起きて大丈夫なの？　ちゃんと休んでる？」

「問題ない」
「問題ないじゃなくて。まさか采女殿がいないのに出歩いているの？」
その問いには無言だった。直継は嘘がつけないから、答えずに流そうとしている。
（この人はもう……!!）
佐和山城の一件からまだ十日も経っていない。死線をさまよった采女ほどではないにしろ、直継も疲労がたまっているはずだ。
「そなたこそ、なにもなかったか」
「わたし？　わたしはいつも元気よ。ご飯も美味しくいただいてるし」
「今日、采女の邸に行っただろう」
「采女殿のお邸？　たしかに行ったけど」
「襲われなかったか」
「襲……っ!?　采女殿が襲うはずがないじゃない!!」
すると直継は「……采女が？」と首をかしげた。
（……ちがうの？）
どこか根本的に話が嚙み合っていない気がする。あこは直継の言葉を反芻してみる。
そなたはなにもなかったか――采女の邸に行ったのだろう――襲われなかったか。
（襲ったのが采女殿じゃないとすると……モノノケとか？　あっ、ゆらゆらってまさか!?）

「わ、わたしは大丈夫よ！　なにもなかったから！」
「ならいい。あの娘にものの残滓を感じた。采女が祓ったようだが心許ない」
これでも寝所に貼っておけ、と直継は懐から呪符を取りだした。
部屋まで来てくれたのは、しのの報告を受けるためではなかったらしい。
（心配してくれた、の……？）
そのとき胸の奥にほのかな灯が点るとともに、先ほどのしのとの話が思い出された。
（……そう、わたしだって伝えなきゃ）
「あの、心配してくれてありがとう」
「ああ」
「でも右近殿が無理していないかな、元気でいるかなってわたしも心配なの。忙しいのはわかるけど、無理はしないで」
あこは膝を寄せ、直継の手を取る。その手は冷たくて、体調が万全でないことがわかった。
触れられた直継は、驚いたようにこちらを見つめる。
不思議な色を宿す瞳が、これはなんなのだろう、と不思議な物を見るように見返してくる。
こんな至近距離、しかも真正面から見つめるのは数日ぶりだ。
（この瞳にはなにが映っているの……？）
吸い込まれるように見つめていると、あこの頬に冷たいものが触れた。

まったく想像していない出来事に、思わず「ひゃ!?」と間の抜けた声を上げてしまった。
触れていたのは直継のもう一方の手だ。頬を手のひらで覆われてあこは硬直した。
「な……ななっ、ななに!?」
「そなたは元気で良いな……まるで盛りの花だ」
花の譬えに鼓動が跳ねた。が、
「無駄に生命力にあふれている気がする」
つづく言葉に撃沈した。一言多い。
「だが生きようとする力にものは近付きづらい。私もそなたの力に救われる」
はっと見上げると、直継の目が先ほどより穏やかだ。あこは胸の奥から涌きあがる熱で、身体が熱るのを感じた。
「あ、あのね、こんな力でよければ、いくらでも分けてあげる。けど……お願いだから、本当に無理しないで。心配だから」
あこは、自分の頬に触れていた直継の手を取り、両手で包みこむ。
熱が——想いが、伝わるようにと祈りながら。
——心配している人がいることを、忘れないで。
すると直継は驚きに目を見開いたが、やがて言葉を落とした。
「なるだけ……な」

（あっ、また流そうとしてる！）

「ダメ。絶対」

あこが手を強く握りしめてじっと見つめると、直継は気押されたように言葉を換えた。

「――なるべく、努力する」

まぁそれなら、と手を離そうとすると、手のひらを返して逆に直継があこの手首を取った。

「え!?」

「もうしばらく、借りる」

その理由を聞きたかったが、気恥ずかしさのあまり口にすることができなかった。

沈黙の中、手のひらを伝わってゆっくりとたがいの熱が混じり合う。

言葉はなくても、想いが流れ込んでいくような気がした。

「……采女殿、早く戻ってくるといいわね」

「あいつは力を抜くことを知らん。本調子になるまで帰ってこなくていい」

「またそんなこと言って……心配なんでしょ？」

直継はわずかに逡巡し、「……まぁな」と漏らした。

「じゃあちゃんと言ってあげなきゃ」

必要あるのか？　と直継の目が訊く。

「大切なことよ。明日も一緒にいたいってちゃんと伝えるの。そしたら元気が湧いてくるから」

こうやって話すことも、手をつないでいることも。些細なことかもしれないがきっと大切なことなのだ。

直継の目はなおもその理由を問いたげに見つめていたが、やがて「わかった」と頷いた。

ふたりのそんな様子を庭から眺めていたたまは、ふんっと鼻を鳴らした。

（まったく、誰のために無理をしていると思っているのかしらね！）

本心としては今すぐ部屋に踏みこんでやりたいところだが、采女を守った侍女に免じて、今日のところは見逃してやる。

彼女たちが二月に迷いこんだときに開いた結界の大穴――その影響で、愛宕屋敷にまで入り込もうとする物の怪がいる。直継は出歩かずとも祓わざるを得ないというのが現状だ。

それに存在の不安定な彼女らに近づけば、直継自身も〈気〉を乱される。

だからなるだけ距離を置くようにと言っておいたのに、侍女に付いていた妖しの残滓にいてもたってもいられなくなったらしい。

部屋に行っても触れるなとも言っておいたのに、かの娘を前にすっかり忘れているようだ。

采女の邸に時迷い人の侍女を行かせたのは、采女の回復の様子を探るためだ。

鳥居家の家人の分は、怪我を負う前に張った結界でなんとか抑えられている。侍女の姉の方

が出入りする分までは、抑えられる程度に回復したようだ。
しかし、姉だけでなく妹まで出入りするとものが現れはじめた。
結界を越えるときに力はほとんど削られ、現れたのはほんの小さなもの——埃玉のようなぼやぼやと丸い玉で、すぐに消滅させることができた。
だが今日、侍女姉妹に加え、彼女まで邸に入りこんだところ、大きな力を持つ物の怪が侵入してしまった。采女の回復にはまだまだ時間がかかりそうだ。
（それにしても、なんで迷いこんできたりしたのかしらね？）
自分の〈力〉を超えるなにかが結界を破り、彼女たちをこの世界に導いた。
その意図は何なのか。怨霊たちのしわざか、それとも——
結界が破れたのは彼女たちのせい、だが佐和山城で彼女の祖父に救われたのもまた事実だ。
采女の身を乗っ取った三成。もはや采女ごと浄化させるしか手がなかった中、三成を采女の身体から分離させたのが彼女の祖父——鳥居元忠だった。
あの者は生前、なんら〈力〉を持っていなかったはずだ。
現に夕刻に彼女が目を覚まし、五年風情と言った自分が懐剣を突きつけられたとき、自分が思ったのは、西陽を受けて光る刀が——暁の中で光を放っていた刀身が、もはやみずから輝くことはないだろうということだった。
彼女の祖父が死に臨んで見つめたもの——暁の光。

奇しくもおなじ朔の月の下、彼女の想いが祖父の霊を呼び起こした。
元忠はふたりの孫――あこの願いを聞き、采女の命を救った。一度きりの奇跡だ。
もはや彼女の祖父が此岸に戻ってくることはない。
彼岸――自分が永遠に辿りつけない岸。その先にいるはずの人のことを想うと、胸が詰まる。
けれども、その痛みは昔ほどではないことにたまは気付いていた。
時の流れの中に想いを置き去りにしたからではない。彼の遺した希望を――それが現実になるかもしれない明日を感じているからだ。
あと幾日か待てば、あの者が帰ってくる。
会うのはおよそ半年ぶりだ。さてどのように成長していることだろう。
あの人ではないという現実にまたへこむかもしれないが、守りつづけるかぎり明日は来る。
いまはただ明日という日が待ち遠しく思われた。

采女は白小袖姿のまま、自室を出てすぐの廊下の柱に身を預けていた。
もう休むと人払いをしてあるにしろ、人前では見せないしどけない姿だ。
ぼんやりと見上げる天には月が浮かんでいる。数日見ぬうちにずいぶん膨らみを帯びた。
月が肥え太るたび、置いて行かれたという焦燥が身を掻き立てる。

そして痩せ細るたび、ああまたその日が近づいていると感じる。
毎日が、すべてあの日に――慶長七年二月一日につながっている。
年忌の日は家臣総出の法事があり、采女は当主に代わってそれを差配しなければならない。
その後の酒の席は深夜に及び、ゆっくり偲ぶ間もない。必然的に月命日が心の拠り所となる。
あの日――三月一日、幻の佐和山城で朔の月を見たとき、生き長らえていたのはこの時のためだったのかと――迎えにきてくださったと、思ったのに。
（またも、連れていってはくださらないのですね）
死に際して追うことを許されず、今もなお自分は現世の楔につながれている。
（それが務めだというなら、果たしましょう）
――それほどにお務めがお好きなのですか？
そのとき自分は、さぁ、と答えた。
好きも嫌いもない。それが自分がここにいる――現世に留まっている理由だからだ。
人には、生まれたからは成すべきことがあるという。
直継が父の跡を継ぐためにいるように、自分は務めを果たすためにここにいる。
望んでも迎えが来ないのは、きっとそれがまだ終わっていないからだ。
それを誰かに話したことはなかった。いつものように心の底に沈めていればいいものを、なぜ彼女に言ってしまったのだろう。――聞いて、欲しかったのだろうか。

話す相手を自ら求めたことはない。探すまでもなく、兄が根こそぎ訊き出してゆくからだ。

（そういえば、兄上とお会いするのは久しぶりだ）

秀忠公の佐和山滞在、それに合わせて江州に戻るとの報せが江戸から届いている。

秀忠公が来るまでもう十日足らず、この数日中にも兄は戻ってくることだろう。

大名家や重臣は、身内を江戸に置くことで徳川へ忠誠の証を立てている。井伊家は直継の妹が江戸住まいとなり、筆頭家老鈴木家が差し出したのは嫡子である主馬だった。

人質ではないので、届け出さえすればいつでも国許に帰ってこられる。しかし主馬は家老名代として井伊家江戸屋敷を差配しており、会うのはかれこれ半年ぶりだ。

自分をこの世に留めおいたのは木俣守勝――だがそれが兄の策略だったことを知っている。

いつ後追いしかねない自分を、兄は自身が引き留めるでなく、守勝に託した。

それは兄自身が、深い闇の淵を知っているからだ。

――やることがさ、なくなったんだよね。

兄がそう告げたのは、土佐から大坂に戻ってきたときのこと。

関ヶ原の戦の後、兄は長宗我部氏の城を接収するため土佐へ向かった。そこで籠城した長宗我部の残党と銃撃戦となり、その戦は残党の首をことごとく討ち取るという結果に終わった。

城を山内家に引き渡し、大坂に戻ってきた兄――その瞳が持っていたはずの色は失われていた。

長宗我部残党の怨嗟の念と、多くの家臣を失った衝撃と、絶やさねば終わらなかった戦への憤りと――おそらく初陣を終えたばかりの若さもあったのだろう。

精神に折り合いを付けかねている間にものに憑かれ、命は取りとめたものの〈力〉を失った。

水神の血を継ぐ者、そして家老の嫡子――生まれたときから定められていたそれらの務めを奪われ、兄の世界は一転した。

廃嫡を申し出ることも考えただろう。けれども、兄が深い淵を見せたのはその一度きりだ。

兄は幾度も失踪騒ぎを起こしながらも、そのたびに謎の技を身につけて戻ってきた。

そしてついには家老名代の任を受けた――〈力〉のない身でありながらも家を継ぐ覚悟、主家を支える覚悟ができたということだ。

一度はすべての色を失ったはずの世界で、ふたたび生きることにした兄。

その力を与えてくれたのはいったいなんだったのだろう。

時が、癒してくれたのだろうか。忘却が、過去を泥土の底に沈めたのか。

――自分はまだ、過去にできそうにない。

そのときふと、そよいだ夜風に庭を見やると、芍薬が目に留まった。

兄が訪ねてきた際、花のない庭を見かねて愛宕屋敷から株を分けてもらったものだ。

いまだ咲かぬ白の芍薬――月の下、ひそやかに立つその姿は、よく知るものに似ていた。

細く儚げで、身に合わぬ重い花を戴せ、それでもまっすぐに立とうとする姿。

父には遠く及ばぬ身体と〈力〉で、それでもおなじものを負わねばならない人。そして自分の抱えている想いを知っていながら、敢えて許すとも許さぬとも言わない人——

許しを出す立場ではないとわきまえているのか、それとも他になにかあるのか。

春の風は冷たく、芍薬の蕾はいまだ堅い。

それでもいずれ花は咲く。——その花を支えたいと、心から言える日は来るのだろうか。

共に先代の子であるが兄弟ではなく、君臣というには捻じれた関係。

自分が素直に彼を認められないのは、彼の人の子だから——血を継ぎ、力を継ぎ、命をかけて守られた彼への嫉妬だったのかもしれない。

——そのような想いで側におられては、ご主君もお辛うございましょう。

蘇る彼女の声音。

話したのはきっと、どうせ見抜かれているなら話してもおなじと思ったからだ。

（……いや、それだけではないか）

——あの方と共に生きると決めたからお側にいるのです。

いまの自分にはただひたすら眩しい言葉だった。彼女を苦手だと思った理由はきっとそれだ。

先代にはあたり前のように言えた言葉。その光を今も彼女は抱き、突きつけてくるから。

昔の自分が抱いていたものを見せつけられているようで、それを壊してやりたいと——そんな衝動が鎌首をもたげた。

――死んで主にお仕えできるとお思いですか!?
死んで主に仕えたかったのだ自分は。
そんな闇に近しい想いを抱くのは、身体に巣くう怨霊の残滓のせいかもしれない。
それはいまも体内をうごめいて、自身の霊力を喰み、あわよくば死の世界に引きずり込もうとする。
だが起きることもままならぬこの身で永らえているのは、きっとそもそもの己の本質が怨霊に近いせいだろう。彼らの突きつけてくる闇は、すでに自分の中にあったもの、偽りの言の葉を手に入れたときからすでに自分の一部となったものだった。
そんな自分に、彼女は近づかない方がいい。心に掲げるその光をずっと失いたくないならば。
(……いや、その心配はいらないか)
おそらくもう、彼女は来ない。
直継もまた知っていると、そう伝えたときの彼女の表情――自分の知らぬ淵を見せられて、その眼にあったのは理解の及ばぬ恐怖だった。
得体のしれないものに近づきたくないのは、人としていたって正常な感情だ。
彼女はもう来ない。もう自分の気持ちをさざめかすことはない。
そう思うと、肩の荷が下りたと思うと共に、なぜか虚空の中に漂うような虚しさもあった。
(苦手……でしたが、嫌い……ではなかったのですけれどね)

夜の深い闇に身を浸しながら、采女はいまだ咲かない花を眺めつづけていた。



しかし翌朝、手伝いの挨拶に訪れたその姿を認めると、采女は驚きに目を見開いた。
「どうなさいまして？」
「……いえ、もういらっしゃらないかと思いまして」
「なぜです？　私は務めがある以上、どこにでも参りますわ」
来るにしても妹の方かと思っていた。昨日の話は胸に納めるには重かろう。
姫君や主にそれを話したのだろうか。話されたからといって困る話ではないが、次に愛宕屋敷に伺候したときに自分に向けられる視線が違うかもしれない。
「私が来ない方がよいとでも思われまして？」
彼女は揺らぎなくこちらを見つめてそう告げてから、「あ、間違えました」とわずかに視線を逸らした。そして「――もとい」と向きなおる。
「私は、貴方様が心配だから来たのですわ」
「……はい？」
「貴方は療養中だというのに過労で倒れかねませんもの。そんな愚かなことにならないか、心

配で目を離していられません。だから参りました」

昨日と言っている内容はおなじはずなのに――なにかが違った。

それは一体なんだ？

（……ああそうか）

理由が違うのだ。家のため、主君のためではなく、自分が心配だから、と。

まっすぐな心で正しいと思うことを突きつけてくる論理的な彼女。その彼女が見せためずらしい隙だと思った。

だから思わず言っていた。

「貴女に心配していただくことではないでしょう」

そのとき彼女の瞳が揺らいだ。――ほんの一瞬だけ。

しかし彼女はすぐに本来の強さを取り戻すと、まっすぐに貫いてきた。

「私が勝手に心配しているだけですからお気遣いなく」

口調は変わらない。――努めて、変わらないようにしている。

そこで采女ははっと現実に引き戻された。

（……いま、なにを言った？）

いつものように、ただ穏やかに、お気遣いありがとうございますと、そう言えばいいだけの局面だったのに。

触れた闇にめげなかった彼女に追い打ちをかけたかったのか？　――いやそんな、子どもでもあるまいに。

「さぁさ、今日もゆっくりお休みくださいましな」

雑巾がけをいたしますから、廊下がすこし騒がしくなりますがご容赦くださいませ。

「あの……っ」

立ち上がる彼女に、思わず呼びかけていた。

「はい？」

「――申し訳ありません。間違えました」

彼女は、なにが、とも、なにを、とも言わず凝視した。

目を逸らすことなくその視線を受け止めていると、やがて彼女はもう一度座りなおした。

「めずらしいこともあるものですね」

いつものようにごまかせばいい。嘘をつくのは慣れているだろう？　そうささやく声がする。

だが、それでも本当のことが口を突いていた。

「昨日から寝ていなかったもので、つい」

沈黙があった。怒声が飛ぶかと思ったが、それもなかった。

「どうして起きていらしたのです」
「……花が咲くかなと思いまして。眺めていました。一晩中」
さらに長い沈黙があった。
「まだ蕾がついたばかり、一日二日で咲くはずがないでしょう」
何日寝ずにいるおつもりですか、と答える瞳は冷ややかだ。
「いえ、それはそうなのですが」
昨日の貴女の言葉を、いろいろ考えていまして。
考えた結論ではないのですが。
でも今、なにか間違えた気がしたので、お呼び止めいたしました。
「訂正します。――ありがとうございます」
幾度となく口先で言ったことのある言葉だ。しかし今は、それを伝えるべきだと思った。
身分や立場といった形式ではなく、彼女が告げたそれは、自分をこの世につなぎとめたのとおなじものだった。――そして自分たちに足りなかったものだ。
――そのような想いで側におられては、ご主君もお辛うございましょう。
直継は自分の想いを知っている。知っていてなにも言わない。
自分たちは互いにおなじものを見つめ、すぐ側にいながら見えない壁を作って、互いに傷に触れることはない、そういう関係だった。

自分たちに必要だったのはいま彼女の告げたこと――心の壁を突き崩す言葉、だ。
父を亡くし、遺されたわずかな〈力〉と儚い身体で家を背負うことになった存在。
父の跡取りにふさわしくなりたくて、しかし持って生まれた〈力〉ばかりはどうしようもなくて。身を削って勉学や鍛錬に励む姿を、采女は国に戻るたびに見ていた。彼は静かにいつも飢えていた。ままならぬ現実と自身に対する苛立ち――その炎が瞳から消えることはなかった。
その立場にあるのが自分ではないことに嫉妬を覚えながらも、その者がこれからずっとその重荷を背負ってゆけるのか、気になった。
その先を――彼の姿を見たいと思った。
周囲から託されたからというだけならいくらでも手を抜く方法があった。しかし自分はそうはしなかったのは――きっと心配だったのだ。
さきほど彼女が自分に言った言葉は、そのままあの人に伝えるべき言葉だった。
――まだ間に合うだろうか。自分たちは。
彼女の瞳がまっすぐに探る。
それがふわりとほころぶまで、そう時間はかからなかった。
「……仕方のない御方ですね」
ため息交じりにこぼれた笑顔。
ほんのわずかなものだったが――目を、奪われた。

「昨日、昼にお休みになったせいでしょう」
身体が睡眠を欲してないのは、よくなってきたせいかもしれませんわね。
「でも今日もゆっくりお休みくださいませね。今朝がた、右近さまよりお言葉をお預かりしてきましたわ。――早く治して戻れ、仕事が溜まって困る、だそうですわ」
不意を突かれて、采女は思わず口元に手を当てた。
そんな些細な一言に、息が止まるかと思った。
（なぜ……）
なぜずっと止まっていた時を動かすようなことを――今そのことに気づいたばかりの自分の先手を打つ？
疑問が渦巻きながらも、心のどこかでその答えを知っていた。
（あの姫――だ）
あの時迷いの姫が、止まっていた彼の〈時〉を動かしたにちがいない。
「さぁ、早く臥所にお戻りくださいましな」
軽やかに告げて彼女は立ち上がる。
その向こうでは、陽光の下、ほころびはじめた芍薬がやわらかな春風に揺れていた。

間章　光のどけき・三

「ほ、ほら、あのときのことは誤解だったじゃない。ね？」
しのはあれからも何度か采女の邸に赴いていたが、結局ふたりに浮いた噂は立たなかった。
「そんなことないですよ！　絶対に姉さまを狙ってますって！」
「と言っても、ふたりとも全然そんな素振りはないし……」
采女もしのも、お互いだけでなく、他の人相手にも浮いた噂ひとつ聞こえてこない。
しのはともかく、采女は身分のある立場、嫁取りの話が出てもおかしくないだろうに。
あの采女のことだから、主君の話が固まるまではと遠慮しているのだろうか。
「まぁ、采女殿が気に入ってくださっているなら、話を進めてみてもいいかもね」
「だから生活力のない人に姉さまはあげられませんって！」
（そういえば、しのも生活力がないから嫌いって言ってたような……）
「ねぇ、采女殿のどこが生活力のない人なの？」
六月の御家騒動で、采女は直継の御側役の任を解かれた。だが井伊家の一門には変わりはないし、いまも千石取りの身だ。石高的にはなんら問題はない。
「だって明日にも冷たくなってそうじゃないですか！」

（生活力ってそっちの意味？）

禄ではなく生存力という意味だったらしい。

「冷たく……って采女殿はちゃんと生きてるから」

「仕事で徹夜とかして生活がなってない人は、ある日いきなり部屋で倒れて、そのまま翌朝冷たくなって発見されたりするんですよ！」

そう言って、かやは手にしていた古着を握りしめた。

かやは采女をよほど嫌っているのか、身も蓋もない。そしてどこで仕入れた情報やら、年齢の割に妙に説得力がある。

「たしかに無理はしてそうだけど、お身体は丈夫そうだし」

一瞬、采女邸に乗り込んだときに見た上半身を思い出して、あこはあわてて掻き消した。

「そういう人ほど健康を過信して、ころっと逝っちゃうんですよ！　あの人、自分にはとことん無頓着ですから！　姉さまに手を出したいなら、御家のことを考える十分の一でも自分を省みてからにしてください！」

「いや、だから采女殿が狙っているというのはかやの思い込みだって……」

「姫さまは鈍いです！」

「鈍いって……そうかしら？」

鈍くなくてもあのふたりにはなんにもない気がするのだが。

「だって小一郎兄さまのことだってなーんにも気付いてなかったじゃないですか！」
「こ、小一郎は……っ！」
小一郎のことを言われると、まったく反論しようがない。
「小一郎兄さまが江州にいたときだって、いっぱいいっぱい姫さまを気にかけてらっしゃったのに！」
（江州にいたころ？　って、三月の話よね？）
二月に迷いこんで、それから鳥居家一行は采女邸に預かってもらっていたので、自分が小一郎と接点があったのはほんの十日間ばかりだ。
しかもその大半が秀忠公の滞在と重なって、小一郎と共に過ごした時間はとても短い。
（その間になにかあったかしら……？　あ、もしかして、あれ？）
あこは、佐和山山中の神社に水を汲みに行った帰り、小一郎が迎えに来てくれたときのことを思い出した。


触らぬ姫に祟りなし

――では、またな。

関ヶ原の闇の中を、白き被衣が舞う。

光をまとうそれは、領巾のようにやわらかく三成の視界を遮った。

が、次の瞬間、鋭い風となって襲いかかってきた。

「く……っ！」

風は竜巻となって夜空を駆け昇る。

三成は巻き上げられた枯れ葉や石礫を二の腕で防いでやりすごし、

「半端ないなあいつ……」とこぼした。

この竜巻は吉継の転移で生じたもの。吉継がこの場から消えたことで、失われた霊気を埋めようと自然がなしたのだ。

旧友の大谷吉継を仲間にするため、ここ関ヶ原に迎えにきたのがつい先ほどのこと。

吉継は五年近くも眠っていたとは思えないほどよく状況を把握しており、言いたいことだけ言って竜巻を置き土産に姿を消した。

目覚めたばかりのせいか、蓄えていた霊力が制御できていないらしい。

「みなは無事か？」

「無害、とは言えませぬな」

三成の側に控えていた左近が答える。

あたりを見渡すとたしかに焔の数が減っている。転移に巻きこまれたらしい。
「殿はご無事にございますか」
三成は左近をちらりと見やり、「見くびるな」と告げた。左近はすかさず、申し訳ございませぬと片膝をつく。
先ほど不意に竜巻の衝撃がやわらいだのは、左近が張った結界のせいだ。
吉継の竜巻が三成を巻きこみかねないと読んだのだろう。
たしかに水神の末裔から受けた傷は完治していない。だが転移の余波で揺らぐほどでもない。
（昔から過保護すぎるのだこの男は……！）
不快になると知っていながら手を出して、指摘されればすかさず謝罪する。己が腹心ながら、あいかわらずそつがない男だ。
「して、いかがなされます」
「そうだな……」
三成は腕を組んで思案する。
清洲攻めは吉継に止められた。佐和山へ戻るか、それとも。
数日内には秀忠がここ関ヶ原を通過する。下手に動くよりここで術を張ったほうが――と策を巡らせていると、ふと吉継の残した声音が脳裏をよぎった。
――久闊を叙しているがいい。

耳朶をくすぐるからかうような声音に反射的に腕をとくと、きつく拳をにぎりしめた。

（私から謝れと？　……ふざけるなッ！）

三年前、三成が怨霊として目覚めた際、左近と合流する前に井伊直政を襲撃して、逆に封じられてしまった。そのため左近とは生前来の久闊――関ヶ原の戦から、実に五年ぶりの再会だ。吉継は言外に、左近に謝っておけと言い置いたのだ。

三年前の直政急襲は性急だったと認める。死の床にあったとはいえ、あせらず布陣を固めるべきだった。しかし家臣に対して謝れとは何事か。しかも他家の内情に口を挟むなど。

（あいつは昔から一言多い……！）

吉継は昔から飄々としている風でいながら、重い一言で刺す。しかし聞き入れる度量や理解する頭のない相手には、あたりさわりなく飄々と接しつづける。誰彼かまわず正論を吐く自分とはちがい、そんな吉継の周囲には人が絶えなかった。

いまも耳が痛く感じるのは、その言が正しいと認めているからだ。吉継の忠告が為にならなかったことはない。

三成はしばし逡巡ののち、苦虫を数百匹嚙みつぶして口を開いた。

「そ、息災だったか」

一瞬、なにを言ったかといった様子で左近が面を上げる。

「……死んでおりますが」

「それくらいわかっている!!」
機微を察しろ、と言われるまでもなくわかっているだろうに、食えない男だ。
「某は封じられることもなく息災にございましたが」
まだあてこするか！　と思ったが、
「お待ちしておりました――ずっと」
最後の一言が深く刺さり、言葉を返せなかった。
関ヶ原の戦から五年。死したとて、けして短い時間ではない。
待たせてすまなかった――そう落とした声は届いただろうか。
「……そうだ、久々に笛でも聞かせろ」
三成は謝罪の声をかき消すように言葉を重ねる。その声音は不自然きわまりなかった。
「笛、にございますか？」
仕方ない、といつものように笛を――愛用している〈笹葉丸〉を取りだすかと思いきや、返す左近の声は渋い。
「どうした」
「いえ、あいにく笹葉丸は屋敷に置いてまいりましたので」
おそらく屋敷ごと接収されていることでしょう、と左近はつづける。
佐和山の麓の、関ヶ原出陣以降帰ることのなかった屋敷だ。落城の折の類焼はまぬがれた

が今は井伊家の支配下にある。

ほんの思いつきで言ったことだった。ならばいい、そう告げるつもりだった——が。

「良い機会にございます。笹葉丸の回収がてら佐和山を探ってまいりましょう」

すぐに戻りますゆえ、しばしお待ちを。

「ちょ……っ」

待て、の一言も聞かず、左近は踵を返し、夜闇に溶けるように消え去る。

三成はそれを呆然と見送るしかなかった。

せっかく迎えに来たのに、なぜ一時と経たずしてふたりともいなくなる……？

自分の周囲には人がいない。それは己の性分ゆえと割り切っているし、慣れてもいる。慣れてはいるが——

（これも己の宿業か……？）

五年ぶりの再会がこれかと、さすがに今ばかりは恨めしく思っていると、

「……殿、いかがいたしましょう？」

控えめに切り出した兵庫に、三成は、貴様は黙れと冷ややかな視線を返した。

山鳥の声が、朝霧を裂いて山中に響く。

あこはひとり、鳥居の下に立つと、大きく息を吸いこんだ。

澄みきった空気は、湖が近いためか湿り気を帯びている。朝露ににじむ樹木の澄んだ香りは、直継と印象が重なった。

神気を宿す直継は、気配が普通の人とはどこかちがう。神社の持つ厳かな空気と似ているのかもしれない。

朝露に濡れた石畳を進み、白木のまだ新しい社殿の前で手を合わせた。そして面を上げ、右にある御神体――岩を打つ滝を見やる。

一昨日、常夜灯に照らされていた姿とはまた趣がちがう。光を帯びている様子はないが、絶えず流れ落ちる水は、触れずともその冷たさと清浄さがわかる。

（きっとこの水が……）

懐から水入れを取り出す。あの宴の晩に直継に渡そうとした瓢形の陶器とはちがうものだ。あれは時を渡ったときに、時の彼方に置き去りになってしまった。

――そう、この水があればきっと、もう一度、時を渡ることができるはず。

そして渡った先はきっと……

あこは懊悩を追いやるようにきつく目を閉じ、滝に手を伸ばす。しかし神水に触れる前に、腕をつかまれた。

「おまえな……」
驚いて目を開ける。つかんだ手の主は、間一髪といった体で大きく息をついた。
「小一郎……どうして……」
「一昨日あんなことがあったのに、一人歩きしてなにかあったらどうする気だ」
小一郎は頭ひとつ高い位置にある前髪を苛立たしげにかいた。
「でも、小一郎も神水が関係あると思って来たんでしょう？」
「ちがう。おまえがいると思ったから来たんだ」
（わたしを心配して……？）
小一郎はこの江州行きの総責任者だ。しかしあこの身柄を井伊家に預けたからは、もう務めは果たしている。なのに。
「よこせよ」
小一郎はあこの腕を解放して、手を差し出す。
「でも……」とあこがためらうと、
「おまえを守るのが俺の務めだ。俺は触れてもなんともなかったから俺が汲む」
ほら、と大きな手のひらを出され、あこはおずおずと陶器を載せた。
そんなふたりの様子を木陰から見ている男がいた。たくましい大樹のような若武者――その

男に憑依した左近だ。

佐和山には結界が張り巡らされている。霊体で入りこんでは結界に阻まれ、入りこめたとしても侵入が水神に知れる。

そこで用いたのが憑依だ。肉体を得ることで霊力は制限されるが、制限されているがゆえに見つかりにくい。

憑依により生前の年からずいぶん若返り、左近は力みなぎる感覚を思い出しながら〈笹葉丸〉の気配を追った。そしてたどりついたのが山中の神社、その境内には思わぬ先客がおり、木陰に身を隠したという次第だ。

（あれが兵庫の言っていた娘か）

先日、兵庫があの者をさらおうとしたところ、謎の力によって娘は消えたらしい。ほんの一時のことだが、彼女は兵庫の察知しうる範囲から消えた。それは佐和山から消えたも同じだ。霊体となった今では左近も転移ができる。しかし生きた身ごと姿を消すなど、神の末裔でもなければ無理な所業だ。

（神の力でも宿しているのか？）

娘の年の頃は十代半ば、際立った容姿や体軀でもなく、ごく普通の武家の娘だ。神性どころか大名家の姫の風格すら感じられないが、成り上がりの徳川陪臣の娘ならばめずらしくもない。

娘は知り合いらしき男に水を汲んでもらうと、ほどなく神社を後にした。

（あの娘にどんな秘密が……？）

気になったが、優先事項は他にある。左近は娘から社に視線を移した。

（笹葉丸はここか）

この神社は生前に詣でたことがある。記憶にあるよりも社の木材が白っぽい。どうやら建て替えられたらしい。

神社は神気に満ちて、笹葉丸の波動は感じられない。しかし導かれたからは、ここに奉納されているのだろう。

左近は木陰から姿を現し、足を踏み出す。しかしその足が玉砂利を踏むことはなかった。踏み出した足先が神域の結界に触れるなり、火花が散った。

左近はいったん足を退く。この程度なら侵入できなくはない。だが無理に結界を破れば水神に侵入を知られる。さてどうしたものか。そう思案していると、

――笛でも聞かせろ。

不意に主の声音がよみがえり、左近は思わず笑みをこぼした。

（あの方はまったく……）

あの言はあからさまな照れ隠しだ。五年ぶりの再会にさまざまな想いが交差して、言葉がつづかなかったらしい。不器用なのはあいかわらずだ。

いつも他人に気を遣うことなどないくせに――いやないからこそ、久々の再会でどう接して

よいのか測りかねたらしい。他の者と別の範疇に置かれていることは家臣冥利に尽きる。だが、言い慣れた言葉がとっさに口を突いただけなら、笛に固執する必要もない。みやげは他のものでもかまわない。

（ああ、あの娘にするか）

左近は口端に笑みを浮かべると、ふたりの後を追った。

細い山道を下る。道は拓かれているが、木の根が土を縦横に走り、その合間に水が溜まってぬかるんでいたりする。

下手に道を歩くより根の上を伝ってゆくほうがいいと、あこは根から根へと渡っていたが、

「わっ……」

濡れた木の根に足をすべらせた。すかさず後ろにいた小一郎が抱きとめる。

「大丈夫か？」

「え、ええ。ありがとう」

小一郎は片腕でいともたやすくあこの身を抱えると、土の上に立たせた。

「やっぱり一人歩きはやめておけ。城内とはいえ危険だ」

「大丈夫よ。このくらい慣れてるし」

「現にいまもこけそうだっただろうが。ひとりで出歩いて、もし足でもひねって動けなくなっ

たらどうする」

（せっかく小言をもらわずに済んでたのに……）

足をすべらせたばかりにとんだ藪蛇をつついてしまった。濡れた根っこが憎い。

「山といっても城内だし……」

辺りに人の気配はないが一日に数人くらいは行き来するだろうし、大声を出せば愛宕屋敷に届きそうな距離だ。

「駄目だ。江戸の町中とはわけがちがうんだからな。山を甘く見るな」

ろくに山に入ったこともないくせに。その一言になにか引っかかった。

「山登りなら、したことあるわよね？」

え？　と小一郎がこちらを見やる。

「昔、母上と山にワラビ採りに行った気がするんだけど――ってどうしたの？」

小一郎は顔を凝視したまま固まっていた。大丈夫？　と目の前でひらひらと手を振ってみると、「あ……ああ、すまない」と小一郎は我に返る。

「わたし、なにか変なこと言った？」

「いや……それは多分、奥方様じゃなくて、先代様との筍狩りだ」

「えっ？　タケノコ？」

「ああ。だってその時分なら、奥方様は京住まいのはずだろう？」

（え……あら？）

あこは江戸で育ったが、羽柴家縁の母は生家が徳川に臣従するまでの間、京にいた。江戸と京、離れて生活していたのに一緒に蕨採りをしているはずがない。

「……そういえばそうね」

「殿もいらっしゃって家族総出だったから、奥方様もその場にいたと思いこんだんだろ。それか結構山奥まで入ったから、キツネあたりに化かされたのかもな」

するとそのとき、小一郎の言に呼ばれて出てきたかのように茂みがざざっと揺れた。あこがびくっとして見やると、猿の群れが木々を渡っている。

猿には数日前に襲われたばかりだ。あこが小一郎の袖をつかむと、小一郎はあこの一歩前に出た。そして警戒していると、猿はなにもせずに去っていった。

さすが山国だな、と小一郎は息をつく。

「山は低くても何がいるかわからないからな。次は化かされないように用心しろよ？」

冗談まじりに言われてあこはむくれる。

小一郎はなだめるようにあこの頭に手を置くと、「ほら行けよ」と先行させた。

娘が足を滑らせ立ち止まり、後を追っていた左近は手近な木の幹に身を隠した。

蕨採り、筍狩りという言葉が漏れ聞こえる。時迷い人ふたり、結界のある愛宕屋敷に一目散

かと思いきや呑気なことだ。

（――しかし、好機か？）

井伊家の者が近くにいない。今ならば、霊力を使わずして攫うことができる。

共にいる男は腕が立ちそうだが、こちらのほうが体格で勝っている。それにあの年では五年前の戦には出ていまい。初陣もまだの若造相手に不覚を取るわけにはいかない。

娘の〈力〉のことは気になるが、相対した兵庫は無傷だった。封印されるほどのものではないだろう。

左近は腰に佩いた刀の感触を確かめる。金気の音は山によく響く。刀を抜くのは距離を詰めてからだ。

左近は息を殺し、枯れ葉の音を立てないよう歩を進める。葉ずれの音をさせぬよう周囲に気を払うことも忘れない。

伏兵は久々だ。消し去った気配とは裏腹に、体内では若い血が滾る。

息を殺し、一番近い木の陰まで移動する。

飛びかかれば三歩、男は抜刀する前に仕留める。娘は声を立てる前に意識を奪えばいい。

相手の呼吸を読んで、その機を探る。

ひとつ……ふたつ……

左近の息を乱したのはざざっと鳴る葉ずれの音、そして降ってきた謎の塊だった。

（なにっ!?）

それは上を見た左近の視界を一瞬で覆い、そしてすぐさま額を蹴って離れた。

キキッという鳴き声。見やると大きな毛の塊が木々を渡ってゆく。

（――猿か!?）

枝をつかみそこねた猿が、自分の頭を足場にしていったらしい。

猿は以前から山にいるが、踏みつけられたのは初めてだ。蹴られた額はじくじくと痛み、手のひらで押さえると血がついていた。――妙に屈辱的な気分だ。

（はっ……娘は!?）

左近が我にかえって山道を見やると、娘の姿はすでにない。

（せっかくの好機を……あの猿め!!）

しかし失った機を悔いても仕方がない。左近は再びふたりを追いはじめた。

あこが根を渡るたび、後ろでひとつに結わった髪がひょこひょこと揺れる。

その足取りは軽やかだが、またいつ足場を踏み外すかと思うと小一郎は気が気でない。

（屋敷で預かるとか言っときながら、なにひとりで出歩かせてるんだ……）

ちらちらと視界に入るだけでも鹿や鴉がいる。時には人を襲う動物だ。嫁入り前の身に傷でもつけばどうする気か。

それに山は霊地、神の住まう場所だ。神隠しにもあいかねない。

実際、自分たちは時渡りにあっている身だし、彼女は一度神隠しにあったことがある。

十年ばかり前、あこは伊勢の山中で忽然と姿を消した。数日後に帰ってきたが、それを機に彼女は京での記憶をなくしてしまった。

辛い過去は思い出さないほうがいいと、彼女は江戸で生まれ育ったことにされた。彼女が母と蕨採りをした記憶はまちがいではない。だが失われたはずの記憶だ。

「そういえばたしかに、矢作でタケノコ狩りに行ったわね」

あこは足を止めると、辺りを見回した。ところどころに竹が群生している。

「そろそろ芽が出る時季かしら。小一郎、今度一緒に掘りに来ない？」

「また屋敷を抜け出す気かおまえ……」

「だって矢作もそうだったけど、ご禁制の山って民が立ち入れないから手つかずのまま竹に育っちゃって、誰かが採らないともったいないでしょ？」

「……まぁ、そうだな」

目を逸らし気味に答える小一郎に気づかず、あこは「あっ、もしかしたら普請の人たちの握り飯をタケノコご飯にできるかも！」とはしゃいでいた。

（矢作もそうだったけど、か……）

鳥居家の旧領である矢作に行った記憶はあるらしい。が、なぜか都合よく改竄されている気

がする。

（たしかあのときって……）

前夜の膳に出た筍をあこが好み、明日掘りに行くかという話になった。しかし禁制の山に行ってみると筍はなかった。

イノシシに先を越されたのだろう――先代はそう言ってなだめたものの、彼女は泣きやまず――そして嵐は来た。

泣き疲れたのか旅の疲れが出たのか、その晩彼女は熱を出し、外は季節外れの台風のような嵐に見舞われた。

嵐は三日三晩つづき、彼女の熱が下がった日、何事もなかったかのように晴れていた。そしてあらためて筍狩りに行ったところ、嵐の間に育った筍が大豊作だったという次第だ。

（まぁ、楽しかった思い出だけ覚えているのはいいことだけどな）

禁制の佐和山に民は立ち入らないが猪はいる。こいつまた猪と張り合う気か、などと考えていると、「どうしたの小一郎？」とあこが顔を覗きこんできた。

「小一郎、最近考えごとが多いわよね」

「まぁ、任務もあるからな」

「そうじゃなくて。考えてること話してくれないわよね……あのことだって」

あこが言いづらそうにうつむく。

「あのこと？」

音になるかどうかという小声であこは言った。——天災、と。

「わたしのせいで起きやすいことを、みんな知ってるって言ってたじゃない？　でも、わたしは全然知らなかったの」

その言に、小一郎は目を瞠った。

（気づいて、なかったのか？）

彼女が癇癪を起こすと嵐が来る、彼女が熱を出すと大雨が降る、しかし元気になると晴れて彼女が屋敷からいなくなる——それが江戸屋敷の常識だった。

矢作の一件だってそうだ。天候が悪いと姫さまがぐずってるんじゃないかと噂され、その確率が冗談の域を超えると、触らぬなんとかに祟りなしという扱いになっていた。

輿入れが三回も延期になったのも姫が嫌がっているせいだと言われたし、現に江戸からの道中はずっと雨つづきだった。

梅雨が近いとはいえ、半月もの間、一日欠かさず雨が降りつづくのは尋常ではない。きっと江州に着くまでに土砂崩れか氾濫が起きるにちがいないと、みな戦々恐々としていた。

姫を刺激しないほうがいい——たしかにそう言われていたが、まさか本人の耳にまったく届いていなかったとは。

「ねぇ、なにか知ってるの？」

あこにすがるように見上げられ、小一郎はなんと言ったものかと返答に窮した。

猿に邪魔されているうちに娘を見失ってしまった——左近はあわてて後を追いはじめたが、駆け出すなり、やわらかななにかに蹴つまずいた。

「うおっ!?」と声を上げて派手にすっ転ぶ。

何事かと思ってふり返ると、子鹿が茂みにうずくまって震えていた。

(なぜ避けない!?)

つまずいたのは悪いが、人に蹴られるのを避けないのは野生としてどうなのか。

しかし子鹿の黒いつぶらな瞳がうるんでいるように見えて、近づいて様子を見る。幸い怪我はないようだ。

左近が近づいても子鹿はその場から動かない。それを不審に思う一方で、親が敵をひきつけている間、子は茂みで身を隠していると聞いたことを思い出す。

(まさか……)

嫌な予感とともにふり返ると、数間先に立派な体軀の鹿がいた。——母鹿だ。

仔産みを終えたばかりの母親は獰猛だ。左近は跳躍して手近な樹の枝をつかむと、身体を揺らして枝の上に登った。突進してきた母鹿の前足蹴りを間一髪でかわす。

母鹿はなおも樹の幹に頭を押し当てると、ぐいぐいと押した。枝葉がわさわさと揺れる。し

かし鹿ごときで折れる樹ではない。やがてあきらめると、子鹿とともに去っていった。それを見送りながら、左近は鹿が樹に登れない動物であったことに感謝した。

（危なかった……）

そう息をついたのも一瞬のこと。

ばさっという羽音にふり返ると、鴉がこちらに向かっていた。

（なに……？）

左近は身をよじって一撃を避ける。

しかし襲われる理由がわからない。鹿も鴉も神の使いだというから、子鹿を蹴った報いだろうか。その理由はすぐに明らかになった。

一撃を外した鴉は、大きくはばたいて急上昇する。見上げると、左近の視界に入ったのは鴉の巣だった。鹿に樹を揺すられたのを敵襲と思ったらしい。

（濡れ衣だ――――！）

しかし鴉相手に通じるはずもなく、ふたたび舞いあがった鴉は、一直線にこちらに向かってきた。

左近は枝から飛び降りる。なおも聞こえる羽の音。左近は這うようにして駆け出す。

と、不意に天地がひっくり返った。

――落とし穴にはまった、と気づいたのは数回瞬きしてからだ。頭上にあったはずの空が真

正面にある。鴉は何度か大空を巡回すると、巣へともどっていった。

（なにはともあれ助かった……か）

穴はそれほど深くない。意図的に張った罠ではなく、戦時中に武器庫として使っていた穴が放置されていたのだろう。

底には水が溜まり、泥土になっている。左近は身を起こそうとしたが、思うように身体が起き上がらなかった。ゆるゆると身体が泥土に沈んでゆく。

肉体を鍛えすぎると海にも沈む――身の危険を感じた左近は、手足をばたつかせて泥土から脱出した。

おかげで身体中が泥だらけだ。小袖も袴もしこたま泥を吸って重い。

（なんのこれしき）

雨の日の戦もあれば、川越えの戦もあった。そのときの鎧の重さに比べればなんということはない――はずなのだが、身体は重く、思うように動かなかった。

（憑依が浅いせいか？）

深く憑依すると霊力が制限される。水神に悟られない程度に霊力を持っておきたかったのだが、その不自然な状態が獣の勘を刺激したのかもしれない。

左近はさらに憑依体との同調を高め、ふたりを追って小道をたどる。が、またもや足を止められた。

左近の道行きの正面で、獣が土を掘っていた。猪だ。どうやら筍を掘っていたらしい。
猪は左近に気づくと、ゆっくりとこちらにその身を向けた。
（こやつもか）
「……石田治部少が家臣、嶋左近清興と知っての狼藉か」
猿に鹿に猪――それらにつづいて四度めともなればもう驚かない。
「もはや猪といえども容赦はせん！　いざ参る！」
左近は刀に手をかけ、腰を落として抜刀の機を窺う。
猪が突進し、左近はすかさず抜刀する――はずだった。
しかし刀を抜きはらう前に、背中を激痛が走った。稲妻のような痛みに動きが止まったところを猪に激突された。
「ぐは……っ！」
猪はそのまま駆けてゆき、左近はたまらず膝をつく。
（痛……）
猪の腹への衝撃はわかるが、背中を走る痛みはまるでぎっくり腰だ。
（まさか――）
二十代半ば、働き盛りだろうとこの男を選んだ。たしかによく鍛えてある。惚れ惚れするほど肉づきはいい。だがこの肉づきは実戦向きというよりむしろ――

（見せるための肉体か――!!）

憑依体の趣味、筋肉作り。

そう判明したものの、山中で憑依を解くわけにはいかない。左近は背中と腹の痛みを抱え、途中ぬかるんだ足場によろめきながら、ふたりの後を追った。

ふたりはまた山道で立ち話をしていた。

（今度こそ！）

標的まで十歩ばかり。左近は木の幹にもたれかかるようにして身を隠す。

しかし背中になにかが当たった。ふり返るとそれは、木の幹と同色の綱だった。

（しまった！）

忍びの鳴子だ。音はしなかったが、遠くの屋敷で侵入を察知されているにちがいない。もはや猶予はなかった。

（なんとしてもあの娘だけは……！）

左近は憑依したまま指先に霊力を集中させる。両手の指先から光がにじみ出る。肉体を介しているために光は弱い。だがなんとかそれを集めると、大筒の弾ほどの大きさにまとめあげた。

一時的に意識を奪うだけでいい。霊力の弾を娘めがけて発する。

光は娘のいた場所を翔け、娘の髪をかすめて飛んでいった。
娘がよろめく。突如生じた地揺れに足を取られたのだ。
「きゃっ……！」

ずん、と突き上げるような揺れに、根の上に立っていたあこがよろめいた。
小一郎はとっさに抱き寄せて、揺れが収まるのを待つ。木々が大きく揺れて葉ずれの音をたてたが、さほど酷い揺れにはならずに収まった。
支えた身を起こしてやると、あこはありがとうと言って辺りを見回した。
「まさかこの地揺れもわたしが……？」
「そんなことはないだろ」
そう答えたものの、心の底から信じていたわけではない。
（まさか俺が答えなかったからか？）
――ねぇ、なにか知ってるの？
その問いに答えなかったから、焦れた彼女の心が地を揺らした、と考えられなくはないか。
しかし「そうよね。ただの偶然よね」とあこは笑みをこぼした。
「だってわたし、今までそんなにいうほど天災にあったことないし」
（――は？）

「だって外出するときはいつもいいお天気だったもの。天災娘っていうのも小一郎の思いちがいじゃない？」

小一郎は言葉をなくした。

思えば、大雨や嵐は彼女が不調のときに生じた。そのとき彼女は屋敷にいて、元気に外出するときには天気は回復していた。なのでたしかに彼女自身はあまり天災にあっていない。

（だから気づいてなかったのか？）

だが彼女が神隠しにあったのは事実だ。記憶を失ったことも、それ以来彼女の周りで不思議なことが起きることも。

一昨日だって、神社で光に包まれて姿を消した。あのとき水が光を放ったのをこの目で見た。今もまた、懐に入れた神水が熱を帯びているように感じる。

あこの言を肯定したほうがいい。それで今までのように、何事もなかったことになって時は過ぎてゆく。しかし。

――こうして嘘をついて彼女の心を守って、現実から目を逸らさせつづけることが、本当に彼女のためなのか？

「――おい、待てよ」

先に行こうとした彼女の肩をつかみ、足を止めさせる。

なに？　と彼女はふり返り――目が、合った。

黒目がちな無垢な瞳。
そこに映る自分の姿。瞳に魂が搦め捕られるように吸い寄せられる。
あたり前のように自分の名を呼ぶ唇。
やわらかなそれに小一郎は指を伸ばし、あこの頬に触れかけて——
「……小一郎？」
不意に呼ばれて、小一郎は我に返った。
（俺はなにを……！）
伸ばしかけた手のやり場をなくし、小一郎はあこの髪をくしゃくしゃっと掻きまわした。
「なにすんの小一郎!?」
「馬鹿なこと言ってないで行くぞ」
「わかったわよもう！」
やわらかな頬をふくらませて、彼女はまた山道を進みはじめる。そしてひょこひょこと背中に踊る髪を見ながら、小一郎は大きなため息をついた。
——彼女はまるで台風の目だ。
周囲の天候も心もみな掻き乱しながら、自分ひとり安全な場所にいる。
彼女が幸せならそれでいい——たしかにそう思う。だがその一方で、掻き乱されているほうのこともすこしは察しろよ、と小一郎はなんとも複雑な気分だった。

左近は去りゆく背中を呆然と見つめた。

（なんなのだ、あの娘……）

猿にはじまったこの一連の出来事は、偶然にしては重なりすぎている。獣だけなら井伊家の使役獣とも考えられる。だが最後の地揺れはもはや神の領域だ。

（まさか本当に神が憑いているのか？）

ならばなおさら娘を手に入れるべきだ。しかし深追いしては、次になにが起きるか想像もつかない。さてどうする。

左近が逡巡していると背後から「左近殿」と声がかかった。

ふり返ると、被衣をなびかせた吉継がいた。

「刑部様、そのお姿は……」

吉継は霊体のまま、これでは水神に見つけてくれといわんばかりだ。しかし吉継はあわてる様子もなく「彼らがいるから大丈夫」と見回した。

色の薄い細髪の周囲で、主を守るように焔が漂っている。神の目を欺く力でもあるのだろうか。白い衣にまとわりつく人魂――まさに幽霊そのものだ。

「左近殿のほうがすごい恰好になっていますが、どうされました？」

全身泥まみれだ。これには訳が、と言いかけた左近だが、口にするとさらになにかを呼びそ

うな気がして、やめた。古人いわく、触らぬ神に祟りなし、だ。

「某は探しものを取りに」

「これでしょう」

五助、と吉継が側近の名を呼ぶと、蒼白い焔のひとつがふわふわと飛んできた。

焔の上に載っていたのは、見覚えのある藍地の錦――〈笹葉丸〉だ。

「どのように……いえ、なにゆえに？」

なぜ主が笛を所望したと知っているのか。一度主の許に戻ったのだろうか。

すると吉継は「あやつとは長いつき合いですから」と笑みを浮かべた。

吉継は、左近が臣下に連なる前からの主の旧友だ。しかし吉継は立場に驕らず、大名でありながら陪臣にすぎない自分に礼を尽くして敬語を使う。それが主の目の届かない場所に限定されるのは、主から「当家の者に気を遣うな」とでも釘を刺されているのだろう。思いどおりにならないと苛立つ主の性格をよく見ている。

「井伊家の件は私に任せていただけますか。左近殿はあやつを見ていてください。素直に白状しませんが相当な深手です」

左近ははじかれたように吉継を見た。

「が、おとなしくしている性分でもないので、待ち飽きたら何をするやら」

吉継は仕方ないとばかりに息をつく。

左近は愕然とした。久々の再会に浮ついて、主の不調を見逃していたなど。
（なんというていたらくか……！）
左近はすぐさま膝をつき「某はこれにて」と一礼する。そして吉継の焔の力を借りてその場で泥まみれの筋肉、もとい憑依体を脱ぎ捨て、関ヶ原へと跳んだ。
しかしたどりついた先に主の姿はなく、残されていたのは「殿ならば清洲に偵察に」という伝言だった。
「すぐに戻ると仰せでしたが……」
「行かせる奴があるかッ!!」
左近は兵庫に怒号を落とし、後を追う。
左近を掻きたてるのは三年前に襲った自責の念だ。
――いますこし早く気づいていれば。
三年前、霊として目覚めた主にいち早く気づき、側についていれば、直政急襲などさせなかったものを。
今だってそうだ。すこし目を離しただけで、なぜあの人は。
（どうかご無事で……！）
左近は笹葉丸を握りしめながら、徳川の直領、清洲へと跳んだ。

愛宕屋敷の門をくぐると庭先に直継と采女がいた。立ち話をする身分でもないので、出かける直前だったのだろう。

羽織姿の直継がふり返る。涼やかな視線を向けられるとあこの鼓動が跳ねた。しかも昨日会いにきてくれたことが思い出されて、顔が火照る。

対する直継はいつもどおり無表情だったが、目つきがいつもより鋭い気がする。采女の表情も硬いように感じた。

「ご無事でしたか」と采女が表情をやわらげ、あこは事情を察した。

(わたしを探しに行こうとしてたの?)

屋敷内に姿が見えないのを心配したのかもしれない。

「あの、ごめんなさい。ちょっと神社までお散歩に行っていたの」

だが直継は視線を小一郎に向けたまま返答もなく、小一郎も口をひき結んだままだ。

(やっぱり気のせいじゃないわよね?)

昨日もふたりが険悪な様子だと思ったが、今も言葉を交わす前から空気が凍りついている。

「高須殿がご一緒で安心しました」

直継に代わって答えた采女に、小一郎は懐に入れていた神水を渡す。ふたりの間では二言三言交わされただけだったが、話は通じているようだ。

(おなじ邸に住んでいるんだものね)

このふたりは仲がよさそうだとほっとする。問題なのは――
どう間を取り持ったものかとあこが思案していると、小一郎は硬い表情のまま直継に向きなおり、片膝をついた。
「ご当主に申し上げたき儀が」
（小一郎……なにを言う気？）
緊迫した空気の漂う中、直継もまた「なんだ」と硬い声音を返す。
「当家の姫のことにございます。姫はなにぶん都育ち、山城のことなどはよく存じませぬゆえ、ご配慮いただきたく」
（なんでそういうこと言うのー!?）
言い換えれば、片田舎の山城暮らしなど知らぬ、預かる以上はしっかり面倒を見ろ、そういうことだ。
膝をついていても直継を見上げる小一郎の目は鋭い。大名家の当主相手に引いていない。だが直継も気圧されることなく、いつもどおり感情を覗かせない声で「あいわかった」と返した。
よろしく御取り計らいのほどを。そう告げて小一郎は愛宕屋敷を後にする。
その場に残されたのは冷え切った険悪な空気。
（あああ、どうすれば……!?）
頭の中がぐるぐる廻るなか、直継がちらと視線を向け、あこは先ほどとはちがう意味で鼓動

が跳ねた。身を硬くして次の行動を待ち構える。
直継は前まで歩いて来ると、なんの前触れもなくあこの髪を撫でた。
その行動にあこは一瞬固まり——わずかな時差をもって飛びすさった。
「な……な、いったいなに!?」
「いや、なにか憑いている気がしてな」
ただ憑きものを祓っただけらしい。
(ああ、そういうこと……そうよね)
たしかに勝手に抜け出した自分が悪い。だが、無事でよかったとか、心配したとか言ってくれたらどれほど嬉しかったか。
直継が意味もなく触れることはないとわかっていたが、すこし悲しかった。
「朝から山で不穏な気配がしていたが、道中、なにかに襲われなかったか?」
「え、別になにもなかったけど?」
直継は憑いていると言ったが、憑かれた覚えも襲われた覚えもない。
(やっぱり天災体質のせい!?)
小一郎の言葉が脳裏をよぎったが、ふと思い出すことがあった。
「そういえば猿の群れに出くわしたわ」
「猿? 襲ってきたのか?」

「ううん。小一郎が守ってくれたから」
その一言のなにが直継を刺激したのだろう。「……他には」と問う直継の機嫌があきらかによろしくない。
（あ……小一郎のせい？）
「足場が悪かったけど、小一郎が抱きかかえてくれたからこけずに済んだし！」
小一郎の言上はあくまで自分を心配してのこと、小一郎がいてくれたからこそ助かった——言外にそう主張してみたが、直継の冷たい目線は改善するどころか、零下の様相を呈していた。
（なんでさらに不機嫌になるのー!?）
小一郎の発言が原因ではないのかとあこが頭を悩ませていると、爆弾が落ちた。
「そなたはずっと私の側にいろ」
（はい——!?）
いまのは自分の聞きちがいか。
とっさに采女を見やるが、采女も驚いた表情を隠せずにいるから空耳ではない。
しかし言った当人ばかりが平然と、否、苛立ちまじりに言葉を継いだ。
「私がいないときは采女でもいい。そなたはなにに襲われるかわからんからな」
（……ああ、そういうこと……）
ただ単に小一郎に言われたことへの対応策だ。そんなことだろうとは思ったが、高揚と落胆

の振れ幅が大きすぎた。

ずっと私の側にいろ——言われて嬉しい言葉のはずなのに、なにかが違う。

だが、耳の奥でこだまするたびに頬が熱くなる。

(……その言葉に深い意味はないの！　あるわけないから絶対!!)

返事はどうした。直継がそう告げたことにも気づかないほど心も鼓動も乱れ、しばらく鎮まりそうになかった。

「べつに危ないことなどしていない」

関ヶ原の山中に連れ戻されるなり、主は摑まれた腕をふり払った。

「呪がかかりやすいように秀忠を脅してきただけだ。知らぬ城でもあるまいし、心配しすぎだ」

「清洲はいまや徳川の居城、しかも井伊家の娘が嫁いでおります。いかなる罠が張り巡らされているかわかりませぬ」

左近は清洲中を探しまわり、秀忠の寝所に現れた主を拉致してもどってきた。

城内にはいくつも罠があったし、数人ながら術者も同行していた。下手を打てばまた封じら

れかねないところだった。
　また手遅れなのでは――悪い想像ばかりが脳裏を廻り、こちらは気が気でなかったというのに、主はただ散歩に行っただけといった風情だ。
「笛は首尾よく取りもどせたのか？」
　ええ、と左近が苦い表情で答えると、「じゃあ聞かせろ」とあたり前のように命じる。
　あくまでも手負いの件は隠しとおすつもりらしい。
　たしかに三年前につづいて先走ってあの娘を奪い、井伊家当主にしてやられたとは口にしにくかろう。だがそんなことを言っている場合ではなかろうに。
（相変わらず手のかかるお人だ……）
　左近はため息をつきたいのを我慢して、言葉を紡ぐ。
「笛の前に、手当てが先です」
　気づかれていないとでも思っていたのか主はぎょっとする。
　そんな主の目の前で、左近は中空に手をかざして包帯を取り出した。
「なんだそれは！」
「某が非常用に分けておいた霊力です。これを巻いて、しばしご養生を」
「……そのようなことを言って、そなたらはまた私を置いてゆくのだろう」
　その呟きに、左近は息を飲んだ。

三成が言っているのは、数日前のことではなかった——五年前の関ヶ原の戦だ。
吉継も左近も露と消え、ひとり現世に残された主。そのときなにを想ったことだろう。
数少ない理解者を戦で失い、後詰めの毛利にも裏切られ、豊臣にも見捨てられ。
それでも起こした戦を悔いることはなかっただろうが、望む未来は断たれたと知ったときの絶望はいかばかりのものか。
清洲より佐和山のほうがよほど危険ではないか、などと三成はぶちぶちとつづけている。
（この方はまったく……）
——ならば笛でごまかさずに初めから、ずっと私の側にいろと言えばいいものを。
たったそれだけの言葉が口にできないほど、あいかわらず不器用で、意地っ張りで。
だからこそ自分たちはこの人を放っておけないのだろう。
「……ここにおりますよ。どなた様かが笛をご所望ですので」
その言葉に三成は息を飲む。
次いでふいと目を逸らすと、包帯をよこせとばかりにぞんざいに手を出した。

間章　光のどけき・四

あこはあの一件をあらためて顧みて、自分が思い違いをしていたことに気がついた。
直継が不機嫌だった理由。それは無断で出歩いたことが原因かと思っていたが、直継が苛立っていたのは自分が小一郎と一緒にいたことなのでは――
「それってやっぱりわたしのせい……よね……」
まったく気付いてなかった自分に、はは、と乾いた笑いがこぼれる。
そんな自分にかやは冷ややかな視線を向けた。
「なにを今さら言ってるんですか。小一郎兄さまが姫さまを好きってみーんな知ってましたよ」
「ええ!?」
「ええ!?　じゃないですよ！　どれだけ鈍いんですか！」
自分が鈍いことに反論の余地はない。だが小一郎に関してはれっきとした理由がある。
「だって小一郎はしのが好きだったんじゃなかったの!?」
「はぁ!?　どうして姉さまなんですか!?」
「だって事あるごとにしのを誉めてたし、話している機会も多かったし！」
「……具体的には」

「しの殿を見習ってしとやかにしろとか、しの殿はおまえにそう教えたかとか、しの殿の苦労も考えろとか、しのばっかり引き合いに出すし、道中だって、わたしが駕籠にいる間も旅籠についてからもしのとばっかり話してたから、てっきりしのを連れて帰りたいのだとばかり」

向けられた半眼にたじろぎながらそう反論すると、かやは深いため息をついた。

「……姫さまには殿さまがお似合いです……」

「なによその言い方……」

刺があるというより、刺をさすのも馬鹿らしいといった雰囲気だ。

「姉さまがご立派なのは当然ですけど、小一郎兄さまが話してたのは、全っ部！　姫さまのことですよ!?　一番お側にいる姉さまに姫さまのお加減を訊いてたんじゃないですか！　お疲れじゃないかとか、江州行きが気に入らないから雨がやまないんじゃないかとか、なにか気晴らしをさせてあげたいとか、全部全部姫さまのことでしたのに！　兄さまがかわいそうです!!」

（……そうだったの？）

「あの殿さまでさえ気付いてましたよ！」

「ええ!?　だって右近殿と小一郎なんて、数えるほどしか言葉を交わしたことないのに」

「見ればわかるんですよ普通は！」

（たしかに右近殿と小一郎って最初から険悪な雰囲気だったような……でもあの頃の右近殿って、わたしに興味なかったわよね？　あ、でも、頬を叩かれて云々っておっしゃってたから、

三月にはちょっとは意識されていたのかしら？　でもそんな素振りなかったし、小一郎だって単なる幼なじみって……でも小一郎の名を聞きたくないとかおっしゃってたような……）

頭の中でぐるぐる思いをめぐらせるあこに、かやは冷めた口ぶりで言った。

「……かわいそうだから兄さま人形を作ってあげます」

「やめてー！　右近殿人形と喧嘩するから!!」

濃緑色の布地に手を伸ばしかけたかやの手を、あこはあわてて摑んで止める。

「よくわかってんじゃないですか」

「そりゃあ、ね……」

あのようなものを見せつけられたら、嫌でもわかる——わからざるをえない。

最後に小一郎と目が合ったとき——伝えたい言葉はあったのに、どう言えば、どう伝えればいいのかわからなかった。

ずっと支えてくれていた小一郎には感謝している。でも、ありがとうでもごめんなさいでもさよならでもなく、小一郎が一番望んでいたことは——

「姫さま？　どうされました？」

呼びかけられて、我に返る。

かやは冬に江戸の中屋敷であった一件を知らないし、吹聴するようなことでもない。

「なんでもないわ」とあこは話を流した。

「殿さまと喧嘩といえば、今日、江戸から掃部さまがいらっしゃるんですよ」
「え!?」
たしかに今朝、江戸から使者が来るから酒宴があるという話は聞いている。
けれども掃部さま——弟の直孝が来るとは言っていなかった。忘れていたのだろうか。
(それともまたお耳に入っていないとか……?)
「大丈夫ですかねぇ。ご兄弟仲はよくないそうですけど……」
「あっ、あのね、それは誤解なの」
秀忠公の一件から、自分は愛宕屋敷の侍女と話す間もなく元の世界に戻ってしまった。
それからまた御家騒動やらなにやらと立て続けにあって、誤解を解いている間がなかった。
「おふたりはあまり話す機会がないだけで、べつに仲がお悪いわけではないのよ。掃部殿も右近殿とお話ししたいことがあるけれど、いつもすれ違っていたみたい」
「そうなんですか?」
「うん、だからお屋敷の侍女と話す機会があったらそう伝えてあげて」
三月に江州を発って以来、直孝は新将軍となった秀忠に付きっきりだった。今回の使者役でやっと話す機会が持てたのだ。
(がんばってね、掃部殿!)
あこは拳を握りしめて表座敷に念を送る。まるで我が子の成長を見守る母の気分だった。


空蟬の君
うつせみ

序章　慶長十年五月

敦賀にて

越前、敦賀。
三成が崖から眼下を見やると、そこには船を飲み込まんばかりの青が広がっていた。
（……不吉な色だな）
多くの人に美しいと評されるだろう海の色。だが琵琶湖は嵐を前にこのような色を帯びる。嵐は堤を壊し、田畑を荒らす。
生きるための糧を失うかもしれない——その不安の空気が民の心を苛む。
ささくれ立った感情は日常の和を乱す。乱れた心は冷静さを押し流し、流血を生む。
三成にとって深い色みは争いの象徴だ。しかし。
「今日はいい日和だな。良い風だ」
なつかしげな声音に傍らを見やると、男——大谷吉継は海風に領巾を遊ばせて、眩しそうに敦賀の海を眺めていた。海ではこのような色があたり前らしい。
「三河殿はよく治めておられるようだ」
吉継は、旧領のにぎわいを我がことのように目を細めていた。
かつて自分が治めた地の荒れ果てた姿など見たくない。その想いは三成にもよくわかる。

吉継の領地であった敦賀、今の領主は三河殿こと結城秀康だ。
吉継は所領を徳川家に召し上げられた形だが、この港の活気を見ていると戦の爪跡は感じられない。豊臣家に好意的な秀康が、吉継の後をよく治めていてくれるのだろう。
敦賀は海の色も、風の香りも――そして空の高さもちがう。
水神の結界から抜けたせいか、空も世界も広く感じる。
「ああ、漁船が帰ってきたな。ちょうどいい。食っていくか」
「は!?」
「鯖が有名だが、今の時季ならアジだな。うまいぞ」
吉継はあいもかわらず人の話を聞く様子もなく、足を返して港に向かいはじめる。
「おい！　刑――紀之介ッ！」
さすがに実体化している今、前領主の名を呼ぶのは憚られて、三成はとっさに幼名で呼びかける。
それは吉継もまったくの予想外だったのか、はっとふり返った。そして三成の顔を凝視していたが、やがて相好を崩した。
「それは良い手だな。――本場のアジを食わせてやろう佐吉」
返された刃に三成はむせかえる。
数十年ぶりに呼ばれる名は、思ったよりも衝撃が大きい。

「だっ、だが、そなたの旧領で盗みを働くわけにはいくまい。私は金子など――」
「持っていないのか？」
向けられる吉継の目は、どこのお大尽だ？　と言いたげだ。
「らしくないな。金勘定は得意だろうに」
「たしかに金勘定はしていたが、持ち歩く必要などないだろう」
大名が気安く街を出歩くことはないし、仮に出ても小姓がついている。自ら金子を持ち歩くことはない。しかも霊体の身の上でなぜ金子が必要だというのか。
むっとして言いかえすと、「しかたないな」と吉継は懐に手を入れた。
取り出したのはふくらんだ巾着。どうやら銭が入っているようだ。
「なぜ持っている。私が呼ぶまでずっと寝ていたのではなかったのか？　三途の渡し賃か？」
「六文銭は婿殿だけで十分だ。京で少々薬売りをな。左近殿の腕がいいからよく捌けた」
ずいぶん慣れていらっしゃるご様子で、と言を継ぐ左近を三成は睨みつける。
（人を放っておきながら、京で一体なにをやっていたのだ……）
そんな想いは露知らず、吉継は港の飯炊き女の許へと向かう。
戻って持ってきたのは、大きな茶碗だった。
飯を盛った上にアジの切り身が載っかっている。味つけは生姜に醤油だ。
「湖国暮らしでは刺身は珍しかろう」

それくらい大坂で食ったことがある——と言いたいところだが、ほとんど食したことはない。内陸の江州育ちで、そもそも海と縁がなかったせいもある。

松原の木蔭に腰をおろしてかぶりつくと、脂がのって、口腔にほんのり甘みが広がった。

「……海のものも悪くないな」

「海の恵みと交易の財は馬鹿にできんぞ。港は押さえておきたい。財政的な意味でも、秀頼公にはなんとしても大坂に踏みとどまっていただかねばな」

「しかし、戦となればやはり陸だ。街道の要は放置できまい」

武器や食糧などの物資の補給をする兵站は、吉継の最も得意とするところ、街道の重要性はわかっているはずだ。

対する徳川家康も、中山道の要である佐和山を井伊家に、東海道の要である桑名を本多家にと、武力で一、二を争う家にそれぞれ預けて備えている。

「佐和山か……まぁ、狙いどころがないわけでもないがな」

「なに？」

「あの家は要が一箇所に集まり過ぎている。そこを押さえれば身動きが取れぬ。つまり——」

吉継は腰元に挿していた扇を開き、要を外すと、骨組みがばらばらと開いた。

もはやそれをつないでいるのは白紙一枚だ。

吉継の言わんとするところはわかる。だが。

「先代には及ばないにしろ、やはり当主が要だろう」
水神の嫡流である当主井伊直継は〈力〉は先代に及ばないものの、それを補うように遠江と近江の水神二神の加護を得ている。当主を狙うのは危険が大きすぎる。
「いや、それがそうでもないようだ。裏に差配している者がいる」
「なに？　……そのような者いたか？」
吉継とは逆の傍らにいた左近を振りかえって問うが、左近も思い当たる節はないようだ。
「あの者は長く佐和山を離れていたからな……しかも当人は前線に出てこないただ人だ」
「ただ人？」
「そなたが乗っ取ったという腹心、あれの兄弟らしい。よく似ている。ただ人と思って見逃していたが、水神の末裔だけある。手段を知っているというだけでも強みになるものだな」
「だが、その者は知恵を付けているだけだろう」
やはり実際に前線に出てくるのは直継と采女だ。知恵を回すのは別の軍師でもできる。
「押さえたところで――」
なにも変わるまい、と言いかけたところで三成の言葉が止まった。
「……その者を操る、か？」
知恵者を押さえて自由にできれば、井伊家は駒同然だ。
「しかし、その者もそうそう山から出まい。佐和山に近づくのは危なそうだが」

「近づく必要はない。あの者の生家――鈴木家に乱を起こす」
「なに……？」
井伊家には、縁戚である井伊谷衆と、旧武田軍を中心とする徳川新参者がいて、両者の間には溝がある。その舵取りをしているのが、井伊谷方の鈴木家と、徳川新参方の木俣家だ。
柱の一本が揺らげば、当然屋台も揺らぐ。
「鈴木家を押さえれば、筆頭家老、そしてあの腹心兄弟の動きを封じられる。……さて当主はどう動くものかな」
布石はすでに打ってあるものか、あとは炎上を待つだけとばかりに、吉継は目を細めて南の山々を――江州を見やる。
その横顔には、鯖だアジだと戯けていた空気は一切ない。
吉継は本気だ。彼は静かに笑むときが一番怖い。
伏見で三成ともども消滅されかかった一件、それが彼のなにかに火をつけてしまったらしい。
「――譜代の要、井伊家を、潰す」
その一言に三成は戦慄を覚えた。
吹っ切れた吉継は、冷静さが増して容赦ない。
これからじわじわと追い詰めてゆく様を想像するとうすら寒さを感じたが、その一方、友人のかつての采配を見られるのかと、心のどこかでまた高揚感を覚えていた。

第一章　慶長十年十月

追憶の日々

「――そなたを、江戸に帰す」

あこはそれを耳にした瞬間、ざっと燭台の灯りがなびいて影が揺れたと思った。
そう見えたのはおそらく、一瞬目の前が暗くなったせいだ。
開け広げられたままの障子、闇に覆われた庭には静々と長雨が降りつづく。風はない。
直継が部屋に訪ねて来たときの面持ちから、言われる内容は察していた。
けれども今、その言葉を呑み込めずにいるのはどうしてだろう。
なにか言わなきゃ――そう思うのに、食い入るように見つめることしかできない。
六月に起きた御家騒動、それにより七月に予定していた婚礼が延期となり、江戸にいる父、鳥居忠政から帰参の催促が来ていることは知っていた。
四度目の婚礼が流れた以上、娘を江州に留めおく理由はない。
しかしそれは表向きの理由だ。――本当は、今の自分の江州での立場が父に知れたからだ。
「わたしの……せい……？」

「違う。そなたを危険な目にあわせたくないからだ」
おなじだと思った。采女の邸に移されたあのときと。
直継は自分のせいだとは言わない。危険なこの状況を引き起こしたのは自分だというのに。
――嫌。帰りたくない。
想いはそれだけしかないのに、言葉にできない。
気持ちはもう何度も伝えて伝わっているはずで、直継もおそらくおなじ気持ちでいてくれる。
それでも下された決断に、もはや告げるべき言葉が見つからなかった。
公儀の許しを得て結ばれたはずの縁談が、なにかが一目ずつずらされていった。行くべき先から遠ざかり、直継は当主として、そこまで譲歩せねばならないところまで陥っている。
そうわかっていてもそれでも自分から頷くことはできなくて、あこはうつむいた。
そして息を堪えていると、両の手が伸びてきて、手のひらで頬を包みこまれた。
「方法を、探すためだ」
「え？」
「帰すのは、縁を断ちたくないからだ」
鳥居家からの要請を断りつづければ、両家の関係にひびが入る。
その前に手を打つのは、その先もずっと共にいるための方策だと――思っていいのだろうか。
熱を帯びた頬を冷たい指が撫でて、自分が涙をこぼしていたことに気がついた。

すると気持ちがこみ上げてきて、あこは直継の胸にしがみついた。
幾度となく頼ったその胸はもうよく知るもので、直継もそのまま受け入れて撫でてくれた。
「深く考えるな。ちょっとした里帰りだと思えばいい」
嗚咽が収まってから、直継は諭すように告げた。そう言って見つめるその瞳が優しかったから、あこはうなずくしかなかった。
——はやく迎えにきて。
そんな言葉も声にならなくて、涙でうつむきかけたところをそっともたげられ、わかっているというように唇を重ねる。
激しさに流れず、ただ気持ちを伝えあうための優しい口づけ。
息が上がる前にそれは離れ、そして安心させるように髪をなでると、穏やかな眼で告げる。
「そなたは私の許嫁だ。必ず迎えに行く」
——そして今日もまた、眦を伝う涙で夢から覚める。

領国の磐城と比べると江戸は温暖だと聞く。だが十月ともなると朝は火鉢が恋しくなる。

去年の今ごろなら、起こしにきたしのに甘えながら夜着に潜りこんでいたことだろう。
だがあこは臥所を抜け出すと、侍女が起こしに来る前に着替えを終えた。
障子を開けると、冷たい外気が頬を包む。吐き出す息が白く見える。
庭に下り、井戸で水を汲んで顔を洗う。井戸水もまた手がかじかむ冷たさだったが、いまの熱った顔には都合がよかった。
熱を全部洗い落とそうとざぶざぶ顔を洗っていると、声をかけられた。
「あらあら姫さま、いま水盥をお持ちいたしましたのに」
「ごめんね。ちょっと早く目が覚めちゃったから」
ではこれを、と侍女が差し出した手拭いを、ありがとうと受け取る。
「すぐに朝餉をお持ちいたしますわね」
侍女はそれ以上追及することなく、厨に戻って行く。
目は腫れていなかったらしい。気付かれなかったことにあこは安堵の息を漏らす。
——泣き顔なんて、見られたくない。

私室に戻ると、朝餉の膳の準備をしていた侍女たちが手をついた。先ほどとは別の侍女だ。
あこが上座に着くと、侍女たちはまた黙々と準備を続ける。用意を終えると侍女は一人だけ残して辞し、「給仕はいいから」と声をかけると最後の一人も部屋を出た。

ひとり残された部屋の中、あこは膳を前にため息を落とす。
知らない屋敷、知らない部屋にひとりきり。
しかし前に並ぶ膳の紋は鳥居笹――ここはあこの実家、鳥居家の江戸中屋敷だ。
大名は江戸にいくつもの屋敷を持つ。十万石を超える大大名ともなると、上屋敷、中屋敷、下屋敷と与えられるのが普通だ。
中屋敷は実家の屋敷には変わりないが、上屋敷育ちのあこにとっては馴染みのない場所だ。侍女も知らない者ばかりで気が滅入る。
――いや、これも気遣いなのかもしれない。
知らない者に囲まれていれば、以前の自分と比べられることはない。母などに会った日には、一目で気持ちの浮き沈みを見抜かれてしまうだろうから。
(――母さまはお元気かしら)
あこが江戸に戻って丸一月になるが、まだ上屋敷への伺候は許されていない。
早く上屋敷に住まう両親に会って、誤解を解きたいのに――その機会はまだ訪れそうにない。
今は周囲を刺激しないようおとなしくして、ほとぼりが冷めるのを待つしかないようだ。
それが最良の策。とはいえ、ただ待つのは苦手だ。あこはまた大きなため息をこぼした。
「どうした？　箸を取らないのか？」
知った声にはっと顔を上げると、廊下にいたのは。

「小一郎！」
数日ぶりに会う小一郎は、濃緑の羽織袴姿だった。筆頭家老の嫡子という立場もあるのか、年相応よりも落ち着いた色みだがよく似合っている。
「どうしたの？　今日はこっちでお仕事？」
「こっちに必要な書簡があったからな。取りに来た」
入るぞと断って小一郎は部屋に腰を下ろすと、あこの顔を見てわずかに眉をひそめた。
「おまえ、ちゃんと食ってるか？」
「うん……まあまあ、かな」
食が進まないことを素直に認める。小一郎相手に隠しごとは通用しない。
「見てわかる？」
「いや、そんなことはないが……なんか、窮屈そうだなと思ってさ」
「そうね。なんか他人の家にいるみたいなの。実家なのにね」
八畳の部屋はけっして狭くはないし、掛け軸も壺も脇息もひととおり揃っている。調度も金銀の蒔絵が施され、磐城十万石の姫君の居室として恥ずかしくない見事なものだ。
だが、なにひとつ自分の趣味で置いたものではない。自分がかつて使っていたものでもない。姫君としての威厳を高めるためだけの品々に、あこの方が圧倒される。
息が詰まると部屋から出るのだが、なにも言われない。姫の歩みを遮る者はいない。だが常

にだれかがこちらを探っている。見ているくらいなら部屋に来て話でもすればいいのに――そう思うのだが、侍女たちは妙によそよそしく、誰も話しかけてこない。

鳥居家の一の姫は祟り憑き――その噂はどれほど膨れ上がっていることだろう。

見えぬ祟りに触れたくないだろうし、自分を下手に刺激しないよう当主から申しつけられているのだろう。

「ねぇ、しのとかやには会った？」

「ああ。ふたりとも、それなりに元気にしていたぞ」

「肩身の狭い思いをしてないかしら……」

「一応、あいつらは本当の生家だからな。問題はないだろ」

しのとかやは姫君付きの侍女として江州に付いてきたが、鳥居家に戻れば重臣の娘だ。屋敷で働かねばならない身分でもないし、今は自分から離されている。

「会いに行くか？　べつに出歩いてもいいんだろう？」

その申し出にはすこし心動かされたが、あこは逡巡ののち、ゆっくりと頭を振った。

「会わない方がいいと思うの。周りの目もあるだろうし」

自分の今の立場は、江戸に呼びもどされた姫だ。

呼び戻された表向きの理由は、またもや婚礼延期となったため。

三度ならずも四度めの延期、しかも今度は御家騒動が原因だ。

大名家の御家騒動は、御家断絶にもなりかねない大問題である。
やはり姫にはなにか憑いていたか、姫に触れればなにかに祟られる——そんな噂があるのかないのか、いまの自分は完全に腫れ物扱いだ。
しかし裏向き——本当の理由は、父、鳥居忠政の井伊家に対する不信感だ。
その件は完全に父の誤解で、そしてその誤解を生じさせたのはあこ自身だ。
なんとか早く父に会って誤解を解きたい。なのに上屋敷へ赴く許しは出ない。
「じゃあ時間があるなら、飯を食ったらうちに来るか？」
「え？　でも上屋敷には行かない方が……」
小一郎の家——筆頭家老高須家の屋敷があるのは、鳥居家上屋敷の一角だ。
上屋敷にはあこの両親、それに父の側室や異母弟妹たちが住んでいる。
奥を差配しているのは正室であるあこの母だが、下手に近付いては母の迷惑になりかねない。
「べつにおなじ敷地内と言っても広いしな。生け垣で遮られてるし、見つからなきゃ大丈夫だろ」
小一郎は屈託なく、すこしいたずらっぽい目で告げる。
「——あのさ」
「なぁに？」
「久々にあそこに行ってみないか？」

なつかしいその意図を察して、あこは思わず「うん！」と答えていた。

鳥居家上屋敷は中屋敷から歩いて四半時ほど、江戸城のほど近く、三の丸と目と鼻の先だ。幕府から与えられた拝領屋敷で、この一帯はみな譜代大名の上屋敷となっている。

その鳥居家上屋敷の一角、西の隅に筆頭家老高須家の屋敷はあった。

あこの住んでいた奥とは庭池と垣根を隔てただけ、子どもの頃よく行き来していた場所だ。

「うわー変わってないわねー」

高須家の屋敷の傍らにある、二層建ての蔵。そのさらに上にあがる階段を引き下ろし、小一郎は「落ちるなよ」と手燭であこの足元を照らした。

隠し階段は急勾配な上に段差が大きく、子どもの頃は這って登った。大人になれば楽に登れるようになるかと思いきや、やはり急なものは急だ。手をついて、一段一段ゆっくりと登る。

「頭上も気をつけないと――」

階下の声が終わる前に、あこの頭はがつっとなにかにぶつかった。

「大丈夫か!?」

「うん、大丈夫……」

どうやら梁に当たったらしい。木材、しかも角ではなかったのでさほどの痛みはない。

「おまえ、言ってる傍から……よかった、切れてはいないみたいだ」

小一郎は手燭を持って登ってきて、あこの額の具合を見る。怪我はないと知ると、よかったなと頭をなでた。

子どもじゃないんだからと頬をふくらますが、昔と変わらない手が心地よくもある。

手燭にぼんやりと照らし出された屋根裏は、縦横に梁が走っていた。子どものころは歩き回っても大丈夫だったのだが、今は這わないと身体をぶつけそうだ。

あこは板間の中心あたりに腰を下ろすと、屋根裏全体を見渡した。

中心は瓦を葺くために高くなっていて、その両端に明かり取りの窓がある。

低くなっている屋根裏の隅には木箱が積みあがっている。その木箱には矢じりや穂先など、武器の補修部品が入っていることをあこは知っている。

「昔はもっと広いと思ってたのに」

「まぁ、目の高さがちがうからな。――ほら、これ」

小一郎が手渡したのは、両手のひらに載るくらいの大きさの文箱だった。

表面には剝げかけた蒔絵、その菖蒲の意匠に見覚えがある。

開けてみると、そこには筆の一本も入っていない。代わりに入っていたのは、色のついた石や木の実、乾ききった蛇の抜け殻だった。粉々になっていたのは蟬の抜け殻だ。

「すごい。まだ残っていたのね」

庭の林で遊び、なにかを見つけてはここに登り、箱の中に入れていった。

いま庭で見つけてもなんとも思わないものばかり。だがこのときの自分には宝物だった。箱に入っていたどんぐりを摘みあげると、その実は針で刺したような穴があいていた。

「あっ、食べられてる！」

「そりゃそうだろ。もうずいぶん経つからな。中も食われてるんじゃないか？」

振ってみると、穴からは乾いた粉がこぼれ落ちる。あきらかに中が詰まっていない。

「まぁ、彼らのエサを持ってきちゃったわけだしね……」

あとで庭に返してあげなきゃね、とあこはどんぐりを見つめる。

（もう、あれからどれくらい経つのかしら……）

ここに最後に来たのはいつだったか。しかとは覚えていないが、確実に四年以上前だ。最後に来た日、それが最後になるなんて思ってもみなくて、今日来たのとおなじようにまた明日も庭で遊んだあとに宝物を入れに来るのだろうと思っていた。

しかし伏見の戦で祖父が亡くなって、年が明けて嫁ぎ先が決まったと言われて——小一郎は自分の部屋を訪ねて来ることはなくなり、自分もこの屋根裏に来ることはなくなった。

その代わり、周りにはおなじような年頃の侍女が増えた。自分の輿入れについてくる侍女を選んでいたのだろう。その中の一人が、昔ながらの遊び相手のしのだった。

あの日の自分は、嫁ぐということがどういうことなのかを知らなかった。

父に言われるままに住まいを替える、それが鳥居家中ではなく他家になっただけのことだ。

許婚がどういう人かも知らなかったし、これから共に過ごすということも、そしてこんな感情で心を埋め尽くされるということも――なにも、知らなかった。

（ねえ、元気にしてる……？）

あこは手にした宝物を見つめたまま、心はなつかしい場所へと翔けていった。

どんぐりを手に思惟に沈むあこに、小一郎は声を掛けられなかった。

なにを考えているかはその横顔でわかる。――ここから遠く離れた相手のことだ。

彼女とここで一緒に遊んでいた頃には、知りもしなかった存在。

そして子どもだった〈時〉に終止符を打った存在――

彼女の縁談が決まったのは五年前のこと。

この話さえなければ、それまでとおなじ穏やかな日々が流れ、彼女は遠く離れた江州ではなく、庭ひとつ挟んだだけの高須家の屋敷に住まいを移していたはずだ。

けれども、大名家の姫として彼女は他家に嫁ぐことが決まった。

それからの日々は、断たれた未来を諦めるための毎日だった。

その自分に彼女を嫁ぎ先に送り届けよと命が下り――そのとき、これが最後だと思い定めた。

家老名代の任を受け、自分は務めを果たした。それで終わりのはずだった。

けれどもまた、時は揺れ動こうとしている。

脳裏をこだまするのは数日前、あこの父、鳥居家当主忠政から告げられた言葉だ。

『――娘は井伊家と離縁させる』

『いま、縁談を白紙に戻すよう公儀に申し出ているところだ』

「――小一郎？」

呼びかけられて、小一郎ははっと我に返った。自分もまた思惟の世界に落ちていたらしい。傍らを見ればあこが「どうしたの？」と覗きこんでいる。

「いや……それ、拾ったのはいつだったっけなと思ってさ」

答えながら、小一郎は視線を逸らしていた――彼女の瞳を直視できなかった。

自分は嘘をつくのがうまくない。

けれどもあこは「そう」とあっさり引くと、今度は蛇の抜け殻をつまみあげて、それを拾ったときのことを話し出した。小一郎もなつかしい思い出話に相槌を打つ。

めずらしい白蛇の抜け殻。その白蛇を探そうと屋敷中を探しまわったこと。別のニシキヘビに噛まれそうになって逃げ惑ったこと。その春はずっと探しまわったけれども結局見つからなかったこと――

おなじ時を過ごしていたのに、一緒にいたときのことを話しているはずなのに、心が遠い。話す彼女も合わせる自分も、言葉を繕っている。

心を殺して、偽って――それでも彼女は笑っていた。
小一郎は話を聞きながら、手燭に照らされた瞳と、そこに宿る光に見入った。
（どうしてこんな状況で笑っていられる？）
実家と嫁ぎ先の関係がこじれて、自分だって苦しい立場にあるくせに。
（迎えに来ると……信じているからか？）
生まれながらに抱えていた業、それに傷つき泣いていた彼女。
今回、その古傷を抉るような形で江戸に戻されて、きっと泣いていると思っていた。
しかし、自分はいらない子どもだと、屋敷の片隅で泣いていた――あの頃とはちがう。
いまの彼女の眼にその弱さはない。
不安の影を払拭する光、その力を与えたのは。
（あいつ、か……）
ふたりが共にいたのは時に迷い込んだ半月、そして本来の時に戻ってからの二月ばかりだ。
その間になにがあったのだろう。なにが彼女を変わらせた？
言葉少ななあの当主が、気のきいたことのひとつでも言ったとは思えない。
ただ彼の存在を見て、彼女がなにかを感じ取った。
それは家を預かる者としての覚悟か、それとも他のなにか。
小一郎もその者を見たが、外見の線は細く、精神的にも細そうだった。なのにけっして途切

れることはなく、張り詰めた鋼鉄の糸のようで、それが切れるときはまた彼の命尽きるときなのだろうと、ぎりぎりの綱渡りをしているような危うさがあった。

そんなところが、嫁ぎ先で役に立ちたいと思っていた彼女の心に触れたのかもしれない。

しかし支えるに留まらず、突っ走って別のなにかを呼び寄せる彼女は、御家大事のあの者にとっては重荷だろうに——それでも魅かれるものがあったのだろう。

割符があたり前に符合するように、たがいに欠けた心が触れ合い、補い合った。

たがいの先代はそれを見越してふたりの縁を結んだのだろうか。

いや、それはとてつもなく低い確率だ。

普通ならありえない確率。それをなんという？　天運、奇運——それとも運命……か？

ならばなぜ、天はいま、それを引き裂こうとする？

「ねぇ小一郎、聞いてる？　どうかしたの？」

「……なんでもない」

答える声が硬かった。それは自分でもわかったが、今はそう絞り出すのが精いっぱいだった。

「なんでもなくないでしょ？　……あ、お仕事で疲れてるんじゃない？　わたしみたく毎日好きにできる身じゃないもの。休めるときはちゃんと休まなきゃ」

あこはそんな気遣いを見せる。昔はすることのなかった気遣いだ。

（それもまた、あいつ……か）

あこと同じ十六歳、その細い肩と身体で、自身の命を削って任を果たそうとしていた男――彼女に関するなにもかもが、ここにいない存在につながってしまう。

本当に疲れているのかもしれない。小一郎はあこの言葉に甘えさせてもらうことにした。

屋根裏から下りると、小一郎はあこを鳥居家中屋敷まで馬で送り届けた。

「連れ出してくれてありがとう。いい気分転換になったわ」

「そうか。またどこかに行こう」

「うん、時間ができたらいつでも来て」

でもちゃんと休んでからね？

そんなふうにいたずらめいて付け足して、あこは笑顔を向けて、屋敷にもどってゆく。

その笑顔に自分は応えられただろうか、それすらもわからなかった。

あたり前のように次の約束ができる――その現実を喜ぶべきだ。

あの日々の延長ではないにしろ、昔の日々を取りもどしたのだと。

しかし耳の奥でこだまする忠政の言葉、そして現実は、あまりに重いものだった。

『源十郎、娘はそなたに任せる』

そして忠政は明言した。

『そなたたちの祝言は年明けだ』――と。

第二章　慶長十年十一月　正しさと現実と

書道や茶の湯はもちろん、生け花、香合わせなども大名家の奥方の大切なたしなみだ。

今は花の季節ではないので、香合わせの腕を上げようと道具を引っ張り出したものの、覚えのある香木に手が止まった。——白檀だ。

涼やかな香りだが、彼の香りはそれだけではない。

（甘みは桂皮かしら。甘松？　辛みも少々、もっと涼やかさを足すのには龍脳とか……？）

あこは幸せな思い出を頼りに合わせてみる。そしていざ嗅いでみたが、それは記憶に残る香りとは大きくちがっていた。

香それぞれが混ぜた分量に応じて自己主張している。合わせたというより一緒にそこにあるだけで調和がない。一朝一夕にできると思ったわけではないが、ため息で香が飛びそうだ。

小一郎が訪ねてきたのは、そんなときだった。

「馬で出てみるか」

半月ぶりに見る小一郎は、すこし痩せた気がした。

笑顔はくずさないがどこか疲れたような面持ちに、あこは仕事の虫だった人を思い出す。

だが小一郎も追及してほしくないこともあるだろう。事情を聞かずに誘いを受けた。

新橋近くの中屋敷を出て馬を東に進めると、間口の小さな店が軒を連ね、さらに越えると隅田川に出る。

まだ積み上がって幾年も経ていない堤防に立つと、川にも拘らず、かすかに潮の香りがした。風に流される髪を押さえて眺めやると、河口に島が見えた。漁業でにぎわう佃島だ。あのあたりで川と海が交わる。

「この辺りもずいぶん変わったわね」

今年の春に来たときは堤の工事で人が溢れかえっていたのに、いまは船が行き交うだけだ。

「冬に川仕事は厳しいからな。さすがに凍りついたら話は別かもしれないが……」

冬には隅田川近くの湿地帯が凍りつく。年によっては隅田川自体が凍ることもあると聞く。その光景を見てみたかったが、そんな日はあまりの寒さに外に出ることすらできない。

今だって、綿入りの小袖にさらに薄布を羽織っているが、海風の冷たさが沁みる。

「今年も凍るかしら？」

「今年は――」

そう口を開いた小一郎だったが、「……どうだろうな」と言いかけた言葉を流した。

（あ……）

きっとそのとき小一郎が思い返していたのは、今年の夏の気候だ。今年の夏は暑かったから、もしくは寒かったから。それで冬の予想を言おうとしたのだろう。

だが小一郎は、自分を江州に送り届けるために江戸を離れていて、夏の江戸を知らない。だから言葉を濁した。自分に江州のことを思い出させないように。

思い返せば、小一郎はこの半年のことを一切口にしていない。なかったものとしているわけではない、ただ、なるだけ触れようとしない。――それは、自分を気遣っているからだ。

それも小一郎の優しさだと知っている。だからあこは敢えてその一線を踏み越えた。

「小一郎は知っているんでしょう？　あれからなにがあったか」

小一郎は驚きに目を瞠る。まさか自分から進んでその話に触れるとは思わなかったのだろう。しかしごまかしきれないと踏んだか、「……ああ」と苦々しげに漏らした。

「御家騒動の件はおおよそ聞いている。後で采女殿が挨拶に来られたからな」

「采女殿が？　江戸に？」

それはあこも初耳だった。

六月に井伊家に起きた御家騒動。

井伊家の主な家臣は、遠州井伊谷の豪族だったころの地縁血縁者と、徳川家から新たに付けられた新参者に大別できる。家老でいえば鈴木家が井伊谷方、木俣家が徳川方だ。

駿河の雄、今川家が隆盛を誇っていた時代に、井伊家は断絶間際まで没落した。その後徳川家に付いたことで盛り返したが、その分、徳川家から付けられた新参者が威勢を振るっている。

今までは鈴木家と木俣家で平衡を保っていたが、今回、鈴木家が怨霊の標的となって陥れら

れたことで、両者の争いが表面化した。
主馬は鈴木家嫡子として、采女は鈴木家当主の子として、直継は側近二人の動きを封じられることになった。
対応が後手に回り、事は伏見にいた家康の耳にまで届いてしまった。家康の断が下る前に木俣守勝がなんとか事を収めたものの、この一件の責任を取って筆頭家老鈴木石見守重好は辞任、嫡子の主馬が家老職を継ぐことは許されたものの、筆頭家老――家宰は木俣守勝に譲っている。
采女は直継との気持ちのすれ違いもあって御側役を解かれ、蟄居閉門、謹慎の身となった。
その謹慎の最中に、采女が命に背いて屋敷を離れていたことはあこも知っている。
だがまさか江戸まで来ていたとは思わなかった。
「石見殿は鳥居家の身内みたいなものだからな。事の顛末をご報告に来られた」
「そうだったの……」
鳥居家に釈明にきたのは誰のためか――任を解かれてなお、職務からは離れられなかったらしい。
采女殿らしいわねと、あこはかすかに笑みをこぼした。
いまは采女は井伊家に戻り、直継と元通り――というわけにはいかないが、新たな関係でそれなりになんとかやっている。
守勝と主馬という両家老の新しい体制で井伊家の建て直しを図っている最中、次に仕組まれ

た罠――その標的はあこだった。

まだ家中にしこりが残っているときに、怨霊に操られ、豊臣への内通を疑われた侍女をかばって言ってしまった。――徳川が豊臣に刃を向けるのは反逆だ、と。

その言がまた、家中を二分する火種となった。

豊臣家は潰すべきだという急進派と、いずれ千姫が産む子を立てて豊臣家存続を図る穏健派。諸大名でも意見が分かれるところだし、将軍家の内ですら対立している。徳川家の将来を憂う家康は急進派、娘の千姫を嫁がせている秀忠は穏健派だ。

しかしそこで急進派が取り沙汰したのが、あこの出自――羽柴の縁だった。

豊臣を庇うのは羽柴の娘ゆえ、中には、豊臣方の間者なのではないかというものもあった。

――それが父、鳥居忠政の耳に届いたらしい。

娘が出自から嫌疑を受けていると知った鳥居忠政は、即座に娘を江戸に戻すように要請した。直継は、婚礼が延期となっていること、そしてあこの安全を慮って、あこを鳥居家に帰した。

それがこの半年、夏から秋にかけてあったことだ。

鳥居家側は、井伊家が姫の出自から縁談を反故にしようとしていると思っており、過去三回の延期もそういう意図だったのではないかと疑う始末だ。

きっと小一郎にもそう伝わっていることだろう。出自から井伊家に居場所がなくなって、追

い返されてきたのだと。だから江州でのことに触れようとしないのだ。
「でもその後にあったこと――わたしが豊臣存続派の侍女を庇ったのは本当よ？　怨霊に操られていたわけじゃないわ。本当にそう思ったからそう言ったの」
「え？」
「軽率だったとは思ってる。けれど間違ったことを言ったとは思ってないわ。――大御所様がなされようとしていることは、簒奪よ」
「――！」
小一郎はあわてて周囲を探った。堤防に他に人はいたが、風は速い。きっと聞こえていない。
小一郎が目の色を変えてあわてるほどまずい内容だとわかったが、止める気はなかった。
「豊臣が天下を取った経緯は、織田からの強奪だったかもしれない。それをさらに奪うのはおなじことなのかもしれないわ。けれど大御所様は秀頼君を主に立てるという名分で、関ヶ原を戦ったわけでしょう。それを廃そうとするのが簒奪以外のなんだというの」
「あこッ！」
叱責にも似た怒声。しかしあこは止めない。
「戦乱の世なら簒奪もあたり前だったかもしれない。けれどその戦乱の世を終わらせようという人が、どうして世の秩序を乱すことをしようとするの？　豊臣の名はたしかに脅威だわ。けれど秀忠さま、その子の竹千代さまに泰平の世をつないでゆきたいなら、後世の誰かに簒奪を

許す口実を与えてはいけないと思うの」

いつになくうろたえる小一郎を、あこはまっすぐに見つめた。

言うべきことは言った。家中での常識を越えて、言葉は——心は、届くだろうか。

豊臣家はやがて滅ぼされるべきもの、それが秀吉存命の頃からの鳥居家の中での常識だった。

いずれ鳥居家の家老となる小一郎が、その意向に逆らえるはずがない。

あこの言うことはわかる——けれども、家中で培われた心が納得することを拒んでいる。

小一郎の奥にある葛藤。それが瞳の奥の光の揺れとなって伝わってくる。

「……と、言ってはいけなかったのね」

あこは少し笑ってみせて、目を伏せた。

——言葉は通じているのに、どうして心は隔てられてしまうのだろう。

出自や肩書き、言葉尻、そんな表層しか見ない人たちに伝えたかった。けれども、受け入れられない声はやはり〈羽柴の縁〉という壁に阻まれて、受け止めてはもらえなかった。

（会いたい、な……）

揺るがぬ目で、自分の言葉を、心を受け止めようとしてくれたあの人に。

先入観や常識を越えて、どうしてあの人には伝わったのだろう。人の目に見えないものが視え、人の目が万能でないことを知っているからか、それとも言葉の力を知っているからか。

言葉も表情も、すべてを吸収しようとする静かな瞳で、あの人は受け止めてくれた。

伝わる人の方が圧倒的に少ないこの世の中で、その人が許婚であったのは奇跡だ。
――けれど、いまその人に会えないのは自分のせいだ。
誰しもが胸の内に抱えながらも、口に出せない現実。
それを羽柴の縁である自分が口にしたから、あの人は家中で自分を守りきれなくなった。
「大御所様が作ろうとされた世は、天下泰平の世――戦のない世の中ではなかったの？」
圧倒的武力を盾に圧力をかけても、主筋である豊臣家が素直に従うはずがない。道理を歪めているのは徳川方、退かねばならない理由がないからだ。ならば、残された道は戦しかない。
生者が正義を言えないならば、豊臣を守るためには死者が蘇ってまでも貫くしかない。
三成らとて、今が穏やかに眠りにつける世であったなら眠りたいに違いないのだ。
しかし秀頼の命が――豊臣の家が危ないいま、おとなしく眠りについてくれとは言えない。
人の心を操って、世を乱す彼ら。その彼らを真に鎮めるために必要なもの――それは豊臣家を押しつぶす〈力〉ではなく、〈正しさ〉なのではないだろうか？
「――あこ」
それ以上言ってくれるな。そう苦々しい口調が告げている。
「うん、わかってる。屋敷ではおとなしくしているわ。でもこれがわたしの正直な気持ちだから、小一郎には知っていてもらいたかったの」
鳥居家家中では主家である徳川家は絶対だ。大恩ある徳川家を侮辱するようなことを口にし

ようものなら、その場で斬られかねない。父も、娘といえども容赦しないだろう。

あこは空を仰ぐ。江州とはちがう。山に遮られることのない遥かな空だ。

そこに流れる雲は雄大で、遮るものがない。ただどこまでも流れゆくものだ。——豊臣の運命もまた、時代の中でおなじように見えないなにかに流されてゆくのだろうか。

小一郎は観念して、ため息交じりに告げた。

「……今日はやめた方がよさそうだな」

「え、なにが？」

「折を見て、上屋敷に連れてくるようにおっしゃっていた」

「父上が？」

江州から戻ったあこを中屋敷に放り込み、一度として会いに来なかった父だ。

「だが今日はやめた方がよさそうだ。別に日を指定されたわけでもないし急がなくていい」

「ううん、お会いするわ！」

勢い込んだあこに小一郎は不安そうな目を向けた。

父に会う絶好の機会だ。自分は父の誤解を解かなければいけない。

父は井伊家が自分の出自に難癖をつけたと思っているが、それは違うのだと、自分の失言が原因なのだと伝えなければ。

本当のことを伝えれば、自分がその場で手討ちに遭いかねない。だがこのままにはできない。

――そなたは私の許嫁だ。

その言葉が自分の心を強くする。

自分の帰るべき場所はちゃんとある。

（そう、帰るの。江州へ）

父を説得して、また祝言の日を取りつけてもらう。延期が五度めだろうと十度めだろうと自分は江州に帰る。こんなところで命を落としている場合ではない。

「心配しないで、小一郎。ちゃんとおとなしくしてるから」

なおも渋る小一郎に頼み込んで、あこは鳥居家上屋敷へと向かった。

半月ぶりの上屋敷、今日は表門から入ろうとしたところ、門衛が目を瞠った。

姫の身ながら馬に相乗りで訪れたためか、それとも噂の渦中の本人を見てしまったためか。まるで幽霊でも見たかのような、後で清めの塩でも撒かれかねない驚きようだ。

しかし一切咎められることなく、あこは小一郎とともに表座敷へと向かった。

門衛ですらあの態度なのだ。自分の家中での立場は相当まずいらしいと当たりをつける。

それでも退くわけにはいかないと、当主忠政が来客用に使っている座敷に向かっていると、不意に正面から駆けてきた影に抱きしめられた。それも一人ではない。

「あこっ！」

「帰ったか」
「元気にしてたか!?」
抱きしめられ、頭を撫でられと、若い男三人にもみくちゃにされる。
「にっ、兄さま方!?」
あこがあわてふためいていると、小一郎が抱き上げる形で救出した。
「忠勝様、忠頼様、忠昌様。姫が溺れています」
「だって半年ぶりだぞ？」
「妹を可愛がってなにが悪い？」
「ひとり占めはよくないぞ、源十郎」
小一郎に詰め寄る三人は、二十歳を越えたかどうかというところ。揃いの柄の色違いの小袖で、顔立ちも背恰好もよく似ている。体格はいいが、背丈でやや小一郎に負けるのもおなじだ。
小一郎は視線の高さで劣る三人を睥睨すると、言い放った。
「はっきり申し上げて、邪魔です」
あまりの言い様に、「まぁまぁ小一郎、久しぶりなんだし……」とあこも仲裁に入る。
あこは父忠政の初子なので、正確には三人は実の兄ではない。祖父元忠の子、つまり叔父だ。
彼らは正室腹である父の忠政や叔父の成次とちがい、後で迎えた側室の子なので年はあこと
あまり変わらない。そのせいもあって、ほとんど兄妹同然に育てられた。

彼らは当主忠政の異母弟、つまりは鳥居家一門だ。しかし今は家臣として家老高須家の下にいるため、小一郎も遠慮がない。

「心の狭い男は嫌われるぞ」

下の兄の忠昌がそう鼻を鳴らすと、「その話は……」と小一郎は声をひそめた。

「ああ、それを聞きにきたのか」

「時機がよくなかったやもな」

上の兄ふたり、忠勝と忠頼がそう言って廊下の先を見やると、廊下には鳥居家の家人と、見覚えのない従者が控えていた。どうやら先客がきているらしい。

ちょっと待つかと促されて隣室に入ると、聞き耳を立てるまでもなく話が伝わってきた。話している内容はどうやら自分のこと、そして来ていた客は。

（井伊家のご使者……!?）

「なにとぞご再考のほどを」

そう言上して、使者は座敷を後にする。そしてあこのいる部屋の前を通ってゆくとき、一瞬目が合った。

年若いその使者はあこの知らない者だった。しかし相手は明らかに自分のことを知っている。使者は目礼をして廊下を通りすぎた。小一郎を見やると、なにも気付かなかったかのように立ち上がり、こちらを向こうともしない。——あこは、予想が間違っていないことを確信した。

「姫をお連れいたしました」
小一郎が廊下に拳をついて言上する。
あこが部屋に入ると、上座には父の忠政が、その傍らには叔父の成次がいた。
父とは京への出立以来、叔父とは三月の佐和山以来で、時を戻ってから会うのは初めてだ。
無事でよかったと、そしてまた会えてよかったと、叔父の目が優しく笑んでいた。
「息災か」
「父上、叔父上もお変わりなくご健勝のご様子、心よりお慶び申し上げます」
「そうか、こたびのことご苦労だったな」
そう告げる父の目には、叔父のような優しさはなかった。大きく構えていながらも、瞳は隙がなくこちらを探っている。
江戸で暮らしていた頃はこれがいつもの父の姿だと思っていた。
だが昔の伏見の暮らしを思い出した今は、父の心情——家を支える覚悟がよくわかる。
伏見での父は、家の跡継ぎである前に父親だった。しかし当主である今はちがう。そんな相手に、腹芸が通用するとは思えない。
あこは背後に控える小一郎に胸の内で詫び、戦略を変えた。
「父上。わたくしにも、先ほどのお話をお聞かせくださいませんか」
「なに？」

「先程の方は井伊家のご使者でしょう」
忠政は苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべた。苛立ちが扇子を弄ぶ手に表れている。
「そなたには関係ない」
「関係ないって……わたしの嫁ぎ先でしょう。わたしの一件と無縁ではないはずです」
「縁談は家同士のもの、そなたが口を挟むことではない」
「でも――」
言いかけたところで忠政はあこを見据え、口を開いた。
「井伊家との縁は破談にする」
（え？）
「離縁だ。ご公儀にもそう申し入れている。もはや井伊家はそなたの嫁ぎ先でもなんでもない。あの家のことは忘れろ」
（……父さま……なにを、言って……）
家同士の関係が絶えれば、縁も消える。祝言を挙げた後でも子を生した後でも実家に戻される。時には殺されることすらあると聞く。
戦国の世でなくなっても婚礼は政略の道具だ。けれど。
「そんな勝手な……!!」
「あこッ!!」

返された父の怒声に思わず怯んだ。
「勝手とはなんだ！　そなたは言われるままに嫁げばいいのだ!!」
「兄上っ!!」
その剣幕に成次が割って入り、弟の厳しい視線に忠政は浮かしかけた腰を戻す。
「――新たな嫁ぎ先も考えている。悪いようにはせぬ。屋敷で沙汰を待て」
なおも苛立ちを押し隠せぬ様子でそう告げると、忠政は「源十郎、連れて行け」と命じた。
あこは呆然としたまま動けない。小一郎はそんな自分の腕を取り、立ち上がらせようとする。
しかしあこはその手を摑むことすらできず、ろくに礼もできないまま、抱き支えられて父の前から下がった。
廊下に出てから追討ちのように聞こえたのは、父の繰り言だ。
「先代の顔に泥を塗りおってからに……！」
（お祖父さまの……顔に……）
あこはそのまま廊下の真ん中でへたりこんでしまった。
身体を動かすための指令を出す心、それが現実を受けとめきれずに止まっている。
（井伊家と、右近殿と、なんて……？）
――離縁。
その一言に目の前が暗くなる。

（嫌……）

心の中にはその言葉しかないのに、声にならない言葉に喉が詰まる。

あこは板間の廊下の上で拳を握りしめるが、こぼれる涙をこらえることができなかった。

からから……と音を立て、木箱が天井に沿って流れてゆく。

綱を手繰りよせるその音に主馬が一本の紐を引くと、木箱がするすると下りてきた。

中身を取り出して紐を放すと、また空になった木箱はもとの位置に戻り、天井を流れてゆく。

そして木箱が通りすぎてゆくと、小窓がばたん、と閉まった。

木箱の中に入っていたのは一通の文、部屋にいながらにして文のやり取りができる仕組みだ。

木俣家に来るたびに、なにかしらからくりが増えている。守勝の嫡子、右京の趣味だ。

からくりを見慣れていない直継は不思議そうにそれを見上げていたが、べつにこれを見せるために愛宕屋敷から木俣家の屋敷に呼んだわけではない。主馬はざっと書状に目を走らせた。

「江戸で折衝を続けさせておりますが、予想どおり、状況は思わしくないですね。ご公儀に圧力をかけているみたいですよ」

「左京亮殿も怒り心頭でしょうなぁ……」

致し方なし、と木俣守勝は腕を組んで唸っている。

「まぁ鈴木家の不祥事の直後でしたしね。姫の件と父の件、鳥居家は無縁じゃありませんし」

あこは左京亮殿こと鳥居忠政の娘、そして主馬の父である鈴木重好は鳥居忠政の姉婿だ。

重好の家老解任の件は、江州と伏見の家康との間で話がまとまってしまい、江戸にいる忠政の耳に入れている間もなかった。

相談したところで鳥居家が井伊家の内情に口を挟めるわけではない。だが事前に聞いているのと、事が済んでから聞かされるのとでは大違いだ。

そしてその騒動の直後に起きた姫の一件――娘を冒瀆された鳥居家としては、彼女を江戸に引き上げるのは妥当な動きだ。

『姫を江戸に帰したところで、叔父上に話し合いに応じてもらえるわけではありませんよ』

そう言っておいたのに、直継は彼女を帰すことを選んだ。

鳥居家に誠意を見せる意味もあったが、なにより彼女の身の安全を図った結果だ。御家騒動で武力衝突一目前までいき、家人たちもいまだ気が立っている。そんな中に彼女を置いておくわけにはいかない。

姫は帰した。そしてその次の忠政の手は早かった。

「来年には祝言らしいですよ。ご公儀の許可が下り次第ってところですか」

あこの再嫁先の候補として挙がっているのは高須家嫡男――つまり高須源十郎だった。

（よりにもよって元鞘に戻すかねぇ……）

「まぁ、一度当家と縁のあった姫をもらって井伊家を敵に回したい家もないでしょうし、鳥居家は石高も上がって新たな家人が増えてますからね、古参の臣との縁を固めておくのは良策です。一の姫の嫁ぎ先が次の筆頭家老というのは妥当な線でしょう」

妥当であるが、あからさまな挑発行為だ。鳥居左京亮忠政、我が叔父ながら食えない人だ。

しかし直継はそこまで考えが回っていないのか、鳥居家への怒りよりあこの再嫁の苛立ちに扇を握りしめた。

「彼女の身柄は返しちゃいましたしね。うちとしてはご公儀への反論もできませんし、鳥居家が押せば遠からず幕府も許しを出すでしょう」

四度目の延期は完全に当家の都合だ。それに彼女の失言を公儀に届け出るわけにはいかない。彼女の命に関わりかねないからだ。

御家騒動の不祥事を理由に離縁を申し立てられれば、井伊家としては反論の余地がない。

（やっぱこのあたりもあの人らの仕掛けなんだろうなー）

当初は井伊家乗っ取りを企んでいた怨霊たちだが、いつしか乗っ取るのではなく幕府との関係を悪化させて、孤立させる策に変更したらしい。

狙っているのは佐和山からの転封だ。幕府の力を利用して井伊家を佐和山から追い出すことにしたようだ。

嬉しくないが仕掛けがだんだん巧みに、そしていやらしくなってきている。仕掛けどころがことごとく自分と似ていて、まるで己自身と争わされているようで精神的にこたえる。

だが、家を守るためには退くわけにはいかない。

「彼女、許嫁じゃなくなっちゃいますね。どうされます？」

「取り戻す」

即断だった。

「許嫁であろうとなかろうと、彼女は私のものだ」

いや、許嫁だったから側にいたんですけどね……と突っ込むのは野暮なので放っておく。

「家中の表向きも鳥居家とも、さらにこじれますよ」

「任せる。なんとか両方抑えろ」

「ええまぁ、なんとでもやりますよ。表でも裏でもなんでもね。家老ですからね」

（あーあ、妙なところばっかり押しつけてくれちゃって）

しかしその絶対的な信頼が心地よい。

自分がどのような者か——どれだけ信用ならない者か知っているだろうに、それでも信頼を寄せてくれる。裏切られた時は一蓮托生と、受け止める度量があるからだ。

家幸の座は守勝に譲りこそしたが、守勝は急進派の抑えとしていてくれるだけで、実務は自分の双肩にかかっている。自分がやるしかない。

「にしても彼女の一言は痛かったですね」
「祖父譲りか父譲りか、長いものにおとなしく巻かれるご性分ではありませぬゆえなぁ」
「イノシシ娘なんで仕方ないといえば仕方ないんですけどね」
家康がしようとしているのは簒奪――徳川が孕む矛盾、その急所を突いたようなものだ。
三成への同情ではなく、正論として、怨霊たちと彼女の意見が一致してしまった。
だが当然、徳川家臣である井伊家の家中で認められる話ではない。
「彼女の家中での立場はなんとでもしましょう。ですが、そうなると殿まで親豊臣派として目を付けられるのは避けられませんよ」
この一件が大御所家康の耳に入っていないはずがない。譜代といえども、徳川の間者は忍びこんでいる。
それに井伊家は徳川から新しく付けられた臣がやたらに多い。木俣守勝からしてそうだ。
彼らの忠誠は井伊家ではなく徳川家にある。井伊家に謀反の動きがあれば、すぐさま徳川に知らされる。御家騒動の一件も、守勝は直継を溺愛しているからいいようなものの、彼が敵に回れば即刻御家取り潰しにもなりかねない事態だった。
「徳川家は、秀頼公の上洛要請の一件で豊臣と微妙な状況ですしね。いま豊臣との仲を疑われるのはかなり厳しいです」
「それでも、彼女は渡さない」

直継の言は揺らぎがなかった。

「彼女の言が親豊臣派に聞こえるなら、秀忠公の意図を汲んでいるかのようにふるまえばいい。千姫を嫁がせている秀忠公も、大御所の傀儡ではない自由になる手足が欲しかろう」

（ずいぶん言うようになって）

周囲が――主に自分が先に手を打ってしまうので、たいてい直継が口を挟むことはない。だが、彼の中にも確固たる意思があり、意に沿わないときは口を出す。

そして今回は、多くの家臣を敵に回すことになるのを覚悟しているのだろう。きっちり方向性を示してきた。

彼女を取り返す――その直継の心が固まっているだけで安心できる。が。

「殿、ひとつ確認させてもらってもいいですか」

「なんだ」

「それは姫を――彼女を、この血の系譜に巻きこむ覚悟ができたと受け取っていいですか」

その問いに、直継は息を飲んだ。言わんとする意味は正しく伝わっているらしい。

自分が問うたのは、彼女との間に子を生すつもりがあるか否かだ。

彼女が直継の心の拠り所であることはわかっている。しかし、彼女の心が壊れることを懸念して子を――〈力〉を宿す子を産ませるつもりがないなら、彼女を取り戻すことに意味はない。

「当家にとって大事なのは、繁栄することではありません。繋ぐことです。そのために彼女が

必要だというなら手を打ちましょう。ですが」
手を出す気がないならこのまま退けと、言外に告げる。
当主鳥居忠政の了承を取り付けない限り、彼女は帰る場所を失うことになる。
それでいて直継が大名の務めとして他に正室を迎え、さらに世継ぎの母にもなれないとなれば、彼女の家中での立場はない。このまま放っておいてやったほうが彼女のためだ。
いかがなさいます。そう目で問いかけると、直継は重い口を開いた。
「いずれは……な」
「べつに今日明日中に産めって話じゃないですよ。鶏じゃないんですから」
その物言いを彼女に対する侮辱と受け取ったか、直継はむっとして言いかえした。
「産んでもらいたいと思っている」
明確な返答に、守勝がおおっと声を上げた。
「それなら、結構です」
実際問題として授かるかどうかは神の領分だ。いまはその意思だけあればいい。だが。
「彼女も欲しいと言っていたしな」
付け足されたその一言に、主馬は思わず吹きそうになった。
「……それはまたどのような経緯で」
「斎殿がお気に入りらしくてな。斎殿みたいな子がいいと言われた」

「……で、なんて答えたんですか」
「努力すると言った」
「……」
彼女にしてみれば、斎は幼少時の直継そのものだ。可愛くないはずがない。だがあまりに斎を可愛がる彼女に直継が嫉妬して、斎をどう思っているのか聞いたのだろう。
そのとき会話は噛み合っていたのだかいなかったのだか、おたがい疎いようでいながら、しかし妙なところで意識のすり合わせだけはできているらしい。
努力するまでもなく似ますよ多分と言うべきか、そもそもなにをどう努力するつもりなんですかと言うべきか、どちらにしても言うのが馬鹿らしくなって主馬は守勝に向き直った。
「というわけですので木俣殿、これは御家の大事ですのでご協力ください」
姫の奪還は直継の私闘ではなく、家の問題なのだと話をすり替える。
しかし守勝は直継の言葉に胸を熱くしたものか、赤くなった目を細めた。
その姿はまるで娘を嫁がせる父親そのものだ。
「もう一頑張りせねばなりませぬなぁ」
「長生きしてくださらないと困りますよ。御子のご養育はお任せしますので」
感極まって今にも泣き出しそうな守勝を、直継は呆然と見ている。
（この人はまったく……）

自分がなにを言ったのか、まだわかっていないらしい。
しかしまずは、人としての情が人並みに育ってくれたことを感謝すべきだろう。
家に関することは問題山積だが、それさえ片づければ未来は拓けそうだ。
直継がいて、守勝がいて、采女がいて、自分は家老という地位にあって家を支える。それは自分が望んでいた日々だ。それに付随する苦労ならしかたない。
実にやり甲斐のある苦労だなと思いつつ、主馬は苦笑を浮かべた。
「じゃ、御家の未来のために、まずはこの状況をなんとかしましょうかね」

第三章　慶長十年十一月

白い闇

——今日もまた、夢を見なかった。

目を開けると、室内はぼんやりと白みがかっていた。
冬の弱々しい光の欠片が、部屋にたゆとうている。
しかし光はあるのに、心は暗闇に沈んでいる。光はあってもここは闇の底だ。
（なぜ……どうして）
毎日のように夢に見ていた人が、あの日を境にぱったり出てこなくなった。
それは断たれた縁を象徴しているようで、眦を涙が伝い、あこは両袖で目を覆った。
——泣いてもいいのに。泣いたって誰も見やしないんだから。
あの日からなぜか身体が重くなって、そのうち立ち上がれなくなって、這って動くのが精いっぱいになって、そして侍女たちが朝に起こしに来ることもなくなった。
自分が起き出すまでずっとこのまま、寝ているだけでも一日は終わる。
本当の自分のいるべき場所に帰りたかった。ここではない新しい場所で、幸せになりたかった。けれども江州は自分の居場所ではなかった。

父に言われるがままに、見知らぬ相手へ嫁ぐ——一年前にはあたり前のように受け入れていたことだ。

しかし芽生えてしまった感情が、そのあたり前を覆す。

最初から知らなければよかったのか。出会わなければよかったのか。

（ううん、そんなことない）

——出会えてよかった。

その声音を覚えている。三月に、共に過ごした夜のことだ。

あのとき、もう会えない覚悟はしていた。

もう会えない——今の状況はあのときとおなじはずだ。

（でも、いるのに）

この陸続きのおなじ国の、おなじ時の中にいるのに。

もしこのまま離縁がなれば、直継は他家の姫を迎えるのだろうか。

いずこかの大名家の姫を正室に迎えて、子を生して、次代へつなぐのが当主の務め。

気持ちとは別の話だとわかっている。けれども直継はきっと、御家のために嫁いできた姫を大切にする。共に優しい時を過ごすことだろう。

そんな現実を見るのは辛い。いっそちがう世界の住人だったと思う方が割り切れた。

現実に会えないなら、せめて夢で会いたい。なのに夢にも出てきてくれない。

夢も現実もすべて朝霧に包まれたひとつづきの世界で、どこにいても自分の居場所がない。
あの人が、いない。
（――会いたい）
いるはずもない室内を探す。ここが愛宕屋敷ならすぐに会いにいけるのに。
傍らを見やると、枕の隣に横たわっていたものに目が留まった。
手作りの人形だ。ひな人形を作るのだと、今年の春にかやが愛宕屋敷で作った人形。
縁となって夢を運んできてくれないかと、枕辺に置いておいたものだった。
その人形はお内裏様にしては冠もかぶらず、長い髪を垂らしている。愛想はないが、なんとなくかわいい目元をしている。
（でも本当の右近殿は）
普段はもっと愛想がなくて、でも自分を見つめるときはもっと優しい眼をしていることを知っている。
――必ず迎えに行く。
そう言った優しい声音も、触れた肌のぬくもりも覚えているのに。
江戸はあまりに遠く、暗くて、狭くて、息苦しい。
（愛宕のお屋敷に帰りたい、ね……）
会いたい。会いたい――この想いは伝わっているだろうか。

あこは身を起こして人形を頬に寄せ、もう何日も泣きつづけて涸れ果てたはずの目から、また涙がこぼれた。

――はやく会わせて――あの人に。



『――婚礼の件はそなたから伝えておけ』

当主忠政から下された命。

そのあまりに重い命が、小一郎の足を中屋敷から遠ざけていた。

自分は、彼女が許婚である当主に惹かれていたことを知っている。その縁談が破談になりつつあると聞かされて、どのような気持ちで過ごしているのだろう。

ずっと気になっていたのだが、小一郎を動かしたのは侍女から聞いたある噂だった。

――姫さまは、起き上がることはおろか、お声まで……

そう耳にした小一郎は、いてもたってもいられずに馬を駆ってきた。

夕刻の曇天の下、彼女の部屋に向かうと、障子は半分ほど――ちょうど人一人が通れるほど開いていた。

「――あこ？」

声をかけて覗きこむが、部屋に姿はない。

小一郎は衣桁にかかったままの緋色の打掛を見つけると、あわてて周囲を探った。

今朝は霜が降りていたほどの冷えこみようだ。日も暮れようというこの時刻に打掛も羽織らずに出歩くなど自殺行為だ。

（まさか――！）

自分の思い浮かべた不吉な予感に、探す瞳が鋭さを帯びる。

――が、庭池の石橋を渡った先に、うずくまる白色の小袖を見つけた。

倒れているわけではない。しゃがみこんでいるだけだ。

無事だったことにほっと息をついて、小一郎は打掛を手に庭に下りた。

「なにをしているんだ？」

返事はない。彼女はふり向きもせず、湿った落ち葉の中で、じっと一点を見つめていた。

覗きこむと、視線の先にあったのはどんぐりだった。

他にもかじられた松ぼっくりや蟬の抜け殻、赤や黄に染まりかけの色とりどりの、しかしどこかくすんだ落ち葉が散っている。

「拾わないのか」

その問いかけにも無言で、自分の言葉が底のない沼に吸い込まれていったような気がした。

ほんの数日見ないうちに痩せたなと思った。ひと回り小さくなった気がする。いや、それは全身から放っていた生気がないせいだろうか。瞳にも光がない。

（なにを見ている？　……なにが見えている？）

あこの指が動く気配はない。

このまま落ち葉とともに、冬の大地に呑み込まれてゆきそうだと思った。

――だから、言った。

「わかっているんだろう、あこ。――――迎えは、来ない」

一瞬、彼女の肩が振れた。

離縁の異議申し立ては当主の独断で動ける問題ではない。家中の割れた今の状況では無理だ。幕府へ異議を申し立てなければ、このまま離縁は成立する――あの者は迎えに来ない。

現実を突きつけたその言葉は心に届くか、このまま落ち葉とともに朽ちゆくか。

心を止めても時は止まることなく流れ続ける。その時を生きた軀として永らえるか、このまま夜風にさらされて真に軀となるか、選ぶのは今だ。

夕風が吹いて、彼女の長い髪がざっと揺れる。――彼女の顔が見えた。

彼女は泣いていた。

眠りにつく木から朽ちた葉が散り落ちるように、鈍色に覆われた空から雪が舞い落ちるように、はらはらと。音もなく。

小一郎は風から庇うように背後に立つと、打掛を肩からかけてやった。
朽ち葉とは対照的な、色鮮やかな緋色の打掛を。
「――ゆっくりでいい。ちゃんと息をしろ」
その上で泣きたいなら泣けばいいし、喚きたいなら喚けばいい。当たり散らされても怖がられてもなんでもいい。それは心が生きている証だからだ。
言葉は聞こえているらしい。彼女は浅い息をくり返し、白く小さな息がこぼれた。
その吐息の熱さが、彼女の抱えていた熱を――想いの深さを思わせる。
それに痛みを覚えながらも小一郎は傍らに膝をつくと、あこの頭に手を置いた。そして仔猫を扱うかのようにその髪をなでる。
「……なぁ、あこ」
こぼれ落ちた言葉は、自分で思っていた以上に穏やかだった。
胸の奥に渦巻く自分自身の気持ち、それがどのようなものなのか、正直わかっていない。
それでもただひとつ、揺らがない想いがある。
「俺さ、待つことだけは慣れたんだ」
彼女が心を閉ざすのは、初めてではない。
伊勢で、心も記憶も抜け落ちて、抜け殻となってその身ひとつで帰ってきた。
それから十年、まったくなにも残っていない状況からでも彼女は立ち直った。

真白の闇の底からゆっくりと浮き上がってくる様を、時をかけて変わりゆく姿を、自分はずっと見ていた。

光をなくしていた瞳がやがて周囲を映し出し、初めて見る者に囲まれて怯えていた日々。

拾ってきたばかりの仔猫のように、部屋中を逃げ回って、侍女を困らせて。

それでもある日、屋敷に帰ろうとした自分に縋りついてきて、泣きながら名を呼んだ——侍女でも誰でもなく、一番に自分の名を。

そのときの奇跡を知っているから、自分は待つことができる。

彼女はきっと大丈夫。また顔を上げられる日は来る。

自分は、また現実と向き合えるその日が来るのを待っているから。

「寒くないか？」

その問いかけにも無言だった。けれども縋るなにかを求めるようにかすかに動いた指先を、小一郎は摑み取る。

あこの指先がかすかに反応したが、それ以上の抵抗はなかった。

「部屋にもどるか」

小一郎はその手を取って、立ち上がらせる。そのときあこは顔を上げ、初めてなにに手を引かれたのか気付いたように視点が定まった。

ふらつく足が転びそうになったところを抱きとめる。

「こ……いち、ろ……」

耳朶をくすぐる声。小一郎は目を瞠り、次いで胸の奥に暖かな灯が点った。

――なんだ、ちゃんと言えるんじゃないか。

小一郎はあこの身を離すと、その身体をそっと抱き上げた。

彼女の身体を抱えるのは初めてではない。だがこんなに軽かっただろうか。

共に過ごす時の中で、彼女も大きくなったが、自分はもっと大きくなった。

けれどもその時間が、彼女を抱えるために必要なものだったというならそれも悪くない。

彼女の指が弱々しく、しかし自分の襟に伸び、顔を埋めるようにしがみつく。

なにも心配しなくていいと、小一郎はその小さな身体を抱き寄せた。

第四章　慶長十年十二月　空蟬の君

十二月に入ったその日、江戸に雪が降った。
「初雪でございますわね。積もるようなら難儀なさいますでしょう」
侍女が言っているのは小一郎のことだ。
あの日以来小一郎は、忙しいだろうに、半時なり四半時なりとも欠かさず中屋敷に顔を出す。
手土産は、渡来の菓子が手に入っただの、漬物が美味かっただのと、ほとんどが食べ物だ。
今も文机の上は、飴やら金平糖やらが入った陶器がずらりと並んでいる。
（もう、子どもじゃないんだから……）
けれども小一郎の持ってきてくれた金平糖、それが自分の心を揺り起こしたのは確かだ。
その金平糖は、佐和山で口に放り込まれたものとおなじ味がした。
――甘いもの、好きでしょ？
江戸帰りの彼と入れ替わるように、今度は自分が江戸にいるのが不思議な気分だった。
「庭に下りてみましょうか」
雪は午過ぎまで降っていたが今はやんでいる。だが曇天は晴れることなく、いつまた降りだすかわからない。

あと一刻もしないうちに陽は落ちる。この雪は残り雪になってさらに降り積もることだろう。

庭に下りると、池は凍ってはいないものの、溶けきれなかった雪がみぞれのように浮かんでいた。白化粧をした庭の中で、椿がぽつぽつと紅の色を添えている。

「かまくら……は、まだ無理そうね」

「例年ですと、それほど降るのは年が明けてからですわね」

——かまくらって作ったことある？

直継にそう問うたのはいつだったか。

——江州は、夏は浜風で涼しいが、冬は雪が深いぞ。江戸より冷え込む。覚悟しておけ。

夏の夜に、夜風が涼しくて気持ちいいと話をしていたときのことだ。

——でもかまくらって暖かいのよ。作るのは大変だけど、今度みんなでしてみない？

暑いときに暖かい話をされてもな、と呆れられながらも寄り添って、たがいの熱を感じ合って、これから来る秋も冬もその次の春もまた、一緒に過ごせると信じていた。

なつかしい思い出に胸が痛む。

けれど思い出と認められるようになったのは、痛みがやわらいできた証だろうか。

雪が降り積もってゆくように、あの月日は新たに降る雪の下で眠りにつくのだろうか——それが忘れるということなのか。

（忘れる……忘れられるの？　……忘れてしまうの？）

まだきりと痛む心がある。それが癒えるときが忘れたということなのだろうか？
ならばこの痛みはずっと抱えていたい。あこはきつく拳を握りしめ、手のひらに爪を立てた。
そんなあこを現実に引き戻したのは、庭の先の塀の向こうから聞こえるざわめき声だ。
「……なにかしら」
「ああ、お国許から出てこられたのでしょう。雪の深い御国は早めにいらっしゃいますから」
鳥居家中屋敷の隣は、また別の家の中屋敷だ。
どの大名屋敷も屋敷の周囲は長櫓で、国許からついてきた下級武士の宿所になっている。
「雪で難儀して、年始の御礼に間に合わなかったら大変ですもの」
年始の御礼というのは正月の将軍への謁見だ。大名は将軍に新年祝賀のために江戸を訪れる。
今年は二月に家康、秀忠の上洛の関係で、正月に登城した者はさほどの数ではなかった。
だが来年は秀忠が将軍となって初めての正月、全国の大名が江戸に集うはずだ。
（じゃあ右近殿も、江戸に……？）
その考えに鼓動が跳ねた。
譜代筆頭格である井伊家が、新年祝賀に来ないはずがない。
当主が滞在するのは上屋敷――井伊家上屋敷は、鳥居家上屋敷と目と鼻の先だ。
それにおなじ譜代の大大名、参賀の日も父とおなじ。祝言の話が必ず出るはずだ。
（いついらっしゃるの？）

正月まであと一月。佐和山から江戸までは半月あまりの道のり、雪での遅れも見越して早めに江戸入りすることを考えると、すくなくともう佐和山は発っている。

（右近殿が来る――）

直継が、江戸に向かって近づいている。それだけで鼓動が逸る。身体が震える。

――やはり忘れてなどいない。心も身体もあの人に会いたがっている。

そのときあわただしく屋敷の廊下から足音がした。足音だけで小一郎だとわかった。

ふり返ると、やはり小一郎だった。だが表情はいつもと違って硬い。

「どうかしたの……？」

庭に下りてきた小一郎に問う。自分の心にあったのは不安ではなく、かすかな期待だ。

小一郎の表情から、なにかが変わったのだとわかったから。

（もしかして、祝言の日取りがまとまった……？）

しかし、甘い期待はすぐさま打ち破られた。

「出立の準備をしろ。明日、屋敷を発つ」

「え？　どういうこと？」

――どこに。佐和山に？　と思いかけたが違う。

城主の直継が江戸に向かっている時期に、それはない。

（じゃあいったい……）

「積もる前に領地に下る」
「領地って……磐城？」
鳥居家の領国である磐城は、水戸と仙臺の間にある。
海沿いなので温暖ではあるが、それでも江戸より北だ。今から行っても雪の季節にぶつかる。
「どうして……」
「――公儀から、許しが出た」
小一郎が苦々しげに告げる。
公儀からの許しが出た――それは。
「離縁……ということ……？」
「井伊家から異議の申し立てはなかった。それをもって鳥居家の申し出が受理された」
縁談を許可するのは幕府だ。まだ祝言を挙げていないこの状況で、一方の家から破談の話が出されたなら、そして相手から異議がなかったならば、許可を取り下げるのが道理だ。
（じゃあもう、自分は、右近殿とは、なにも……？）
あこは目の前が暗くなり、崩れ落ちそうになった身体を小一郎に抱きとめられた。
あの人が、自分が添い遂げる相手だと思っていた。新しい家族になる人だと。
離れていてもつながっていると信じていた。
けれども自分たちをつなぐ縁はもう、なにも――ない。

――必ず迎えに行く。

残っているのは胸に刻まれた言葉ひとつだけ。

直継は嘘は言わない。だが騒動後の今の立場では公儀の決定を覆せなかったということか。

しかし異議の申し立てはなかったと小一郎は言った。

では迎えに行くと言ったあの言葉は――――？

（まさか……初めから、嘘……だった……？）

自分を江戸に帰した時点で、直継はもうこの結末をわかっていた。

けれども聞きわけない自分を宥めるために、江州での出来事を時の中に忘れ去るその日が来るまで、嘘をついてまで希望をくれていたのだとしたら……？

こんな状況に陥ったのも、あの人に嘘をつかせたのも――すべて。

「わたしの……せい……？」

「違う」

「でも、わたしが右近殿に……！」

自分が聞きわけなかったから、この時代の流れに逆らうようなことを言ったから、直継に嘘をつかせた。言霊の加護を受けるあの人に、言葉を裏切らせてしまった。

直継の優しさに甘えることなく、ちゃんと現実を見ていたなら。井伊家に迷惑をかけることも、彼に嘘をつかせることも、彼に愛想を尽かされることもなかっただろうに。

信じていた言葉を裏切られたのが悲しいのか、裏切らせざるを得なかった自分が情けないのかわからない。でもどちらでも結論はおなじ――自分はいらなくなったのだ。

やはり自分は、いらない子、だった――

「違う！」

小一郎は荒々しくあこの両肩をつかむと、真正面に向かせた。

「あの方はもう関係ない！　いまは俺が、」

――おまえの許婚だ。

（え……？）

あこの中で時が止まった。

許婚――それは自分の行くべきところ。自分の新たな居場所だ。

「……磐城で祝言だ。俺たちの」

黒目がちな瞳が真っ直ぐにあこを射抜く。

嫁ぎ先は父が決めるもの――自分の運命が、目の前にあった。

許婚として、夫として、小一郎がこの先ずっと自分の側にいてくれる。あの幼い頃のような日々が続いてゆくのだ。これから、ずっと。

なつかしい日々。たしかにあの日の自分は笑っていた。世界は宝物で満たされていて、毎日が楽しくて、その日がつづくことを疑っていなかった。そんな毎日が戻ってくる。

——なのになぜ、涙がこぼれる？

いらない子じゃなかった——江州にはもう帰れなくても、自分には新しい居場所がある。

（なのに、なぜ……？）

その涙を小一郎も見ているはずなのに、小一郎は目を逸らさない。

そんなことわかっているというように。

そう、ずっと側にいた小一郎には、きっと言葉にするまでもなく伝わっている。

——いま心を占めているのは、想いを寄せた人に捨てられた悲しみだ。

それでも、肩を摑む小一郎の指先が力を失うことはなく、このまま、涙の止まらない自分のままを受け止めると、瞳の奥の振れる光が語っている。

きっと一生に幾度か幸せを実感する時があるとしたら、いまこの瞬間がそうなのだろう。

その先につづくなんの憂いもない幸福な時間。それを手に入れられるかどうかは、この瞬間にかかっている。

自分はなにが欲しい？　一生のうちにただひとつ、手に入れられるかもしれない宝物。

それは——

「その手を離せ」

その声に弾かれたように見やる。

すると池の向こう、白に染まった景色の中に、その人が、いた。

（どう、して……）

あこは吸い寄せられるように足を踏み出す。

しかし小一郎は手にしていた自分の肩を引き、歩みの前に背中を入れた。

「もはや貴方に言われる筋合いはない」

江州にいたときとは違う。当主相手に一歩も譲らない、揺らがぬ声音で小一郎は告げた。

「――彼女は、俺の許嫁だ」

「！」

そのときかまいたちのようになにかが襲った。駆け抜けたのは、一陣の風か、鋭い殺気か。

「……ならば奪い返すまで」

鋼の糸のように張り詰めた低い声音に、鯉口を外す音が重なった。

――彼女を部屋に。小一郎はふり返りもせず侍女に命じる。

直継は池の石橋を渡り、まっすぐに歩んでくる。小一郎は腰を落とすと、柄に手を添えるようにして構える。――なにが起きるかは一目瞭然だった。

「ね、ねぇ……！」

駆け寄りたかった。しかしあこの身は、侍女たちによってたかって押さえつけられる。

「お願い、放して……！」

しかしあこは津波に襲われるがごとく侍女たちに押し流され、部屋に連れ戻された。

小一郎は障子が閉ざされるのを確認してから、浅い雪を踏んで歩み寄る直継を凝視した。緩やかな直垂のせいで定かではないが、歩幅、手の長さから瞬時に体格を把握する。三月から五月に戻ったときにも驚いたが、直継はさらに背丈が伸びていた。

自分たちが離れていた月日を思う。半年——育ち盛りの少年が育つには十分な時間だ。細身なのは相変わらずだが、線に儚さがない。もはや彼を少年という者はいないだろう。心は以前から腹立たしく思えるほど落ち着いていた。心がないわけではない、ぶれないのだ。

ここは鳥居家の屋敷——敵地だというのに、気押される様子もない。

石橋を渡り数歩、危なげない間を置いて、直継もまた足を踏み出して構えた。抜刀の構えだ。よほど鍛錬を積んでいるのか、型に隙がない。型を支えているのは筋力はもちろんのこと、胆力、そして気迫だ。

この半年に一体なにがあった——？

勘繰りたくなるような変化だが、観察が許されたのはそこまでだった。
刀を抜く構えのまま、相手の息を読む。見るのは口元ではない、身体全体の気の流れだ。
そして彼の世界が完結していることを知る。
鋭い眼光。張り詰める空気。庭木から雪が落ちる気配――それが引き金だった。

閉ざされた障子の向こうに、鋭い剣戟の音がした。
はっとふり返ったあこに、侍女らが閉ざされた障子を取り囲む。
一太刀では決まらなかったらしい。金音は寒気を切り裂き、一合、二合とやむ気配がない。
「やめさせて!!」
障子に駆け寄るあこに、「なりません!」と侍女があこの裾にすがりつく。
「でも、ふたりが……!」
「――手出し無用ッ!」
小一郎の怒声が聞こえた。剣戟の音に駆けつけてきた家人を下がらせたのだろう。
自分は小一郎の腕も、直継の腕も知っている。直継は剣の型だけでなく怨霊相手に実践を知っているが、小一郎の腕も侮れない。どちらも優劣付けがたく、一方的な結果には終わらない。
真剣勝負に引き分けはない。あるのは相討ち――だ。

閉ざされた障子の向こうで刃音につづき、小刻みに震える金音がした。刀が嚙み合ったか、力業になれば体格で勝る小一郎のほうが有利だ。

勝ち敗け云々の話ではない。どちらも傷ついてほしくないのに——どうすれば、争いを止められる？

（右近殿は本当に来てくれた……）

あの言葉は嘘ではなかった——自分はもうそれだけで十分だ。それだけでいいから、どうか。

（誰か、ふたりを助けて——）

そのとき、足にすがりついていた侍女の縛めが解けた。

見下ろすと、みな一斉に隣室につながる襖にむかって手を付いている。

その方を見やると、黒地に金の蔦が映える打掛を引いて部屋に入ってきたのは。

「……母、上……？」

上屋敷にいるはずの——春に江州に発つときに別れて以来の、母だった。

年は三十をいくつか過ぎたばかり、まだ若いが、それでも大名家を支えている矜持がその立ち居振る舞いに表れている。

鳥居家当主の正室の訪いを、侍女はみな平伏して迎えた。

「お下がりなさい」

邪魔にならぬよう。付け足された一言に、侍女たちは中庭を避けて隣室から部屋を辞した。

上座についた母を前に、あこはひとり部屋の真ん中で立ちすくんだまま動けなかった。
母は、母である前に正室だ。当主の正室を前に、実の娘といえども無礼は許されない。
けれども背後でなおもつづく剣戟に、あこは腰を下ろすことができなかった。
（――わたし、は、なにをしようとしているの）
部屋から出てなにをするというのか。そんなことをすれば、もう二度と鳥居家には戻れない。
それに今回の件で、生母である母の立場も悪くなったはず。ただでさえ迷惑をかけているのに、さらに自分は親不孝なことをしようとしている。
（でも、でも……！）
そこに、会いたかった人がいる――約束どおり、来てくれた。
どちらも傷ついて欲しくない。あの争いは、自分が一言伝えれば終わる。来てくれて嬉しかった、それだけでもう十分だから――そう告げて、定められた道に従えばいいだけのこと。
そうわかっている。わかっているのに動けない。自分からは言えない……言いたくない。
他の誰でもない、あの人にだけは、言の葉を偽りたくない。
母はそんな自分を無言で見つめていた。
親への挨拶もろくにできない娘をどう思っているのだろう。今も声が喉にからまって、言うべきことが出てこない。言えないようなことをしようとしているからだ。
まずは今回、鳥居家にかけた迷惑を謝って、母の立場を悪くしたことを謝って、そして今の

無礼を謝って。そして父上の言に従えないと、務めを投げ出すと——母に言えるのか。豊臣と徳川の危うい均衡の中、敵地真っただ中の鳥居家に嫁いできた母に対して、そんな身勝手なことを。

そんなことをすれば祖父だけではなく、母の顔にまで泥を塗ることになる。

涙で母の姿が霞む。

——泣いたってどうしようもないでしょ。泣いて事態が好転するわけでもなし。でもなにを言っても言い訳でしかなくて、謝っても許されることでないときはどうすれば。あのとき聞いておけば、あの人は教えてくれただろうか。

身動きの取れなくなった娘に、母は鮮やかな紅の唇からひとつ息を漏らして立ち上がった。あこはびくりと身を強張らせる。

隙のない化粧に大きな瞳。顔は小さいのに大輪の花のような人。

けれども立った母の背丈は、自分とさほど違わなかった。——こんなものだっただろうか。大きくなれば母のようになれると思っていた。けれど背丈は追いついても、もう嫁いでいるはずの年になっても、自分は自分のままだった。自分は母のようにはなれない。

母は近づいてくると、娘の首に両腕を回して抱きしめた。

「……あこ……」

この声、この香り、頭を撫でるこの手——覚えている。伊勢でのことだ。

事情のわからない自分を強く抱きしめた母。その腕の強さに、ああ、ここでお別れなのだとわかったから。伊勢の海の向こうに待つ現実が怖くて、自分は山へと逃げた——

あのときとおなじなのだろうか。自分はまた逃げようとしているのか。

ちがう。今回は怖さからではない。しかし、投げだすことには変わりはない。

心の中にあの人がいる限り、いくら泣いても涙は涸れてくれない。

嗚咽を漏らした自分の頭を、母は昔とおなじように撫でてくれた。

「——あこ、あなたはもう、鳥居家の姫としての務めは果たしたわ」

「母、さま……？」

「土佐殿からお聞きしたの。あなたはちゃんと先代様の言い遺されたとおり、あの方に別れを告げて、本当の許婚に会いに行って——再び出会ったのでしょう？」

一度は諦めかけた縁だった。それを三月に残ったみながつないでくれた——

「先代様の遺された務めは果たしたわ。それでもう十分。あとは望むところにお行きなさい」

「でも、そんなことをしたら母さまは……」

「私のことは大丈夫。——昔、あの人とお話ししたのよ。羽柴の業は私が背負うべきもの。あこは鳥居家の娘だと……おっしゃっていたのにね。いつしかその意味を取り違えられたのね」

娘を泣かせたりして仕方のない人ね、と母は薄く笑みを浮かべる。

あとで説教だわ、と聞こえたのは空耳だろうか。

母はあこの頬を手のひらで覆うと顔を覗きこんだ。その顔を記憶に焼きつけるように。

「なにを得るも失うもあなた次第よ。――あなたは心のままにお生きなさい」

――これが最後だと、わかった。

江州に発つ前にも別れは告げた。けれども江戸に戻ればたがいの上屋敷はすぐ近く、また会うこともあるだろうと心のどこかで思っていた。

しかし、嫁ぐというのは――他家に入るというのはそうではない。

現に伏見にいた頃も、江戸に下ってからも、母が生家に行く姿など見たことがなかった。

そこに居ることが生まれたときからあたり前であったかのように、母はずっと鳥居家の屋敷にいた。だからこそ、陰で羽柴の娘と言われながらも、正室として奥を支えてこられた。

自分は母に敵うものなどなにもない。けれどそんな母を見て育ち、その姿に教えられてきたものがある。

「――母さま、ありがとう」

最後に母の首筋に抱きつく。今日の日の思い出にこの香りを忘れないでおこうと思った。

あこは障子を開け放ち、素足のまま庭に駆け下りる。雪が足裏を受け止めてくれた。

先に目を留めたのは直継で、直継の意識が逸れたことを察した小一郎が目を見開いた。

小一郎が先に手を離したのか直継の集中力が勝ったのか、小一郎の刀が大きく撥ねあげられ、円を描いて飛んでゆく。

一息早く柄を離した小一郎の手が、あこに伸ばされた。その手が打掛の袖をつかむ。
小一郎と目が合った。――今までずっと、見守っていてくれた目だ。
刀を先に手放したのも、小一郎には自分が駆け寄る先がわかっていたからだ。
自分の気持ちを全部わかっていて、それでもすべてを受け止めようとしていてくれた。それに対する返事をなんと言葉にすればいいのだろう。
ありがとう？　ごめんなさい？　今までもらったたくさんの気持ちを大切にすることくらいしか、思いつかない。
泣きたい気持ちの方が強かったが、精一杯の笑顔を返して――あこは打掛から抜けだした。
「！」
打掛一枚を小一郎の手の中に残し、あこは直継に駆け寄る。
直継は刀を持つのとは逆の手であこを抱きとめた。
見慣れない直垂姿、それでもその香りはよく知るものだ。
――あなたに会いたかったの。ずっと。
あこが胸元にしがみつくと、直継はあこの頭を抱き寄せて、その場から〈転移〉した。

転移した先は見知らぬ屋敷だった。
床の間や違い棚が備えてあるだけのなんの特徴もない和室だ。
けれども、ここが井伊家の屋敷だという予感はあった。
闇を招く黄昏時だというのに、室内は清浄な〈気〉に満たされている。神社に参った時のような澄んだ空気だ。
直継はあこの首筋に顔をうずめたままだった。肩で大きく息を繰り返している。真剣勝負がよほど応えたのか、それとも――まさか。
「怪我をしたの!?」
あこは直継を引き離して全身を見てみる。――血は出ていない。
そのことに安堵しつつも視線を上げてゆくと。
(あ……)
――泣きそうな表情がそこにあった。
見つめ合ったのは一瞬、水中で空気を見つけたかのようにまっすぐに唇を奪われた。
直後、なにかを突き刺す音が聞こえたが、目を開けることができない。
きっと手にしていた刀を畳に突き刺したのだ――そうわかったのは、直継のもう一方の手が背中に回されたためだ。
離れていた月日を埋めるというにはいつもより荒々しく、生きていることを確かめるように

息が混じって、また強く抱きしめられてそのまま膝をついた。
「間合いに入るなど無茶なことを……っ」
首筋に落とされる言葉に、はっと胸を突かれた。
直継がとっさに斬り上げたから小一郎の刀はあらぬ方向に飛んで行ったが、気付くのが遅れていればどうなっていたか。
刀の間合いは、人の腕の長さも加えればかなりの距離がある。
刃が横薙ぎに弧を描くようなことがあれば、自分の身体に届いていたはず――
それを察して小一郎は柄から手を離し、直継が小一郎の刀を飛ばした。――二人ともが、自分の身を案じてくれた結果だ。
すぐ傍らに突き刺さる抜き身の刀、その流麗な刀身が自分の身を裂いていたかもしれないと思うと、今さらながら震えが襲ってきた。
「怪我はないな？」
うんとうなずくと、直継はようやく大きく息をついて、畳に刺した刀身を鞘に収めた。
「……ごめん……なさい……」
「いや、私こそ謝らなければならない。――遅くなって、すまなかった」
つづけて事情を話そうとする直継に、「いいの」とあこは首を振った。
直継の側には家老となった主馬がいる。四方八方どころか千手観音のごとく手を回す彼がい

てなおこのような手段に出なければならなかったこと、それだけで現実の壁の高さが窺える。
それに自分は最後まで言葉を信じきることができなかった。乗り越えたと思っていたのに、それでも最後には弱い自分が頭をもたげる。
それでも——そんな自分でも、必要だと言ってくれるなら。
「わたしは、右近殿の側にいたい」
その言葉に、直継が目を見開いた。
身分を失ってもいい。正室になれなくたっていい。姫という肩書きも名もなにもいらない。ただひとつ欲しいのは、心を偽らずにいられる場所だ。
「側にいさせて。ずっと」
その心を探るように直継がおそるおそる指を伸ばし、頬に触れる。
その直継の手に、あこは自分の手のひらを重ねた。冷たい手を、頬と手であたためるように。すると直継は手首を反して、逆にあこの手を奪い取った。
先ほどとはちがい、そっと触れる唇。
もう一方の手で頭を支えられながら、ゆっくりとその場に横たえられる。
それでもまだなにか信じがたいものを見るように見つめる眼に、あこは摑まれていた手の指を絡めて、微笑んで見せた。
直継は耳朶から首筋に顔をうずめる。あこの頬に直継の首筋が触れた。いつもはさらりとし



ている首筋が、いつになく汗ばんでいるのがわかった。真剣で斬り合ったのだから当然だ。身体すべてが清らかな水でできているように、合わせ香の香りしかしない。けれど香りとは別のなにかに酩酊感をおぼえた。

——わたしも、触れたいな。

そう思ったけれども唇が頤の下へと伝い、直継の首筋が遠ざかってゆく。

なにかを探すように首筋を伝う唇に、息が上がってくる。

こうして触れられるのは初めてではない。ふたりきりで過ごす時間で、猫がじゃれあうようにぬくもりを持ち寄った。

けれどもいま、祝言までは、と止めていたその先へ踏み出そうとしている。

その先のことはわからない。けれども、つないだ手を信じていれば大丈夫、そんな確信もあった。

——けれども、首の後ろにたどりつきかけたところで、ふと顔が遠ざかった。

覆いかぶさるようにしたまま、直継は身を起こす。

「……右近殿？」

「やめて、おこう」

「え？」

そのままつないでいた手も離れ、直継は完全にあこを解き放った。

「帰れなくなる」
「や……やだっ！　もう帰らない！」
なにもかも捨てるつもりで来たのに、それが伝わっていなかった？
そんなはずはないという思いと、いまの直継の言葉が頭の中で噛み合わない。
「もう離れるのはいやっ！」
起きあがって直継の袖にすがる。すると「手放すつもりはない」と片手で抱き寄せられた。
「だが、帰らないと帰れないは違うだろう」
「え……？」
「いまそなたを抱けば、そなたは本当に帰る場所を失うことになる。そなたの大切な故郷――家族を、捨てさせたくない」
望みは断ちたくない、と直継は告げた。
（わたしの、ため……？）
「そなたの父君と母君に挨拶はしてきたが、奪い取ったことには変わりはないからな」
予想外の内容に、道は険しいやもしれんが――とつづいていた言葉を思わず遮っていた。
「挨拶したの!?」
「ああ。一応な」
言って直継は自身を見下ろす。だから準正装の直垂姿だったのだと今さらながらに納得した。

「あっ！　斬られてない!?」
よく見ると、直垂の左の袖が数寸ばかり、すっぱりと断たれている。
「まさかさっきの斬り合いで……」
「いや、あいつじゃない。そなたの父君――左京亮殿だ。刀を抜かれた」
（刀を抜かれた、って……）
挨拶、と直継は言ったが、どうやら言葉どおりの穏やかなものではなかったらしい。
「母君には、なぜか妙に歓迎された。また来てくれと。なんでも、顔が好みらしい」
最後の一言にあこはがくりと力が抜けた。
（ああ、母さま面食いだものね……）
侍女たちの嫁ぎ先を考えてやるのも主人の務め、女の園に君臨する母は新しい小姓や若い家人の話に異様に耳聡かった。もはや恋愛相談の域を越えていた気がする。
（たしかにわたしだって好みだけど……ってまさか母さまの血!?）
自分にその気はないと思っていたが、外見も中身も似ていなくても自分はあの母の娘だ。好みが似ていてもおかしくない。
「孫をよろしくと頼まれた」
（そこは娘をよろしくって言って母さま……!!）
「……ごめんなさい、いろいろ難しい親で……」

両親のしでかしたことに項垂れると、追い打ちがかかった。
「いや。そなたの御両親だと納得した」
――もはや返す言葉が見つからない。
だが、と直継はあこに向きなおると、頬に手を添えて面を上げさせた。
「共に道を探そう。いつか認めてもらえるように」
ずっと側にいるから。そう言って優しく瞳が微笑んで。
「もう離さない」
抱き寄せられた腕の中で、そのぬくもりに涙が堰を切ったように溢れ、そんな自分をあやすように直継はずっと髪を撫でつづけた。

その晩、小一郎が鳥居家上屋敷に赴いたところ、当主忠政の小姓に出くわした。
ちょうど自分を呼びに行くところだったらしい。小姓は用を知っているのかいないのか、自分が抱える布包みを見やると、痛ましいものでも見るかのように眼を伏せた。
「お呼びにございましょうか」
入れ、との命に従って室内に入ると、忠政は苛立たしげに扇を弄んでいた。

すでに人払いはなされてあり、部屋には二人きりだ。
「あれは行ったか」
「――お引き留めできず、面目次第もございません」
「あやつめ、やっと動きよったわ。散々泣かせおってからに」
姫を泣かせたのはあなたでしょう、とは当主相手に言える立場ではない。
「事情はすでにお耳に」
「耳どころか、目の前に現れおったわ。前触れもなく現れて、一の姫をいただいてまいりますと、いけしゃあしゃあと挨拶してゆきおった」
さすがに小一郎もそればかりは予想外だった。
たしかに先ほどの直継は直垂姿だった。普段は羽織の略装で、直垂など将軍になる秀忠を迎え入れたとき以来だ。一応、姫の両親に礼を尽くしたつもりらしい。
「やるとも言っていないものを、勝手に連れ出しおってからに……！」
――その言を聞くかぎり、到底礼に適っていたとは思えなかったが。
「だいたいあの者は可愛げがない。頼ることを知らん。六月の一件もこちらを頼りもせず、一言もなく決めよって。婚礼前で婚家ではなかったにしろ、石見殿は儂の義兄だぞ？」
それで拗ねたわけですね、とも主君相手には言えない。
あこは一の姫、その婿は忠政にとって初めての娘婿だ。忠政自身の男児はまだ生まれたばか

り、義理とはいえ息子となる相手に頼ってほしかったのだろう。
それに忠政は、井伊直政には小姓時代から世話になっていたらしい。縁談が生じた経緯は辛い思い出だが、遺された縁談自体は喜んでいたことを知っている。
「采女にしてもそうだ。取り立ててやると言ったのに帰りよってからに」
六月の一件で、采女は鳥居家に迷惑をかけた旨を報告するとともに謝罪に来た。
兄の主馬は家督を継いだものの、家宰の座は守勝に譲り、采女もまた御側役の任を解かれたのだという。
忠政は甥である采女に、鳥居家に仕えないかと話を持ちかけた。もし采女が受け入れていれば、将来、自分とふたりで鳥居家の家老として家を支えていたかもしれない。
だが采女は断り、江州に戻った。
知己である小一郎も采女の説得を命じられていた。だが引き留めることはできなかった。
江州滞在中に采女の追い腹未遂の件は人伝に耳に入っていて、彼はこの挨拶を最後に、騒動の始末として腹を召すことで今度こそ追うつもりだと——わかったから。
その覚悟を前にして、自分にはどうすることもできなかった。
しかしどういう経緯があったものか、直継は采女をつなぎとめることに成功し、いま采女は一門としてそれなりに遇されているらしい。
「井伊家の御家騒動は江戸でも持ちきりです。当家の出方が衆目を集めているのもまた事実。

これで当家が離縁を取り下げれば、鳥居家は井伊家を許したといういい宣伝になりますね」
婚礼の許可を井伊家に利用させてやるつもりだろう。
そう仄めかすと、忠政は渋い顔を見せた。
「……そなたとの話は本心だったのだからな」
「――存じております」
「亡き父上のご遺志には逆らえぬ。だが儂はそなたを婿に迎えたかった」
「痛み入ります。なれど御縁はいただかずとも、務めに一心に励む所存なれば」
婿にならずとも自分はずっとここにいる――そう示すと、忠政は嘆息を漏らした。
それでもやはり婿に欲しかったらしい。婿に一体なにを期待しているのか聞きたいところだ。
「そなたには良縁を見つけてやる」
二の姫あたりどうだと言われそうな気がして、小一郎は忠政に先んじて布包みを差し出した。
その包みの中にあったのは、緋色の打掛――彼女が残していったものだ。
「私には許嫁がおりますれば、平に御容赦のほどを」
「なに？」
「井伊家との離縁の件はそのままに。お取り下げ願い出ないでいただきたい」
忠政は、唖然として見やった。
狂れたとでも思っているのだろうか。目の前で彼女を失ったことで、なにかが切れたのかと。

それほどまでに今の自分はおかしく見えているだろうか——もっと苛立ちなり悲しみなり感情的でいるほうが、今の自分にふさわしい振る舞いだったかもしれない。

けれども自分の無力さなら、もっと容赦なく突きつけられたことがある。

——泣いている彼女を前になにもできなかったときより、よほどましだ。

「当家がふたりの縁を認めることで、御家騒動の一件は流すことができるでしょう。ですが姫の出自の解決にはなりません。姫には一生羽柴の名がついて回ります」

関ヶ原の戦から五年。家康が将軍となり、将軍の位は二代秀忠へと受け継がれ、豊臣との溝は深まるばかりだ。この均衡はおそらく彼女が存命中に破られる。

「しかし離縁が成れば、井伊家にいる彼女は鳥居家の一の姫ではない——すなわち、羽柴縁の姫ではなくなります」

自分は彼女の姿をずっと見てきた。

笑った顔も泣き顔も、その業に耐える様子も、心閉ざした姿も——そして彼女の決意も。

最後の瞬間、彼女から言葉はなくとも伝わった。

自分が彼女に幸せになれと言った。彼女はその言葉を叶えに行くのだとわかったから、そのために不要なものを排除するのが、自分が彼女にしてやれる最後のことだ。

「一の姫は高須家に再嫁——それですべて収めていただきたい」

忠政は目を見開く。

鳥居家の一の姫は高須家に再嫁した。ならば江州にいる彼女はもはや一の姫ではない。何者でもない彼女に、鳥居家も井伊家家人も何人も手出しできなくなる。

彼女は羽柴の枷から解放される。あとは彼女の従兄たちがなんとでもしてくれるだろう。

「そなた……」

忠政はなにか言いかけて、やがて長いため息を落とした。

「……わかった。一の姫――篠は、高須家に遣わす」

その言葉に小一郎は恭しく打掛を受け取った。

「謹んでお受けいたします」

「――しかしまた、奥に話をせねばならんな」

「奥方様がなにか？」

すると忠政は、渋い顔で恨みがましく睨みつけた。

「あやつめ、儂だけではなく奥にも挨拶してゆきおったのだ。顚末を話さぬわけにもいくまい」

直継と彼女が消えてから、中屋敷に奥方様――あこの母がいたのはそういう理由らしい。

おかげで話がややこしくなったではないかと、忠政は愚痴をこぼす。

鳥居家では代々、奥方の力が強い。先代元忠の正室は主君家康の従妹姫、その両親の力関係を見て育った忠政がその空気を一新できるはずもなく、奥方優位の力関係は綿々とつづいてい

る。

きっと、忠政の機嫌が悪いのは八割方は奥方のせいだ。大方、説教でも食らったのだろう。惚れた弱みもあるにしろ、策士な奥方に忠政は頭が上がらない。

「奥にはきっちり話をしておく。――しかしなんだ、側室の相談なら乗るぞ？」

今しがた娘を与えたばかりの相手にその話か、と小一郎は苦笑を洩らしそうになった。

「いえ。奥向きのことは正室の差配に従わねば家中が乱れますれば、御遠慮申し上げます」

当てつけたつもりはないのだが、「ぬけぬけと言いよるわ」と睨めつけられた。

「しかし、あれも変わらなんだな。婚家に入り、少しはしとやかになって帰ってきたかと思いきや……譲らぬあたり、父そっくりだ」

亡き先代、鳥居彦右衛門元忠。

元忠とあこは、忠義を尽くす相手が違っただけで、その想いの強さはまちがいなく。

「父の血だな……」と、忠政は嘆息を漏らした。

徳川がしようとしていることと、その矛盾。

彼女にかぎらず、その疑問を抱いている者は多い。けれどもそれを言える者はいない。

徳川家に目を付けられぬよう、薄氷を踏むように、息を殺して幕府の動向を見守っている。

そして家康が豊臣を絶やすと言えば、諸大名はその疑問を呈することなく黙々と従うだろう。

大義に殉じる心の灯が失われた――それこそが戦の世が終焉した証であるのかもしれないし、

今もどこかで人知れず、静かに灯りつづけているのかもしれない。

それがふたたび燃え上がるのが、豊臣攻めのときなのだろうか。

江州は京を間に挟んで大坂の向かい側だ。井伊家は徳川方の先鋒として、いやがおうにも戦に巻きこまれる。

「だがあやつは、守ると言いよった。わざわざ乗り込んできてまで言い置いたのだ。それだけは果たすだろうよ」

小一郎は静かに眼を閉じる。まだ瞼の裏には白刃の軌跡が残っている。

刃を交わしたからこそわかる気迫。

あの覚悟があるならばそれだけは違えないだろう。――違えさせるつもりはない。

そのとき、廊下から家人が客の訪いを告げた。井伊家からの使者だという。

忠政は、来たかとばかりに小一郎にいたずらめいた視線を送る。

「源十郎、そなたも同席するか？」

小一郎は即答を避け、家人に問いかけた。

「ご使者はどなただ」

「井伊家ご家老、鈴木主馬正様にございます」

その答えに、小一郎は息を飲んだ。

あこ奪還が当主の独断にしては、対応が早すぎる。しかも家老が来たとなればそれは単なる

使者ではない。彼の言葉は井伊家の意思そのものだ。
（すべては計算の内……か）
どのような策を練ってきたものやら、しかし鳥居家当主の断はすでに下っている。
「采女につづいて、次は主馬か」と忠政は笑みを浮かべていた。
裏をかかれた主馬の顔を見てみたい気もしたが、甥との語らいを邪魔するのも野暮だろう。
小一郎は「私はこれにて」と一礼して、御前を辞した。

廊下に出ると、雪が降っていた。
真白な雪、白刃が閃く中に駆けてきた緋色の衣――きっと一生忘れられない思い出だ。
小一郎は手にしていた打掛に視線を落とす。
自分の手に残ったのはこの緋色の打掛ひとつ。
けれども、この屋敷には大切な思い出がたくさん残っている。
この家、この屋敷、彼女につながるこれらすべてが、自分がこれから守ってゆくものだ。
小一郎はじっと打掛を見つめていたが、ただひとつの願いを胸に、そっと口づけを落とした。

――空蟬の君よ、幸せで、あれ。

間章

光のどけき・結

江戸からの使者として直孝が挨拶口上すると、上座につく兄は驚きを隠せずにいた。

――また、自分が来ることは伝わっていなかったらしい。

彼女は時機がよくなかったと言っていたが、これだけ続くと誰の悪意かと勘繰りたくもなる。

しかし、今日はちゃんと兄がいる――それだけでも良しとすべきだろう。

まだ夕時、夜まで間があるが、幕府の使者ということで歓待の宴が催されるらしい。

一時ほど広間で宴があり、陽も暮れて宴も酣となったあたりで場が崩れ、直継は上座から降りた。ようやく機会がめぐってきたと直孝は後を追う。

夕涼みというにはまだ時季が早いが、兄は廊下の一角に腰をおろして、花を見上げていた。

一年前とはあきらかに変わった兄の面差しに、直孝はすこし戸惑いを覚える。

想像していたのと違う――いや、外見が多少変わっていようが、毎日ちゃんと練習した成果はあるはずだ。自分は大丈夫だと、懐にある御守りに念を込める。

「――このあたりにはまだ花が残っているのですね」

出だしは噛まなかった！　心の中で強く拳を握りしめる。

兄は自分が傍らにいたことに気付いていたのか、桜から視線もくれずに答えた。

「道中はもう終わっていたか」
「尾張まで東海道を来たのですが、道すがらの花は終わっていました」
「江州は山国だからな。だが、これもそう長くはあるまい」
だから惜しむのだとばかりに直継は花に見入っている。
そして思い出したように「そなたも飲むか」と誘い、小姓に酒を用意させた。
自分の膳には大根や蕪の煮もの、玄米が盛ってある。
対して兄の膳に載っていたのは、塩と漬物、煮魚が少々といったところだ。
「毎日ちゃんと食べておいでですか」
「背は伸びたぞ」
この年なら縮むことも止まることもないのだから伸びるしかない。直孝も伸びている。
「以前ほど差はないだろう。おまえこそ食べてないんじゃないか。ちゃんと休んでいるか？」
ずいぶん兄の口数が増えている。兄に気遣われてしまったのが予想外で戸惑ったが、この人に言われたくはないとも思った。
「酒の肴だけではもちますまい。なにか……そう、握り飯でも持ってこさせましょうか」
「いや、いい。いつもこんなものだ」
この人は水と太陽の光で栄養を作れるに違いない、そう確信した。
「用件はなんだ。話したいことがあったのだろう」

用がなければ話しかけてはいけないのか。まずはこの関係から改善の余地がありそうだ。

しかし用があったのも事実なので、直孝は話を切り出した。

「一の姫の高須殿への再嫁を、公儀が認めました」

無論、直孝も姫奪還の話は聞いているし、今も彼女はこの愛宕屋敷内にいるはずだ。

しかし攫った井伊家も、攫われた鳥居家も、その事実を否定した。一の姫は当主の命により高須家に再嫁したとなれば、奪還の件は根も葉もない噂だったということになる。

そしてそれを公儀が認めたなら、それが社会的な事実だ。

これ以上、彼女に関する追及はない。それは兄にとって喜ばしい報せであるはずなのに、兄の表情は優れなかった。

「――主馬め、便乗したな」

苛立ちまじりの呟きを落とし、直継は不意に立ち上がった。

「兄上？」

「奥に戻る」

「え……」

まだ酒は来たばかりだ。せっかく話す機会だったというのに、彼女の話は鬼門だったか。

たしかに彼女の身柄はこちらにある。しかし彼女の名や肩書きは高須源十郎に奪われた形だ。

そしてそれが彼の姫への心尽くしだと気付いてしまったから、腹立たしく思えるのだろう。

この場にいないながらも兄の心を放さない彼女が、正直孝も腹立たしかった。
年に一度の機会くらい、時間を分けてくれてもいいだろうに――
しかし当主を呼びとめるわけにもゆかず、直孝は、お休みなさいませと手をついた。
「そなたも早く休め。今朝は早かったのだろう」
公儀の使者であることをいいことに、伝馬を使って清洲から一日で駆けてきた――が、それももはやどうでもいいことだ。
しかし思いがけない言葉が続いた。
「江戸では気が休まらんだろう。久しぶりの実家だ。ゆっくりしていけ。続きは明日だ」
（明日……）
――今日はなくとも明日がある。
その一言に、「はっ」と答える直孝の声は、知らず大きなものになっていた。

おなじころ、主馬は守勝と共に別の一室で酌み交わしていた。
「江戸でのお勤め、ご苦労にござったなぁ」
「若さだけはありますからね。力仕事なら任せてください」
十二月に江戸に下ってあこを奪還してから、一月には将軍への正月参賀、それから他家との

調整があり、主馬が江州に戻ってきたのはついこの間のことだ。

自分は二十歳を越えたばかりだが、対する守勝は齢五十。江戸の往復などさせられない。

「調整役を力仕事とおっしゃいますか。いやはや頼もしいかぎりですな」

「連日接待で飲んで食ってですからねぇ。そりゃ体力勝負ですよ」

おかげでしばらく粗食にしないと、と主馬は自身の頬をつまんで見せる。

「十分細うございますよ。主馬殿はもうすこしお食べになった方がよろしいですな。

――して、姫君の件は？」

「御名を捨てていただきました。それで手打ちにしてくれるというのに、乗っからない手はないでしょう」

主馬が鳥居忠政に会いに行ったところ、直継が連れて行ったのは一の姫ではないただの侍女、娘ならまだ屋敷にいる――そう忠政が空とぼけたので、主馬もそれならばと家老ではなく忠政の甥として、鈴木家に侍女をあと二人ばかりもらいうける話だけつけて帰ってきた。

主馬があまりにあっさり引いたので、それでいいのか？　と忠政は怪訝そうな顔をしていたが、それで丸く収まるなら忠政の策に乗っかるまでだ。

「姫ひとりならまだ姫の身分のままなんとかなるとも思ったんですけどね。事が御子に――次期当主に関わるとなれば、放っておくわけにもいかないでしょう」

羽柴の縁というだけで嫡子の候補から外されたのはあこだけではない。直継の妹姫に縁談が

来ている伊達家もそうだ。各大名家は徳川家の目を憚って、羽柴との縁を切ろうと努めている。しかし直継は彼女と子を生す気があるらしい。となれば、事は井伊家嫡子の出生に関わる。嫡子の生母が羽柴縁の娘であっては困るのだ。忠政の言は渡りに船だった。

「左京亮殿が引かねばなんとするおつもりだったのですかな」

「なんとでもしますよ。自分の描いた道筋どおりに世界が流れるなんて、そんな傲慢なことは思っていませんので」

「ですが、主馬殿はいつも危なげないご様子ですが？」

「いくつも抜け道を用意しているだけです。根が怖がりなんでね」

今の自分しか知らない人から見れば、笑い話で流されることだろう。

しかし守勝は自分の幼いころから――それこそ自分自身でも覚えていないような昔から、自分のことを知っている。そんな相手に繕っても仕方がない。

「いつだって綱渡りですよ」

最悪の結果を覚悟しつつ、偶然に助けられていることが圧倒的に多い。

思い返すと震えがくる出来事もある。けれど。

「！」

そのとき守勝の手が伸び、自分の頭の上に収まった。

守勝はそのままよしよしと撫でる。――とても他の家臣には見せられない姿だ。

「……俺、もう子どもじゃないですよ」

それに一応、家老なんですが。そう主張してみるが、守勝は眦を下げるばかりだ。

「年の差ばかりは何年経とうと縮まりませぬゆえなぁ。時々は子どもで良いでしょう」

——そう。そういうあたり前のことをあたり前に言ってしまえるのがこの人だった。

かつて彼女を子ども扱いして自分がやったこと、それも全部守勝の受け売りだ。

守勝に育てられ、支えられて、今の自分がある。

「——よく頑張られましたな」

〈力〉を失くし、自分の中の生きる意義が一変して、ああこれが運命だというなら采女に嫡子の座を譲って、このまま消えるのもありかななどと思いもした。

けれど、そんなことを言ってくれる人がいるから、いまの自分が運命に逆らっているのだとしても、もう少し頑張ってみるかなと思ったりもする。

弟がおなじ淵に立ったときも、この人ならばと預けてみれば、やはりちゃんとこの世に引き留めてくれた。

自分たち兄弟が、まっすぐでないながらもそれなりに立っていられるのはこの人のおかげだ。

きっと守勝も、大人からもらったなにかが積み重なって、今の彼があるのだろう。

そうやって時を越えて、繋がってゆくものがある。

「……長生き、してくださいね」

うつむきがちに落とす声。
時は万人に流れ、人の命を容赦なく押し流す。そのことを、もうわからない年ではない。けれども、一緒にいられる今くらいは本心で――子どものままでいさせてほしい。
そんな自分のわがままに、守勝は「しかたのない御方ですなぁ」と笑って頭を撫でつづけた。

縫い目が見にくいと思って顔を上げると、辺りは夕闇に包まれていた。
「え!?　もう夜!?」
かやが時折室内をうろうろしていたのは感じていた。縫い物に集中していた自分に気を利かせて、早めに灯りを入れてくれたのだろう。
あわてるあこに、部屋にやってきたしのがさらに追い打ちをかけた。
「右近さまが奥にお渡りになるそうですわ」
「もう!?　今日は宴って聞いてたのに！」
まだ夕刻をすぎたばかり、いつもならこれから宴が始まるくらいの時刻だ。
「掃部さまの到着が思いのほか早かったのかもしれませんわね」
「姫さま、今日はずいぶん進みましたねー。縫い目も綺麗ですし」

あこの縫いかけの白小袖を覗きこむかやを、しのが窘める。
「かや、もうその呼び方はおやめなさいと言ったでしょう」
「えー、でもお屋敷の中だけですし」
「お呼びするなら『御方さま』になさい」
「でもぉ……」
「ちょ、ちょっと待って！　わたしは別にどうでもいいから」
どちらかと言えば、御方さまのほうが気恥ずかしい。
しかし、「そういう問題ではございませんわ」と逆にしのに詰め寄られてしまった。
「奥を仕切るには、けじめが大切です。そのためにはまずは形を疎かにしてはなりません」
（けじめって言われても……）
そもそもの話、自分は『御方さま』ではない。
御方さまと呼ばれるには、せめて一夜なりとも共にしないと――いや、一夜越え事件らしきものはあるにはあったが、それは完全に周囲の誤解だ。
姫という肩書きを捨て、篠という名を捨て、『御方さま』未満の今、自分はただの居候だ。
しのとかやは、どう話をつけたものやら、鈴木家が身元を引き受けるという名目で主馬がもらいうけてきてくれた。やはりいろいろ抜け目のない人だ。
「――って、今はけじめよりも片づけをしないと！　右近殿が来ちゃうってば！」

「そうでしたわね！」
ばたばたとあわただしく針や糸を片付けていると、部屋には見覚えのないものがあった。
――人形が増えている。
衣装や髪型から察するに、おそらくしのとかやとたま、そして主馬と采女と守勝だ。采女人形だけ投げやり感を覚えるのは気のせいだろうか。
愛宕屋敷の人形たちはみんな笑っていた。
そこに小一郎人形がいないことにすこし安心しつつも、一抹の寂しさも覚える。
だが人形のすぐ側で、使いかけの濃緑色の端切れが目に留まった。濃緑の衣の人形はいない。
なにに使ったのかと思っていたら、「ダメです！」とかやに奪い取られた。
背を向けたかやの、恥じ入った顔――
（まさか……？）
今日一日のかやの言動を思い返してみても、ずいぶん小一郎をかばっていたような気がする。
しかしそれを自分が訊くのは無神経すぎる気がして、あこは気付かないふりをした。
気忙しく薄青の羽織を私室に持ち帰り、ゆっくり畳む間もなく隣室の小さな葛籠に入れたところで、直継が現れた。
「お帰りなさいませ」
間一髪だったことをひた隠して、ゆっくりと指をつく。

「ずいぶん早かったのね。掃部殿がいらしたのではなかったの？」
「今日は直孝も疲れているだろうからな、早く休ませた」
「そう……」
江戸から出てきたせっかくの機会なのに、話をする時間は取れたのだろうか。
たしかに江戸からの道のりで疲れているだろうが、二人が会えるのは年に一度あるかないかだというのに。しかし、
「しばらく滞在していくそうだ。明日もある。急くことはあるまい」
その言葉にあこは安堵の息を吐いた。
「そういえば、部屋の前にこれが落ちてたぞ」
その言葉になにか不吉なものを感じるあこに、直継が懐から出したものは。
「やっぱり……！」
――またもや、見覚えのある姫人形だった。
（呪われてる!?　呪われてるわよねその子に!?）
今までは直継人形の下に現れていたのに、今度は人形に飽きたらず本人の前に現れた。
放置すれば、そのうちなにかとてつもない妖しになるのではないだろうか――
その想像にあこの背筋をひやりとするものが駆けのぼったが、直継は冷静そのものだった。
「この部屋にいるんだろう。あれが」

「え？　……あれ？　あれならかやたちの部屋に……」
しかし直継は、姫人形を手にしたまま迷いなく隣室へと向かう。
そして襖を開け放つと、急いで閉めたためにすこしずれていた葛籠の蓋をどけた。
そこに入れたのはたしか――
「見ちゃダメ――――!!」
あこはあわてて駆け寄るが、もう遅い。
直継は葛籠の中に手を入れると、手妻のようにもう一体の人形を取り出した。
（あ、あら……？　あ、あの羽織に挟まっていたの？）
衣がおなじ青系の色だったので、あわてて一緒に持ってきてしまったらしい。
それでひとり取り残された姫人形が、またもや追ってきたというわけだ。
「ね、ねぇ、その人形やっぱりおかしくない……？」
直継は物にはすべて念が宿っているというが、その人形の執念はもう十分妖しの域だ。
しかし直継は、「ああ、これはすごいぞ」と感心することしきりだった。
「なにしろ、佐和山から江戸まで行こうとした強者だからな」
「江戸って……あの江戸!?」
「ああ。そなたがこっちを江戸に持って帰っただろう。それをこやつが追おうとしてな。おかげで脱走するこやつを閉じ込めておくのが難儀した。しかし江戸への方角はしっかり合ってい

たぞ。もしかしたら私より〈力〉が強いかもしれんな」
あこはひきつった笑みを浮かべることしかできなかった。
（それってもう十分妖しなんじゃないの……？）
さすがあやかし屋敷に十年以上もいる人形、そこいらのものとは年季が違う。
せっかくお目付役にしの人形を作ったが、作られたばかりの新米では敵わないのも当然だ。
「おかげで江戸では役に立った。そなたの居場所がすぐにわかったからな」
「えっ、そうだったの!?」
「これに任せて、行きたがるところに〈転移〉した」
普通ならば、姫は上屋敷にいる。あこ自身も育ったのは江戸城近くの上屋敷だ。
しかしあこは習いに反して中屋敷にいた。そんな自分をすぐに探し当てることができたのは、この人形のおかげだったらしい。妖し人形にも意外な使い道があったものだ。
「ところでここに羽織が入っているが、直し終わったのか？」
「そ、それは！」
どうしても欲しくて、古着を勝手にもらったものだとは言えない。
「新しい衣はがんばって縫ってるから、もうちょっと待ってて！」
話をはぐらかすと、直継は「そうか」とすぐに納得した。
「まだ飲み足りないな……そなたも飲むか？」

「あ、わたし、まだお夕飯をいただいてないんだけど……」
「一緒に食べればいい」
「いいの？」
食事は各自の部屋で済ませるのでいつも別だ。特に直継は、当主として毒見役が幾人もついていて、膳の管理は厳しい。
しかしあこは、伏見にいたころ離れで父と母と三人で食事を取っていた。そのときのことが思い出されて、失ったものにかすかに胸が痛んだが、それ以上に嬉しかった。
直継には酒の肴、自分の前には夕食の膳が並べられる。
まだ湯気の立った煮付けは、しっかり奥まで味が染みていて、あこは顔をほころばせた。
鳥居家の料理人と比較するわけではないが、やはり食べる状況次第で味まで変わる。
そんなあこを直継は、杯を手にじっと見つめていた。
「な、なに？」
「いや……美味そうに食べると思ってな」
「うん、とても美味しいもの。右近殿も食べる？」
さすがに食べ掛けを渡すわけにはいかない。侍女を呼ぼうとしたところ、直継に止められた。
「いや、そなたが食べている姿を見ているだけでいい」
「そう……？」

人が食べるのを見ているだけでお腹が膨れるのだろうか。不思議な体質だ。
直継はさも興味深そうに、自分が食べる姿を眺めている。
その視線を意識すると作法の至らなさを見つけられそうで、箸の動きがぎこちなくなった。
(落ち着かない～～～！　……そうだわ、御酌しなきゃ！)
あこは箸を置いて打掛の裾を引くと、直継の傍らに寄って銚子を傾けた。
「お酒、美味しい？」
「そなたも飲むか？」
「うん、ちょっとだけ」
もらおうかしら――そう言う前に、注いだばかりの杯に口を付けた直継に引き寄せられた。
寄せた唇からほんの少し、舌先に乗るくらいの酒が唇から注ぎ込まれる。
驚きのあまりそのまま飲みこんでしまい、味わっている間もなかった。
酒のせいか、恥じらいのせいか、胸の奥から一気に熱を帯びる。
(ずるい……)
もっと飲むか？　と勧められてももう、はいともいいえとも言えないではないか。
顔が熱くなるのを抑えられなくて、胸の中から逃げ出そうとも思ったが、直継はあこを手放そうとしない。
飲みこんだ酒を追うように唇を寄せ、奥深くまで追ってゆく。執拗に求めるその感覚に身を

委ねていると、意識が朦朧としてきた。
身体から力が抜けてゆき、お酒のせいかなと思いながら、抱き寄せられるままに寄り添う。
熱った頬を夜風がなでてゆき、直継の胸に添ったまま開け放たれた庭を見やると、昇りはじめたばかりの月の傍らで桜が舞っていた。
はらはらと舞い散る姿はいつもよりゆっくりとして、ともすれば時の止まった襖絵のようにも見えた。まだ頭の中がぼんやりしているらしい。
「――一年、だ」
「え？」
「そなたがいなくなってから」
（え……あ、今日って……）
三月十七日。一年前、直継に別れを告げた日だ。
直継にとっては一ヶ月半の空白の時間のはじまりであり――ふたりが再び出会うためのはじまりの日でもある。
「そなたがいなくなって……あの日は、ずっと花を見ていた」
「花を？」
「散りゆく花を見て、いくら願っても時は止まらないのだと思って――それで今日もまた表座敷で花が散っていて……そなたに、会いたくなった」

「あ……」

思わずうつむく。酒宴から早々に戻ってきたのは、自分のせいだったらしい。

あこは直継の胸に顔をうずめながら、胸の奥でこっそり直孝に詫びた。

（あれから一年――）

「じゃあ、今日は佐和山で過ごす初めての三月十七日なのね」

この日から五月に戻って、再び出会い、これからはずっと一緒にいられると思っていた。

しかし山を覆い尽くすような紅葉も、身の丈がうまるような雪も、一緒に見ることはできなかった。

直継の衣を縫ったり、人形にあわてふためいたり、一緒に食事を取ったり、そんな毎日はもはやあたり前のように感じていたけれども、まだまだ初めてはたくさん残っている。

そして明日もつづくそのあたり前の毎日は、とても幸せなもののように感じられた。

「また、今日からよろしく……ね？」

あこは直継の胸の中から見上げ、照れ隠しにすこしいたずらめいて告げる。

すると、胸が詰まるほど強く抱きしめられた。

「これからは共にいよう――ずっと」

満ちた月、散りゆく花の下、隔たれていた時を埋めるようにふたりは口づけを交わした。

あとがき

こんにちは、九月文です。本巻は佐和山物語の番外編です。
再録は雑誌掲載分2本のみ、今夏の雑誌分は収録されておりません。他は書き下ろしです。
作品内の時系列順に紹介がてら思い出語りをば。ネタばれご注意下さい。

■本編1巻『あやかし屋敷で婚礼を』
受賞作。投稿にあたり枚数に収めるため1割削ったのですが、出版にあたり、枚数オーバーですと言われてさらに2割削りました。行間のぎゅうぎゅうさに苦心の痕が滲んでいます。

■掌編「はじまりの予感」（2巻発売時のおまけペーパー）
1巻でのエピソード、直継があことたまの諍いを仲裁した後、あこに泣いて自室に逃げ込まれた直継は……？　「彼女を泣かせた」という直継の一言に、守勝と采女がびびるお話。

□番外編「あやかし屋敷のひなまつり」（The Beans VOL.13 初出）……本巻収録
かわいいお話を、ということでほのぼの日常話にしようと思ったら、なぜかぷちホラーになりました。下ろし髪のラフ画が素敵だったので、髪を結っていない直継、二度めの登場です。

□番外編「時を揺らす春風」（書き下ろし）……本巻収録
ひなまつりはあこ主体、こちらは采女主体に同じテーマで描いた作品です。微妙なすれ違いが六月につながっていた模様。六月の事件の後の、采女から直継への誓紙が現存しています。

■本編2巻『あやしの文と恋嵐』
小一郎登場の巻。おさななじみ属性のない私に、前担当さまがアニメ「タッチ」について何時間も熱く語ってくださいました。小一郎の幸運値が低いのは、あこに幸せを分け与えすぎたからだと思います。……君に幸あれ。
□番外編「触らぬ姫に祟りなし」(The Beans VOL.14 初出)……本巻収録
西軍を書いていいよとお許しが出たので、本編であまり書けなかった左近を中心に。ふよふよしている五助とか、苦労人な兵庫とか、チーム西軍の面々を書けて嬉しかったです。
■番外編「言えない言葉」(限定小冊子初出)
3巻1章の後、あこの口から小一郎の名を聞きたくないと告げる直継。そんな湖畔デートを主馬とたま、守勝が遠目に温かく眺める話。これが3巻のあのセリフにつながるんですね、というお手紙をいただき、そこまでしっかり読んでくださる方がいるんだなぁとじんときました。
■本編3巻『結びの水と誓いの儀式』
小一郎回収&秀忠さんいらっしゃい前編。直政の幽霊? と思われていた直孝への誤解は解けたものの、別の誤解が生まれた巻。あいかわらず小一郎の幸運値が低いです。
■本編4巻『君と別れのくちづけを』
秀忠さんいらっしゃい後編。初めて、内容タイトル共にプロットどおりに書かせていただけました。2巻で直孝との語らいまで収まるはずが、鳥居家サイドの挿入でこんな後に。2巻か

らずっと謎な青年だった直孝、ごめん。照れる直孝のイラストがとても可愛かったです。

■本編5巻『時の花嫁とはじまりの歌』

あこ帰還の巻。直継の身長が伸びました。それとニューヒロイン比紗登場……のはずが。

担「あこちゃんは？」私「いません（きっぱり）」担「ダメです（にっこり）」

……そりゃそうですよね（汗）。というわけであこの出番が増えた分ヒロインになりそびれた比紗、ごめん。いつかリベンジさせてあげるからね、と思っていたのですが……話は空蟬へ。タイトルの「はじまりの歌」は1巻1章1行めのあれで、すべてのはじまりです。

■番外編「姫の噂も十月十日」（The Beans VOL.15）

新担当さまとの初作品。世の中も二人もこれから夏だねーという雰囲気で夏満喫です。ちび直継の外見は斎と同じ、ちっちゃいなりでぱたぱた走り回っている姿をご想像下さい。

□空蟬の君（書き下ろし）……本巻収録

せっかく夏！　世の中夏なのに……!!　話は一気に冬に。比紗のリベンジならず。六月の御家騒動が飛んでいるので、人物関係がころっと変わって「あれ？」と思われたかもしれません。両家の確執は有名だったようで、直孝の具申で鳥居家改易が決まったときも、これが遠因か？　と新井白石に疑惑を持たれていたり。あいかわらず誤解されやすい性格だった模様です。

空蟬のモチーフは源氏物語。そういえば空蟬って見たことないなぁと思い、蟬と共に生きる友人幸嬢に頼んだところ、脱皮の様子をこと細かに報せてくれました（いつもありがとう！）。

空蟬って源氏物語では羽衣に似た儚いイメージだったのですが、実際は……。かなり生々しくて、できればあまり見たくないシロモノでした。興味のある方は覚悟してご覧下さいませ。

□光のどけき（書き下ろし）……本巻収録

序章と間章、そして終章という形で挟み込んであります。モチーフは紀友則の歌。限定小冊子分が収録されなかったので、守勝と主馬のやりとりは初お目見えの方も多いかと。

□白き猫の招きにて（書き下ろし）……本巻収録

ご興味がある方は「招き猫」の由来を調べてみてくださいませ。意外な名前が出てきます。出家はしなかったものの、このお寺には直考とその直系子孫の直弼のお墓があります。

「来年、彦根で祭りをするらしいよー」と聞いて、面白そうだなと書きはじめたのが本作でした。投稿時にはまだ始まってもいなかった祭――彦根城築城四〇〇年祭は、1巻発売前に大盛況で幕を閉じました。そこで生まれたひこにゃんは今も彦根城をはじめ各地で愛されていますし、終幕後も歴史イベントが次々に開催されています。地元が活気づくのは嬉しいですね。学生時代、なにげなく毎日通っていた彦根城ですが、上京してからの方が想いは強くなりました。あたり前の日常の中にあるもの、でもかけがえのないもの。それが家族だったり故郷だったりするのかな、と思いながら、新たな家族と故郷を得るために嫁ぐ彼女の物語を書きました。

あこと言えば、直継のお寺でいただいたご朱印を持ってあこの墓参りに行ったところ、急に雨が降ってきたんですよ。見上げれば雲ひとつない青空。なのにどこからともなく降る雨。そ

の日は夕陽が出ているにも拘らず、雨が降りつづけていました。ああ会いたかったんだね、と温泉宿から夕陽を眺めていました。彼女が天災体質で泣き虫なのはこのためだと思われます。

最後になりましたが御礼を。久織さま。ご多忙の中、拙い新人作品に素敵なお仕事をして下さりありがとうございました。装丁さま。タイトルロゴのデザインや色使いが可愛くて、毎巻楽しみにしていました。5巻ではサブタイトルの背景色が琵琶湖カラーで嬉しかったです。

新担当さま。ページ数がどうしようもない苦境を救って下さり、ありがとうございました。断章までたどりつけたのは新担当さまのご尽力のおかげです。大変感謝しております。

お手紙を下さった皆さま。執筆中は皆さまの温かな想いを糧に生きていました。4巻告知のペーパーは、ずいぶんお待たせしてしまった分、愛情てんこもりでお返しできればと思います。

そしてここまでお付き合い下さった皆さま、作品を愛して下さった皆さまに感謝を。皆さまのおかげでここまで続けてこられました。本編五年前、東軍と西軍が激突した関ヶ原の戦い。戦は東軍勝利となりましたが、徳川と豊臣の関係はこじれてゆき、本編約十年後には大坂の陣で徳川方が豊臣を滅ぼします（吉継の娘婿、真田幸村（信繁）の健闘が有名ですね）。

江戸幕府が開かれてもまだまだ世は戦国、徳川と豊臣の水面下での争いの中、直継とあこも波瀾万丈ですが、互いを信じて、不器用なりに精いっぱい生きたと思います。

また再び、皆さまとお目にかかれることを祈りつつ。

九月　文

断章

白き猫の招きにて

今日は朝からずっと、ぐずついた空模様だった。
武蔵野の大地を曇天が覆い、その下に吹く風は寒の戻りにふさわしい冷たさで、このまま夜になれば吹雪くのではないかとすら思われた。
直孝は馬上で天を仰ぐ。このまま落ちてきそうな空だ。
自分が生まれた日も、もう桜が開きかけの時季だというのに雪が降ったと聞く。とはいえ、事情を知る者がこの世にいない以上、もはや嘘か真かを確かめる術はないのだが。
水神の加護を得る者――自分がその血を引いているのは事実だ。だが、「そろそろ降るな」と想像するのがせいぜいで、それは天を読む者の勘にすぎない。
しかしその勘は的中し、ほどなく大きな雨粒が笠を叩きはじめた。
その雨は想像以上に激しく、あっという間に周囲の景色は閉ざされた。
自分に付き従っている者は十人ばかり、だが視界が閉ざされ、すぐ近くにいる者二、三人を確認するのがやっとだ。
「殿、雨宿りなさいますか」
そうは言っても鷹狩りの最中だ。いるのは獣ばかり、ちかくに民家があるはずもない。

しかしこの雨では馬の足元すらおぼつかない。江戸城下の屋敷まで帰るのは無理かと、直孝はとりあえず近くの森に入って時を待つことにした。

森の中は大樹の枝葉が雨を遮り、直接天から叩きつける世界とは色を画していた。

従者全員がはぐれずにいることを目で確認して、直孝は遠い空を見やる。

単なる通り雨かと思ったが、厚い雲が絶える様子はない。

そんな雲の下、はるか遠くに灰色の世界を割るものが見えた――春雷、だ。

二呼吸ほど間をおいて、地響きのような音が伝わってきた。

その後も大気の唸りが空を覆う。

日没まであと一刻ばかり、この様子ではここで夜を明かすことも覚悟しなければならない。

野宿は戦の基本だ。なんの苦でもない。豊臣との戦から十年あまり、それ以後大戦はなかったが、野宿もできないような従者を連れているつもりもない。

探せ、と側近に伝えると、一晩越せそうな場所を求めて数名の者が連れだって隊を離れた。

天を割る雷鳴が、あの日の銃声の記憶を呼び起こす。

(そう、あれからもう十年……いや、二十年ちかくになるのか)

和睦を求める豊臣秀頼を大坂城の一角に追い込んで、申し出は受けられないとの返事の代わりに撃ち込んだ銃弾――その豊臣終焉の響きがいまも耳から離れない。

国を、天下を――そして家を守るためだった。後悔はない。

けれども、その平安の世を当然のように享受する者たちがどれほど多くなったことか。安寧に身を浸しすぎては、いずれまた世は乱れる。

「――殿」

枝葉をたたく雨音の合間から、探しに出たはずの側近の声がした。

「あばら屋なれど、雨風が凌げそうな場所がございました」

ずいぶん気温も下がっている。馬の鬣はしとどに濡れて、体熱が湯気となって立ちのぼりそうだ。選り好みしている時ではない。案内を申しつけ、先導させる。

「こちらにございます」

連れられた家屋は、古びた寺だった。

廃寺といってもおかしくない風情で、人はいるものかどうか、崩れかけた門からは窺い知れない。

門扉も閉まりきっていないような有様だが、一応下馬した方がいいかと直孝は視線を落とす。すると、敷居の前になにかがいた。

――白猫だ。

木々の幹と雑草の新緑に包まれる中、そこだけ別世界のものであるかのように、雨水に汚されることのない真白の猫がいた。

いや、まさにその猫は別世界の存在だった。その白猫の瞳を、自分は知っている。

碧緑の瞳――しかしこれが彼女ならば、今は兄と共に上州にいるはずだ。このような江戸のはずれの廃寺にいるはずがない。

（単なる偶然か？）

京の公家はもちろん、最近では江戸でも猫を飼うのが流行っている。たいていは三毛やまだらだが、時にはこのような真白なものもいて、重宝されている。

「ここでよろしければ、休んでゆかれますか」

「いや……寺があるなら近くに民家もあるだろう」

真白な毛に碧緑の瞳――偶然にしては出来過ぎだ。

なつかしさよりも不安が立ち、直孝が馬の首を返しかけたそのとき――光が世界を裂いた。

あまりの眩さに目を閉ざす。

同時に響きわたったのは大地を揺るがす轟音、そしてなにかを裂くような音だった。

直孝が目を開けてみれば、ほど近くの木が雷に打たれて真二つに割れていた。

いまにも燃え上がりそうなそれは、叩きつける豪雨の中で白い煙を立てている。

直孝はほっと寺の門をふり返ると、猫は雷にまったく怯えた様子はなく、それどころか笑ったかのようにさえ見えた。余裕の表情で、前足で顔を撫でている。

「……ここで休んで行こう」

よろしいのですか？　と従者は問うが、直孝は答えることなく下馬した。

——誘いを断れば殺される。

それは漠然とした予感であり、その判断に満足するかのように白猫は門から忽然と姿を消していた。

廃寺と思われた寺だったが、ちゃんと住職はいた。

「この雨では難儀なさったことでしょう」

年老いた住職は招かざる客の訪れを歓迎し、十分なおもてなしもできませんが、と言いながらも泊まってゆくことを勧めた。

湯を借りて雨水を洗い流して戻ると、膳の準備がされていた。

その給仕にきた年端のゆかない娘を見て、直孝は確信した。

——これは腹をくくるしかないようだ。

早々に休むと告げて直孝が一室に下がると、その娘は閉ざされた部屋にどこからともなく現れた。

「お久しぶりね。元気にしてた？」

「ええ、おかげさまでなんとかやっております」

危うく先ほどは落雷で死にかけましたが、などと言った日には、この場で殺されかねない。

「たまさまもお変わりなく。……あの、兄上は……」

こんな形で無理やり呼びとめられたのだ。まさかという想いが一瞬よぎったが、
「元気にしてるわよ。あの娘もね」
その言葉に直孝は安堵の息を落とした。
「そういうあなたこそずいぶんしけた顔をしているじゃない。疲れてるの？」
「……世の中も移り変わっておりますから」
「なによ。息子を頼むと言われたんでしょ」
大御所として権勢を振るっていた秀忠が世を去り、天下は三代将軍家光の手に移った。
秀忠の片腕だった直孝は家光を補佐するよう言い遺され、今は家光の側近くで仕えている。
――だが。
「務めが辛いならここで出家していきなさいよ。それとも追いたいの？」
なんなら介錯してあげるわよと言わんばかりの口ぶりに、直孝はかすかな笑みを落とした。
――久々に笑うことができた。秀忠公が亡くなって以来のことだ。
「私にはまだ、すべきことがありますから」
「そうね。あなたの喪でさらに祝言が延びたら可哀そうだもの。しばらくはやめてね」
しばらくは。――あいかわらず自分は、父の余剰でしかないらしい。
直孝の嫡男靭負佐直滋と、直継の娘の祝言はすでに決まっている。後は日を固めるだけだ。
それを思うと、とても死んでいる場合ではない。孫の顔を見なければ死ぬに死にきれない。

「それにしても、よく凌ぎましたね」

あれから――彼女が佐和山に戻ってから、豊臣と徳川の関係はさらに悪化した。

兄直継は、表立って父に逆らえない秀忠の意を汲んで豊臣との接触を図り、関係改善――せめて現状維持するよう努めたが、ひとつの現実が命運を定めた。

豊臣秀頼に男子が生まれた――しかも、千姫以外の女との間の子だ。

豊臣側はひた隠しにしたが、徳川の目から逃れられるものではなく、家康は豊臣攻めを決意した。娘の千姫のために豊臣存続に尽力していた秀忠も、もはや庇いようがなかった。

直継は豊臣存続派として三成たちと協調路線を取っていたが、大坂攻めが決まったことで、井伊家の軍は直孝に預けて、自身は怨霊との決戦に臨んだ。

怨霊との戦いは冬の陣で決着がつき、豊臣派として目を付けられていた直継に代わり、家康直々に直孝が当主となるよう命じられた。再三拒んだが大御所の命を断れるものではなく、直孝が江州を継いだ。

翌年の夏の陣は怨霊の後ろ盾と堀を失った裸城を攻めるだけだった。

豊臣の息の根を止めたのは、直孝自身だ。

秀頼の助命嘆願を一蹴し、逃げ込んだ櫓に銃弾を撃ちこんだ。櫓は炎に包まれて御首級は確認できなかったが、秀頼と生母の淀の方は自害して果てたという。

豊臣秀頼は家康の主――しかし直孝は主君殺しの汚名を負うことで、豊臣と通じているので

はという井伊家への嫌疑を打ち払った。
「あなたこそよく堪えたじゃない。てっきりあなたは当家寄りだと思っていたわ。特にあなたは秀忠の側近だったわけだし」
豊臣との決着がつくまで井伊家は豊臣存続派として、徳川寄りの家臣との争いが絶えなかった。しかし直孝は徳川寄りの家臣に頼られながらも、表立って井伊家家中の内政に乗り出すことはなかった。
「江戸から見ていて歯がゆかったでしょ。よく関与せずにいたわね？」
「あの方に言われたんですよ。自身の立場を思い出せと」
――これから当家は当家の道を行く。それは先代様の御遺志に背くことかもしれない。
――けれど君はなんのために木俣殿が徳川家に送り込んだか、よく考えて。
――鼎の脚として支えるのは家臣の役目。けれど、君はちがうからね？
「井伊家と徳川の橋渡しではない――いざというときの柱になれと、そう受け取りました」
家臣として支えるのは他の者にもできる、だが井伊家の名を継げるのは自分だけだと、そう遠回しに告げられて。
あの人は、己がやろうとしていることの危うさを知った上で、もし為しえなかったときのことを考えて次善の策を打っているのだとわかったから、自分は徳川への忠義の道を貫いた。
「そして大御所様に私を売りつけたら、上州がお釣りにきたそうです」

初耳だったのか、たまは目を見開いて聞いていたが、「あの馬鹿……！」と漏らした。
直孝が江州を継いだことで直継は隠居となるはずだったが、大御所家康との取り引きの結果、上州安中の領主となった。
安中は直孝の故郷でもある。父直政が亡くなるまでそこで生活していた。
山間に碓氷川が滔滔と流れ、出湯が涌き、穏やかに暮らすにはもってこいの地だ。
「ときにあの方はお元気でいらっしゃいますか」
「うちのことはどうでもいいのよ！　うちのことは！」
うちを家――鈴木家と読み替える。
主馬は直継と共に江州から離れ、今は上州にいる。無論、たまもそうだ。
相変わらずらしいと笑みをこぼすと睨みつけられ、そして反撃とばかりに爆弾を落とされた。
「あなたの義娘になる小姫、あの娘にそっくりだから覚悟なさい」
直孝は思わず咳きこんだ。
直継には子が二人、一男一女がいる。
先に娘の小姫が江州で生まれたが、直継が当主の頃に生まれたとなると直孝への家督相続が面倒な話になるので、上州に移ってから生まれた男児の出生届と共に届け出がなされた。
届けに添えられた生母の名は、いわ。
――鳥居家の手前、本名じゃ出せないからさ。

とあの人は言っていたが、それでも実家の領地〈磐城〉から取ったのは冗談かあてつけか。彼女は『なんかわかんないけど、おいわさんは嫌〜〜〜!!』と泣いたらしいが後の祭りだ。

「しかもあの娘とちがって、こちらは正真正銘の山猿育ち。しかもあの馬鹿が手塩にかけまくって育てた娘だからね？　引っ掻きまわされるわよ。覚悟なさい」

「……靭負によく申しつけておきます」

豊臣が滅亡してから世は徳川一色、徳川家の威光が増し、それを批判するような言動にはさらに厳しい世の中になった。

有事の際は井伊家と藤堂家がその先鋒たれと、神君家康公は言い遺されている。

その徳川の剣たる家に入る以上、昔のように勝手をさせるわけにはいかない。彼女の娘には我慢を強いることもあるだろうが、成った泰平の世を守り通すのが井伊家の務めだ。

その覚悟で視線を上げると、たまの静かな瞳とぶつかった。

たまはしばらく凝視していたが、「じゃあ帰るわね」と立ち上がった。

「……たまさまの御用件は？」

なにも、イノシシ娘だから注意しろと伝えにきただけではあるまいに。

しかしたまは、直孝を見やるとふんと鼻を鳴らした。

「今の顔を見たらすっきりしたわ。どうもまだ秀忠のことを引きずっているように見えたから、出家するならここをお薦めしようと思って。ここの住職は悪い人じゃないわよ」

それで寺に案内したのだと言われて、直孝は言葉を失った。
確かに新将軍の家光と反りがあわないのは事実だ。靭負に家督を譲り、出家することも考えなかったわけではない。
だが、父から――兄から預かった家を守りつづけるのが自分の務めだ。
するとたまはふ、と微笑んで、
「その覚悟があるなら大丈夫でしょ」
そう言葉を残して姿を消した。
誰もいなくなった室内に、雨音が落ちる。
雷は去り、穏やかな雨が降りしきる――まるで自分を見守っているかのように。
直孝は古びた畳の上に拳をつくと、この場にいない相手に深々と頭を下げた。
「――この命に代えましても」
するとどこからともなく、任せた、と声が聞こえたような気がした。

〈主な参考文献〉

「新修彦根市史」彦根市史編集委員会・編（彦根市）
「山形市史」山形市市史編さん委員会、山形市市史編集委員会・編（山形市）
「安中市史」安中市市史刊行委員会・編（安中市）
「侍中由緒帳」彦根城博物館・編（彦根市教育委員会）
「井伊軍志」中村達夫・著（彦根藩史料研究普及会）
「水戸鈴木家の歴史」鈴木重一・編（鈴木重一）
「鳥居元忠」和田兼三郎・編著（鈴木正夫）
「新編藩翰譜」新井白石・著（人物往来社）

〈初出〉

あやかし屋敷のひなまつり　The Sneaker 2009年9月号増刊「The Beans VOL.13」
時を揺らす春風　書きおろし
触らぬ姫に祟りなし　The Sneaker 2010年3月号増刊「The Beans VOL.14」
空蟬の君　書きおろし
光のどけき　書きおろし
白き猫の招きにて　書きおろし

BEANS BUNKO

「佐和山物語 桜色の時はめぐり」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「九月文」先生・「久織ちまき」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」までお寄せください。

佐和山物語（さわやまものがたり） 桜色の時はめぐり（さくらいろのときはめぐり）
九月文（くつきあや）

角川ビーンズ文庫 BB68-6 16487

平成22年10月1日 初版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――暁印刷 製本所――BBC
装幀者――micro fish

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-454506-2 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Aya KUTSUKI 2010 Printed in Japan

9784044545062

ISBN978-4-04-454506-2
C0193 ¥552E

定価：本体552円（税別）

1920193005523

BEANS BUNKO

佐和山物語
桜色の時はめぐり

九月 文

戦国の世が終わり間もない時代。時を超えた恋を成就させた大名家の姫あこと、許婚（いいなずけ）の井伊直継（いいなおつぐ）。平和が訪れたのもつかの間、あこは自分のひと言が原因で、実家に戻されてしまう。さらに、幼なじみの小一郎の許嫁にされてしまい!?（「空蟬（うつせみ）の君」）直継の守り役の采女（うねめ）が傷を負ったため、あこの侍女のしのが通いで手伝いをすることに。不器用な二人の心の行方は…!?（「時を揺らす春風」）